み-3-40

ストライク・ザ・ブラッド9
黒の剣巫
三雲岳斗
電撃文庫

9784048660235
ISBN978-4-04-866023-5
C0193 ¥590E
1920193005905
ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス
KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA
定価: 本体590円
※消費税が別に加算されます

ストライク・ザ・ブラッド 9

黒の剣巫

STRIKE THE BLOOD

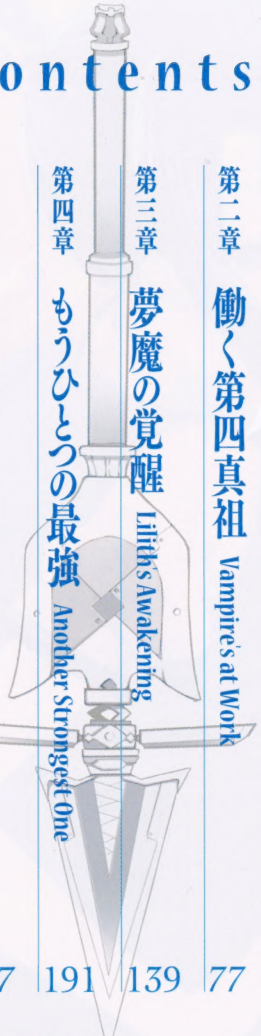
三雲岳斗
illustration マニャ子

姫柊雪菜［ひめらぎゆきな］
『剣巫』Swords・Shaman
獅子王機関の可憐な監視者
暁古城［あかつきこじょう］
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

藍羽浅葱［あいばあさぎ］
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生
江口結瞳［えぐちゆめ］
『夢魔』Succubus
幼気な〝夜の魔女〟の後継者
暁凪沙［あかつきなぎさ］
『真祖の妹』Sister of Primogenitor
天真爛漫な騒々しき賢妹

煌坂紗矢華［きらさかさやか］
『舞威媛』Shamanic War Dancer
優美に舞う魔弾の射手
妃崎霧葉［ひさききりは］
『六刃』Six-Blade Priestess
横暴にして美貌の黒き魔槍使い

Contents



序　章　Intro　11

第一章　楽園の島　Blue Elysium　29

第二章　働く第四真祖　Vampire's at Work　77

第三章　夢魔の覚醒　Lilith's Awakening　139

第四章　もうひとつの最強　Another Strongest One　191

第五章　裁きの王　Sword Of The Judgement　247

終　章　Outro　321

あとがき　334

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

アクリルガラスの窓の外には、濃密な闇が広がっていた。
深海の夜——
息苦しいほどの静寂と冷気が、チタン合金の船体越しに、ジワジワと肌を締めつけてくる。
投光器が照らし出しているのは、雪のように降りしきるプランクトンの死骸だけ。陽光の届かぬ深海底へと、潜水調査艇〝イスルス〟は降下を続けている。
「潜行深度は？」
いらついた口調で質問したのは、青い潜行服を着た艇長だった。民間の潜水調査会社に所属する彼は、十年近い潜行経験を持つベテランだ。本来は軽口を絶やさない陽気な性格の男だが、今日はひどく機嫌が悪い。殺伐とした怒気すら撒き散らしている。
そんな艇長の態度に辟易したように、若い操縦士が事務的に答えた。
「四千メートルを超えました。潜行限界まで残り二千五百メートルです」
「……本当にこんなところに沈んでいるのか？　例のヤツは？」
ふん、と艇長が不愉快そうに鼻を鳴らす。
彼らが調査を依頼された紘神島東方沖の最深部は、水深九千メートルを超えている。現状、その深度まで潜れる潜水艇は数えるほどしか存在しない。いわば人類にとって禁断の領域だ。
「神話の時代の生体兵器か……そんなものの残骸が、このあたりで見つかるって噂の出所はなんだ？　どうせ根拠のない伝説の類だろう？」

「どうですかね。案外、半魚人あたりに教わったのかもしれませんよ？」
「……半魚人？」
「ははっ、冗談ですよ。ただ、今回の依頼主は〝魔族特区〟の企業なんでしょう。だったら、その手の知り合いがいても、べつにおかしくないなって」
「たしかにな。ついでに、このくだらん調査も、そいつらに頼んでくれればよかったんだ」
吐き捨てるようにそう言って、艇長は深々と溜息をついた。
太古の時代に造られたという生体兵器の痕跡——それが今回、〝イスルス〟に依頼された捜索対象だった。あまりにも馬鹿げたその仕事の内容が、艇長の不機嫌の原因だ。
そもそも潜水調査艇〝イスルス〟の建造目的は、深海生物の生態系や、進化の仕組みを調査することである。実在するかもわからない骨董品の発掘は、明らかに本来の役目ではない。
「なんにせよ、これだけの費用をかけて探すほどのものとも思えんな。噂じゃ、〝天部〟の連中が遺した古代兵器も、特区警備隊にあっさりぶっ壊されたらしいじゃないか」
「黒死皇派が紘神島に持ちこんだ例のやつですか？　まあ、噂と言うなら、あれを破壊したのは、実は第四真祖だったって話もありますからね……だとしたら、あんまり古代兵器を過小評価するのもどうかと……ん？」
探索用のモニタをのぞきこんでいた操縦士が、ふと戸惑ったように眉をひそめた。
艇長が、怪訝な表情で彼を見る。

「どうした？」

「地形データに不整合が出てますね……これなんですけど、わかります？」

操縦士が指し示したモニタには、CG処理された海底の地形が表示されていた。3D映像で再現されているのは、過去の調査で得られた地形データ。そして目の粗いワイヤーフレーム画像は、〝イスルス〟のソナーがとらえたリアルタイムの情報だ。本来は、一致しているはずの二種類のデータに、奇妙なズレが生じている。

海底が、幅数キロメートルにわたって、わずかに盛り上がっているのだ。

「変温層によるソナーの誤作動ってわけでもなさそうだな。海底が異常隆起してるのか？」

「いえ……この海域に火山活動の徴候は出てません。それよりも、この形……まるで、なにかの生物みたいな……」

「生物？」

青ざめた操縦士の横顔を睨みつけて、馬鹿な、と艇長がうめきを洩らす。しかし、モニタに映し出されたソナーの解析画像は、その間も、刻一刻と揺らめいて不規則に形を変えていた。それはたしかに、海底を這い進む生物の姿に見える。

全長数キロメートルにも達するワニか蛇――あるいは巨大な龍の姿に。

「こんな生物がいてたまるか……でかすぎる……これじゃあ、まるで……本当に神話の怪物そのままじゃないか……！」

懸命に自らに言い聞かせる艇長の隣で、突然、操縦士が悲鳴を上げた。

その直後、潜水艇を襲ってきたのは、爆発の衝撃にも似た激流だった。

海面下四千メートルの水圧を伴う、強烈な深海波――

海底近くに出現した荒々しい渦が、〝イスルス〟を木の葉のように翻弄して荒れ狂う。操縦席を保護する耐圧殻が、激しく軋んで悲鳴を上げる。

その渦の源は、確認するまでもなく明らかだった。怪物だ。海底に沈んでいた巨大な怪物が、わずかに身体を動かした。ただそれだけで、周囲に凄まじい衝撃波を発生させたのだ。

「せ……生体魔力のパルスを確認！　こいつ……生きてやがる……！」

必死で座席にしがみつきながら、操縦士が叫ぶ。

全長数キロメートルに達する、超巨大海中生物。あまりにも非常識で馬鹿げた存在だ。だが、それは現実に彼らの目の前に出現し、圧倒的な破壊と恐怖を撒き散らしている。

「回避……！　緊急回避だ！　浮上しろ！」

艇長がたまらず絶叫した。しかし〝イスルス〟の船体は海中で激しく振り回されて、上下の感覚すら失われている。緊急浮上用のバラストはすでに切り離されているが、この荒れ狂う渦の中では、ほとんど効果はないだろう。

そして次の瞬間、巨大ななにかに挟みこまれたように、〝イスルス〟の動きが静止した。

不気味な震動とともに船体が砕ける。耐圧殻が異音を放つ。

「た、耐圧限界を突破！　船が圧壊します――」
「この水深で……だと!?」
操縦士の悲鳴に、艇長は息を呑んだ。〝イスルス〟の潜行限界深度には、この状況でもまだ余裕がある。特に乗員の安全を考慮して、耐圧殻は水深一万メートルの水圧にも余裕で耐えるように造られているのだ。その〝イスルス〟の船体が、巨大な力によって押し潰されていく。
「て、艇長！」
「まさか……」
船外を照らしていた投光器が破壊され、周囲は闇に包まれる。その直前、最後の光が浮かび上がらせたのは、岩塊にも似た無数の牙の列――
潜水艇〝イスルス〟をとらえていたのは、巨大な怪物の顎なのだ。
「まさか、喰われているのか……俺たちは……!?」
艇長が呆然と呟きを洩らした。
その言葉が声になる前に〝イスルス〟の耐圧殻は砕け散り、海水の冷たさを感じる間もなく、彼らの意識は、深い闇の底へと沈んでいった。

†

月齢一。既朔の夜――
迷路のように入り組んだ地下道を、彼女たちは走り続けていた。
一人はひどく小柄な少女だ。年齢のわりに大人びた印象ではあるものの、顔立ちの幼さは隠しようがない。おそらく、まだ小学生。十一、二歳といったところだろう。
彼女が身に着けているのはセパレートの青い水着と、その上に着たぶかぶかのパーカーだけ。ビーチサンダルすら履いていない裸足の踵が、痛々しくすら感じられる。
「まだ、走れる？」
その小学生の手を引いていたのは、十六、七歳ほどの背の高い少女だった。
すらりと長い手脚に優美な顔立ち。色素の淡い長い髪を、ポニーテールに結い上げている。
彼女の右手に握られているのは、分厚い刃を持つ銀色の長剣だ。特別な訓練を受けているのか、相当な距離を走ってきたはずなのに、彼女は呼吸ひとつ乱していなかった。
「はい……でも……」
水着姿の小学生が、頼りなく答えて立ち止まる。
彼女たちの行く手を遮っているのは、銀色の鉄格子で造られたシャッターだ。魔獣の逃走を防ぐための頑丈な鉄格子は、非力な少女たちの腕力でどうこうできる代物ではない。
だが、その堅牢なシャッターを平然と眺めて、ポニーテールの少女は微笑んでみせる。

「心配しないで。あなたを必ずここから逃がしてあげる。それが私の任務だから」

そう言って彼女は、銀色の長剣を振り上げた。行く手を阻むシャッター目がけて、無造作にそれを振り下ろす。力をこめているとも思えない、舞うように優雅な太刀筋だ。

それだけで彼女の目の前の鉄格子が、数本まとめて切断された。

シャッターに生じた隙間はそれほど大きくもなかったが、彼女たちがすり抜けるには十分だ。

ポニーテールの髪を揺らして、少女は静かに長剣を下ろす。

「お姉さんは……いったい？」

水着姿の小学生が、幼い顔立ちに驚きの表情を浮かべて訊いた。ポニーテールの少女は、シャッターの隙間をくぐりながら振り返り、少し得意げに笑ってみせる。

「――煌坂紗矢華。獅子王機関の舞威媛よ」

「舞威媛？」

「大規模な魔導災害や魔導テロを阻止するための特務機関のエージェント……そうね、わかりやすく言えば、正義の魔法少女、みたいなものかな」

芝居がかった口調で言いながら、紗矢華がドヤ顔で胸を張る。

小学生は、そんな紗矢華を無表情に眺めて、どこか冷淡に溜息をついた。

「魔法少女ですか……はあ……」

「あ、あれ!? もしかして呆れられてる!?」

「あの、それより、警備の人に見つかりましたけど？」

自分を子ども扱いする馬鹿な大人をあしらうような態度で、小学生が指摘する。

うぐぐ、と紗矢華はひとしきり落ちこんだあと、気を取り直したように顔を上げた。警備員たちのいる方向に向き直り、銀色の長剣を水平に構える。

「だ、大丈夫よ。でも、少しだけ下がってて」

一歩前に踏み出しながら、紗矢華は、握っていた長剣を変形させた。銀色の刃が前後に割れて百八十度回転し、近代的な洋弓の姿へと変わる。獅子王機関の試作型可変制圧兵器〝六式重装降魔弓〟の本来の姿である。

紗矢華は、スカートの下に隠していたホルスターから伸縮式のダーツを取り出し、それを伸ばして矢に変える。

「〝煌華麟〟！」

洋弓の弦を引き絞り、紗矢華が銀色の矢を放った。

それは通常の矢ではなく、轟音を生み出す鳴り鏑矢だ。人間の声帯や肺活量では不可能な、高密度の呪文詠唱を実現するための特殊な呪矢――ただし普通の人間が相手なら、その爆発的な大音量は、それだけで十分な脅威となる。

放たれた轟音と衝撃波が狭い地下道に反響し、待ち伏せしていた警備員たちを、まとめて薙ぎ払うように昏倒させる。呪矢はそのまま真っ直ぐに飛翔し、地下道の出口の扉を撃ち抜いた。

「すごい……」

目の当たりにした呪矢の威力に、小学生が感嘆の声を出す。彼女の素直な反応に、紗矢華はホッと救われたような表情になって、

「まあ、これくらいは当然なんだけど。魔法少女だって言ったでしょ」

「は？　ただの呪術ですよね？　それでも普通にすごいと思いますけど」

冷たい口調で言い返されて、うぐぐ、と紗矢華はその場に背中を丸めてうずくまった。と、そんな紗矢華の表情が、不意に真剣なものへと変わる。

「あなた、泳げる？」

地下道の出口の先には、幅十メートルほどの狭い水路があった。人工島内に張り巡らされた観光用の運河である。その運河を渡ってしまえば、この施設の外に出られるはずだ。

幸いなことに運河の流れは穏やかで、泳いで渡るのも不可能ではない。強引に施設の正門を突破するよりは、おそらく危険も少ないだろう。

「泳ぐのは得意です。五十メートルは泳げます」

水着の少女が、誇らしげな表情を浮かべて答えてくる。

紗矢華は安心したようにうなずいて、一枚の薄い金属板を取り出した。それは彼女の掌の上で形を変え、小さな鳥の姿に変わる。呪術によって仮初めの命を吹きこまれた式神だ。

「よかった。じゃあ、悪いけど、先に行って。運河を渡り終えたら、あとは安全なところまで、この子が案内してくれるから」

「……お姉さんは？」

「すぐに追いつくから心配しないで」

洋弓を剣の形に戻して、紗矢華は強気に笑ってみせた。それから、ふと思いついたように、彼女は胸元から一枚の写真を取り出す。一度、乱暴に引き裂いたあと、セロハンテープで丁寧につなぎ合わせたという、持ち主の心境の変化と、複雑な経緯を感じさせる写真である。

「……だけど、もし私と合流できなかったら、この男に会いに行って」

「暁古城……さん？」

紗矢華から写真を受け取った小学生が、怪訝そうに首を傾げて訊き返す。

写真に写っていたのは、高校の制服を着た少年だ。裏面には彼のプロフィールらしきものが、暗殺に必要な情報という名目で、詳細に書きこまれている。

「ええ。馬鹿でいやらしくてあちこちの女の子にすぐに手を出す真性の変態で馬鹿だけど、ま、まあ、多少はいいところもあるっていうか……」

「――お姉さんの恋人ですか？」

言い訳がましく説明する紗矢華を、醒めた瞳で見上げて小学生が訊いた。

その瞬間、紗矢華は顔を真っ赤にして勢いよく首を振り、

「こっ!?　こっ……!?　ち、違うんだけど、まだ、そんな……！」

「……まだ？」

「そ、そうじゃなくて、そいつはただのおまけというか、つまり、その男を監視してる天使のように可愛い女の子が、きっとあなたのことを助けてくれるから――！」

「そうですか……あの、余計なお世話ですけど、たまには自分の気持ちに素直になったほうがいいと思いますけど」

「だからそういうんじゃないってば！　と、とにかく、早く行って！」

冷静にアドバイスしてくる小学生を、紗矢華は激しくうろたえながら、無理やり運河のほうへと押しやった。水着の少女は、無言で嘆息。爪先で水温を確かめたあと、意を決したように運河へと飛びこむ。

泳ぎが得意という小学生の言葉は、あながち誇張でもなかったらしい。危なげのないクロールで、彼女は対岸へと進んでいった。

「……さて、と」

少女の背中をしばし見送ったあと、紗矢華は剣を構えて背後に視線を向けた。

紗矢華たちが通ってきた地下道の奥から、誰かの足音が聞こえてくる。水着の少女を連れ戻しに来た追っ手だろう。しかし追跡者の気配はひとり分だけ。規則正しい靴音には、奇妙な余裕すら感じられた。

「小学生に説教されるなんて、獅子王機関の舞威媛も形無しね」

やがて姿を現した追跡者が、かすかな笑いを含んだ声で言う。

追跡者の正体は若い女。おそらく紗矢華と同年代の少女だ。

古風な長い黒髪に、身に着けている高校の制服も黒。暗がりの中でもはっきりわかるほどの美形だが、世を拗ねたような目つきのせいか、どことなく冷たい印象を受ける。

「あれは彼女の誤解なんだけど……！　って、聞いてたわね!?」

敵意をあらわにして紗矢華が唸った。黒髪の少女は、そんな紗矢華を見返して失笑する。

「不法侵入者が、立ち聞きされたくらいで文句を言うのは筋違いね……そうではなくて？」

「犯罪者に開き直られる筋合いもないんだけど？」

紗矢華はそう言って、剣の切っ先を少女に向けた。

黒髪の少女は武器を持っていない。それでも眉ひとつ動かさず、剣を構える紗矢華に向かって近づいてくる。まるでいつでもかかってこいと、紗矢華を挑発しているような態度だ。

「ちょうどいいわ。あなたたちクスキエリゼが、あんな小さな子を監禁してなにをしようとしていたのか、問い詰めたいと思ってたところよ」

紗矢華は剣を青眼に構えたまま、静かに間合いを測っていた。

あと一歩。黒髪の少女が次の一歩を踏み出した瞬間、紗矢華の攻撃は彼女に届く。

いかなる防御をも空間ごと斬り裂く、〝煌華麟〟の攻撃が――

「獅子王機関の六式重装降魔弓……疑似空間切断術式を刻印した、制圧兵器の試作品ね。たし

かに強力な武神具だけど――」

黒髪の少女が不意に足を止め、上品に微笑んだ。その直後、たん、と軽く床を蹴る音がして、彼女の姿がかき消える。

「えっ!?」

先に攻撃を仕掛けてきたのは、黒髪の少女のほうだった。一瞬で紗矢華の懐へと潜りこみ、おっとりとした物腰とは裏腹の、凄まじい膝蹴りを叩きつけてくる。

紗矢華は、両腕でかろうじてその攻撃を受け止めた。当然、剣は使えない。相手の接近を許したせいで、武器による攻撃範囲の優位性を完全に無効化されている。

「この距離では、六式での攻撃は不可能ね？」

黒髪の少女が、紗矢華の耳元で囁いた。紗矢華はなにも言い返せずに歯軋りする。〝煌華麟〟の疑似空間切断は、敵と密着したこの状態では使えない。強力すぎる空間の亀裂が、術者である紗矢華自身をも傷つけてしまうからだ。

「くっ！　だったら――！」

相手の連続攻撃をかいくぐって、紗矢華は呪符を取り出した。戦闘用の式神を造るための、金属製の薄板だ。しかし式神に呪力を吹きこむ前に、少女の手刀が紗矢華の左手を襲った。衝撃で紗矢華の手首が痺れ、呪符がバラバラと宙を舞う。

「舞威媛の装備は、呪詛と暗殺に特化している。単独での近接戦闘は不得手ね。違って？」

矢継ぎ早の攻撃を繰り出しながらも、少女は饒舌に語りかけてくる。

楽しんでいる、というよりは、友人相手に模試の答え合わせをする受験生のような雰囲気だ。

そうやって紗矢華の戦闘能力を、値踏みしているようにも感じられる。

「――そうとも限らないんだけど！　響よ！」

少女の攻撃を受け流して、紗矢華は練り上げていた呪力を放出した。

紗矢華の手を離れて舞っていた呪符たちが、一斉に猛禽へと姿を変える。ナイフのように鋭利な爪と嘴を持つ、金属製の猛禽たちだ。

「圧縮詠唱による遠隔発動……なるほど、さすがね……！」

式神たちの襲撃を受けて、黒髪の少女が背後へと飛びすさる。同時に六体もの式神が相手では、さすがの彼女も紗矢華に近づけないのだ。

その隙に紗矢華は、〝煌華麟〟を再び洋弓へと変形させた。

腹立たしいが、接近戦では相手のほうが一枚上手だ。式神たちが黒髪の少女を引きつけている間に、呪矢による衝撃波で一気に彼女を無力化する。

たとえ魔術で防御しても、〝煌華麟〟の直撃に耐えられるのは、南宮那月クラスの魔女か、吸血鬼の真祖くらいのものだ。武器を持たない黒髪の少女に、紗矢華の攻撃は防げないはず。

これで終わり――と、紗矢華が弓を引き絞る。

黒髪の少女の全身から、裂帛の気合いが放たれたのは、その直後のことだった。

「――火雷！」

彼女を襲っていた式神たちが、透明なハンマーで殴られたように一斉に吹き飛んだ。

弾丸のように凝縮した高濃度の呪力を使って、少女が式神たちを撃ち落としたのだ。

「なっ……!?」

紗矢華が咄嗟に呪矢を放つ。だが、黒髪の少女はその前に、紗矢華の背後へと回りこんでいた。目標を失った呪矢が暴発し、地下道の壁を崩落させる。

紗矢華の表情が焦燥に歪んだ。

しかし紗矢華の焦りの理由は、呪矢の暴発ではなかった。

式神たちを撃ち落とした、黒髪の少女の戦闘技法。その技の正体を紗矢華は知っている。だからこそ紗矢華は混乱している。

黒髪の少女が使ったのは間違いなく〝八雷神法〟――増幅した呪力を物理的な攻撃力へと変換する、対魔族用の呪式戦闘術だ。魔族を素手で制圧するために編み出された、極めて特殊な呪式戦闘術。

そしてその技を使えるのは、紗矢華の知る限り、ただ一種類の人々しか存在しない。それは獅子王機関の剣巫だ。〝八雷神法〟は剣巫の技なのだ。

「その技……まさか、雪菜と同じ……!?」

紗矢華が、剣の形に戻した〝煌華麟〟を横薙ぎに背後へと叩きつける。

しかし黒髪の少女のほうが速い。彼女は背中を向けたまま、紗矢華に体重を預けてきた。互いの全身を密着させたその体勢から撃ち出せる攻撃は、普通ならば存在しない。が、

「――柝雷！」

至近距離から放たれた爆発的な衝撃に、紗矢華の長身が吹き飛んだ。

黒髪の少女が使ったのは、呪力を物理的な攻撃力に変えての、零距離からの体当たりだ。内臓を激しく揺さぶられて、紗矢華は悲鳴を上げることもできずに地面に転がった。

「……剣巫の技を……あなたが、どうして……!?」

苦しげな息の下で、紗矢華が声を絞り出す。

黒髪の少女はなにも答えず、這いつくばる紗矢華を無言で見下ろしている。

少女の手に握られているのは、銀色の長剣――〝煌華麟〟だ。

紗矢華以外の人間には空間切断術式は使えないはずだが、この状況では、そんなものを使うまでもない。ただ剣を振り下ろすだけで、彼女は紗矢華を殺すことができるだろう。

「あなたも……剣巫、なの？」

かすれた声で紗矢華が訊いた。

いいえ、と少女が首を振る。

「私は、六刃――剣巫の影よ」

淡々とした口調で少女は名乗った。

その言葉を聞く前に、紗矢華の意識は闇の中へと薄れて消えた。

第一章 楽園の島 Blue Elysium

1

水に濡れたコンクリートが、陽光を反射してぬらぬらと輝いていた。
彩海学園の校舎裏。午後の陽射しが照りつける放課後の屋外プール。水を抜いたプールの底に、デッキブラシ片手に立ち尽くしているのは、体操服姿の暁占城だ。
目に痛いほどの青空を見上げて、古城は深い溜息をついている。
「……暑いな」
思わず洩れた呟きが、陽炎に揺らめく大気に溶ける。
冬休み直前。半年に一度のプールの定期清掃だ。水垢でぬめるプールサイド。灼けたタイル。絶え間なく降りそそいでくる紫外線が、古城の体力をじわじわと奪っていく。
「たしかに、平年よりも気温が高いですね。今年は暖冬だそうですから」
真面目な口調で答えてきたのは、プールサイドに立っていた姫柊雪菜だった。
中等部の制服を着た転校生の少女。その正体は古城を監視するために派遣されてきたという政府特務機関の攻魔師――獅子王機関の剣巫である。
そんな雪菜も、今はいつもの槍入りギターケースの代わりに、青いゴムホースを持ってプールサイドに水を撒いていた。水飛沫に包まれた彼女の姿は涼しげで、汗だくでうだる古城とは

くっきり対照的だ。
虹と戯れる雪菜を羨望の眼差しで眺めつつ、古城は虚ろな表情で首を振り、
「気温が三十度超えてるのをただの暖冬で片付けるのは、いくらなんでも無理があるだろ……いや待て、そもそも今は本当に冬なのか？　仮に今が夏だとすれば、冬休みも当然来ないわけだから、プール掃除の必要もないよな？」
「……そう言われても、本土は普通に冬ですよ。もう十二月も半ばですし」
現実逃避気味な古城の妄言を、雪菜が律儀に否定する。
絃神島は東京の南方海上三百三十キロ付近に造られた人工島。太平洋のド真ん中に浮かぶ、常夏の〝魔族特区〟なのだ。
「絃神島の緯度だと日照量も多いですし、海流や風の影響もあるから暑いだけで。今日は特に天気もいいですしね」
「そんな天気のいい日に、どうして俺は一人でプール掃除をやらされてるんですかねえ？」
デッキブラシの柄にぐったりともたれて、古城が誰にともなく問いかける。
雪菜はそんな古城を見つめて、大きな目をきょとんと瞬いた。
「補習の代わり、なんですよね？　先輩が、遅刻や早退を繰り返すから出席日数が不足して」
「こっちは好きでサボってるわけじゃねーってのに……ただちょっと何回か殺されかけたり、無人島に置き去りにされたり、異次元に閉じこめられたりしただけで……」

言い訳がましく古城が愚痴る。

実際、世界最強の吸血鬼などという馬鹿げた体質を押しつけられて以来、古城の無断欠席の原因のほとんどは不可抗力――魔族がらみの大きな事件に巻きこまれたせいだった。

そのあたりの事情を知っているからこそ、担任教師の南宮那月も、出席日数の不足をプール掃除程度で許してくれたのかもしれないが。

「だからって、この炎天下に一人でプールの掃除って……吸血鬼に対するイジメかよ……」

古城は額の汗を拭きながら、水の抜けたプールを見回した。ありふれた二十五メートルプールだが、一人で掃除をするとなると恐ろしく広大に感じられる。

完全にやる気をなくしてだらける古城を眺めて、雪菜は呆れたように小さく息を吐き、

「落ちこんでないで、早く終わらせてしまいましょう。わたしもお手伝いしますから」

「あ、ああ……悪いな、姫柊」

「どういたしまして」

上履きと靴下を脱いで裸足になった雪菜が、ホースを持ってプールの中に降りてくる。古城も仕方なくモップを握り直して、プールにこびりついた汚れをせっせと落とし始めた。

「でも、今日は本当に暑いですね。せっかくプールに来たのに、泳げないのが残念です」

足元の小さな水溜まりを見つめて、雪菜が可愛らしく肩をすくめてみせる。そんな彼女に、古城は一瞬、目を奪われながら、

「そういや、なんとなくだけど姫柊は得意そうだよな、水泳」

「そうですか？　高神の杜では、水中戦の訓練もありましたから、それなりには泳げるつもりですけど」

「……水中戦？」

泳ぎの基準が俺の知ってる水泳とは違うんだが、と困惑する古城。ちなみに高神の杜というのは、かつて雪菜が暮らしていた施設の名前だ。表向きは関西地区にある全寮制の名門女子校ということになっているが、その実体は獅子王機関の攻魔師養成機関らしい。

「先輩はどうなんですか？　泳ぐのは？」

「いや、俺は……ほら、吸血鬼だからな。水はちょっと体質的に合わないというか……」

訊き返されて、古城は思わず言葉を濁した。ぎこちない仕草で目を逸らす古城を、雪菜は少し不思議そうに見つめて、

「吸血鬼が流水を渡れないというのは迷信のはずですけど……」

「そ、そうなのか？」

「はい。たしかに霧化のような特殊能力は一部制限されますし、眷獣の属性によっては、召喚できない可能性もありますけど、肉体的には普通の人間と大きな差異はないはずなので」

「いや、でもほら、魔族には個体差ってやつがあるだろ？」

懸命に取り繕おうと試みる古城を、雪菜は半眼になって静かに眺めた。

「あの……先輩、もしかして……」
「ち、違う、べつに泳げないわけじゃないからな！　ただ少し得意じゃないだけで！」
「よかったら、今度、泳ぎ方を教えましょうか？　世界最強の吸血鬼が泳げないというのは、イメージ的に問題がありそうですし」
「だから泳げないとは言ってないだろ――！」
気遣うような雪菜の提案に、古城が必死の反論を続ける。
そんな古城の追い詰められた姿に、雪菜はクスッと小さく笑った。泳げないという事実より、それを無理やり隠そうとしている古城の態度がおかしかったのだろう。
「わかりました。そういうことにしておきます」
「ぐ……ぐぬ」
唇を歪めて古城がうめく。雪菜はひとしきりうつむいて肩を揺らしたあと、ふと思い出したように顔を上げた。そういえば、と彼女は不意に口調を変えて、
「最近、プールの宣伝をよく見かけますね。たしか専用の人工島が完成したって」
「ああ、ブルエリか。昨日もワイドショーで特集してたよな」
話題を変えてくれた雪菜に感謝しながら、古城は早口で答える。
ブルエリ――ブルーエリジアムは、絃神島の沖合に建造された新型の増設人工島だった。半径六百メートルにも満たない小さな島だが、特筆すべきは、増設人工島全体が巨大なテーマパ

ークとして設計されていることだ。リゾートホテル、レジャープール、ジェットコースターなどのアトラクション施設、そして〝魔獣庭園〟と呼ばれる特殊な水族館が整備され、絃神島の新たな象徴としての役割を期待されていた。
「たしか開業前の仮オープンやってるんだよな。絃神島には、今まであいうレジャー施設が少なかったし、しばらくは話題になるんじゃないかな。アトラクションも充実してるし、水族館も凝ってるし。ちょっと行ってみたいけど、バカ高くてな……入場料が」
「ずいぶん詳しいんですね、先輩」
雪菜が怪訝そうに見つめてくる。古城が観光名所などに興味を持っていたことが意外だったのだろう。いや実は、と古城は言い訳するように肩をすくめて、
「こないだ煌坂に電話で質問されたんだよ。それでちょっと調べたんだ」
「……紗矢華さんが、絃神島のレジャー施設のことを先輩に訊いてきたんですか？」
雪菜がますます疑わしげな口調になる。それではまるでデートに誘う口実ではないか、と警戒しているような態度だ。しかし古城は、そんな雪菜の疑念には気づかず、
「市民の評判を知りたがってたみたいだけど、理由は教えてくれなかったな。あいつって実はプール好きだったりするのか？」
「いえ。どちらかといえば、泳ぐのは好きではなかったと思います。水着になると目立つから嫌だと言って。水の中では〝煌華麟〟の能力も使えませんし」

「へえ、そうなのか……まあ、あいつの場合、水の抵抗も大きそうだしな……」

煌坂紗矢華の水着姿を想像して、妙に納得する古城。長身で顔立ちにも恵まれた紗矢華は、水着になれば、さぞ人目を惹くことだろう。おまけに彼女は、スレンダーな体つきに似合わない見事な巨乳の持ち主だったりするから余計にだ。が、

「水の抵抗？」

古城が洩らした不用意なひと言を聞きつけて、雪菜が不意に眉を寄せた。

もちろん雪菜も、紗矢華の体型のことは知っている。古城が口にした「水の抵抗」が生じる原理も、当然、理解しているはずだ。

その上で雪菜は、制服を着た自分自身の控え目な胸元に視線を落とし、

「……先輩。さっき、わたしは水泳が得意そうだって言いましたよね？」

「え？　あ……違う！　べつにそういう意味じゃないぞ！」

雪菜の声が急に静かになった理由に気づいて、古城が焦る。

もちろん古城とて悪意があったわけではないが、圧倒的な質量を持つ紗矢華と比べてしまうと、雪菜のほうが圧倒的に水の抵抗が少ないという事実は覆せない。年下の雪菜がそのことに劣等感を抱く理由はないが、だからといって比較されて面白かろうはずもない。

「だったらどういう意味なんですか……？」

冷え冷えとした目つきで古城を睨んで、雪菜がゴムホースの先端を向けてくる。加圧された水道水を顔面に浴びて、古城はたまらず咳きこんだ。

「ぶはっ！　ま、待て、姫柊。そのホース、水圧がけっこうキツいんだが……グバゴボッ！」

「そういう失礼なことを言う吸血鬼は、そうやって頭を冷やすといいと思います！」

小さく頬を膨らませた雪菜が、拗ねたような口調で言い放つ。

鼻に入った水に激しく噎せながら、どうしてこうなった、と苦悩する古城だった。

2

べつに怒ってません、と主張していた雪菜だが、古城をズブ濡れにしたあとも、しばらくは不機嫌なままだった。もっとも機嫌を損ねていても、なんだかんだで最後までプール掃除を手伝ってくれるあたりが雪菜のいいところだ。

おかげで下校時刻の前にはどうにか作業を片付けて、古城たちは家路についた。

当然、隣には雪菜の姿もある。そもそも古城の監視役である雪菜の住処は、暁家と同じマンションの隣室なのだ。それもあって最近の雪菜は、夕飯を暁家で食べていくのが恒例になっていた。古城の妹――暁凪沙が、食事の支度をして古城たちの帰宅を待ちわびているはずだ。

労働で疲れた身体を引きずりながら、古城たちは、自宅マンションへと辿り着く。

陽が暮れて凶悪な陽射しからは解放されたが、蒸し暑さが和らぐ気配はない。部屋に入れば

エアコンの効いた快適な空間が待っている。それだけを心の支えに古城は歩き続けた。が、

「う……!?」

玄関ドアを開けた直後に流れ出してきたのは、屋外と同じ、蒸し暑く澱んだ空気だった。キッチンや家電製品からの排熱が籠もっているぶん、むしろ外より暑いかもしれない。

「なんだ、この熱気？」

期待していた快適空間とのあまりの落差に、古城が声を震わせる。

そんな古城の声を聞きつけて、キッチンにいた凪沙が、ひょいと廊下に顔を出した。

「古城君、おかえりー！　雪菜ちゃんもいらっしゃい！　遅かったね。もう晩ご飯できてるよ」

「な……凪沙？」

パタパタとスリッパを鳴らして、古城たちを玄関まで出迎える凪沙。

彼女の姿を呆然と眺めて、古城は担いでいた通学バッグを取り落とす。ふと見れば、雪菜も古城と同様に、目を見開いて絶句していた。

凪沙が身に着けていたのは、アヒル柄のワンポイントが入った白いエプロンだけ。それ以外、なにひとつ身に着けてないように見えた。ほっそりした肩や白い太腿が剝き出しだ。

「お……おまえ、なにやってんだ!?　なんなんだよ、その恰好は!?」

「なにって……ただの水着エプロンだよ。ほら」

そう言って凪沙は、エプロンの裾をつまみ上げた。申し訳程度にフリルのついた白い水着が、ちらりと古城の視界に入ってくる。たしかに素っ裸というわけではないようだが――

「めくらなくていいっ！　なんでそんな恰好してるのかって話だよ！」

「だって、ほら、暑いから。この時間帯は、西陽の余韻がねー」

「エアコンは!?　なんでこんなクソ暑いのに冷房が入ってないんだよ!?」

古城がリビングを指さして喚く。風通しの悪い室内の気温は、人間の体温をとっくに超えている。冷房なしで過ごすのは危険な温度域だ。

しかし凪沙は不服げに唇を尖らせて、

「だって停電中だもん。下の張り紙、見なかった？　マンションの変圧器を交換するんだって。エレベーターやオートロックは、家庭用のやつとは配線が違ってるから動くみたいだけど」

「て、停電……!?」

意外な情報に狼狽する古城。なるほど、電気供給が途絶えているのでは、エアコンが動いていないのも道理だ。部屋の中が薄暗いのも、照明が使えないせいらしい。

「変圧器の交換って……なんでこんな時間に？」

「故障だって。こないだ、北地区ですごい雷があったでしょ。うちのマンションは設計が古いから、そのときにだいぶ傷んでたらしいよ」

「あー……」

思わず雪菜と顔を見合わせて、古城は複雑な表情を浮かべる。北地区のすごい雷というのが、第三真祖が古城を相手に使った眷獣のことだと気づいたのだ。つまりこの停電の原因には、古城も間接的に関わっていることになる。

「停電……じゃあ、わたしの部屋のエアコンも……？」

事態の深刻さに気づいた雪菜が、自分の部屋のほうへと視線を向ける。マンション全体の電源がダウンしている以上、冷房が使えないのは暁家だけではない。雪菜の部屋に避難しても、状況は変わらないということだ。

「ダメだと思うよ。夜の十時くらいには工事が終わるって言ってたけど……せっかくだから、雪菜ちゃんも着替えてくる？　水着貸すよ？」

「う、ううん……さすがにここで水着になるのは……」

無邪気に笑う凪沙の誘いに、雪菜が逃げ腰で首を振る。暑さ対策として水着エプロンが合理的なことは認めているものの、さすがに恥じらいが勝っているらしい。

それでも凪沙は諦めずに喰いさがり、

「でもでも、制服のままだと暑くない？　古城君も喜ぶよ？」

「喜ばねーよ。おまえもさっさと着替えてこい。もう少しマシな服がなんかあるだろ？」

危うく水着フェチ属性を付加されそうになった古城が、凪沙の額を指で弾いた。痛ったあ、と赤くなったおでこを押さえた凪沙が、涙目になって古城を睨み、

「えー……今年は泳ぎに行けなかったから、せっかく水着買ったのに着られなかったんだよ。凪沙が元気になったら海に連れてってくれるって言ったのに、古城君の嘘つきー」

「だからって家の中をうろつかなくてもいいだろ！　海にはそのうち連れてってやるから！」

「もう……そんなに照れなくてもいいのに。ほらほら、現役女子中学生の水着だよ」

そう言って凪沙は、その場でくるくると回ってみせる。凪沙にしてみれば、そうすることで古城が動揺して、うろたえまくる展開を期待していたのだろうが――

「照れてねえよ。なんで俺が中学生なんかの水着を見て照れなきゃなんねーんだ」

古城は心底どうでもよさそうな口調で言った。ただでさえ幼い体型の凪沙に、色気の乏しいフリル付きビキニ。古城が照れる要素はどこにもない。

期待外れの古城の反応に、凪沙は軽くむくれながら、

「ちぇっ……もういいよ。とりあえずご飯にしよ、雪菜ちゃん！」

「だからその前に着替えろって！　ったく……！」

水着エプロンのままキッチンへと戻っていく凪沙を、古城は溜息混じりに見送った。その直後、抑圧された陰鬱な気配を背後に感じて振り返る。

そこでは玄関口に立ったままの雪菜が、なぜか瞳に暗い光を浮かべて、口の中でぼそぼそとなにかを呟き続けていた。

「……喜ばない、ですか……中学生なんかの水着はダメですか……そうですか」

「えーと、姫柊？　どうかしたか？」

「いえ、なんでもありません。べつに怒ってませんから」

おそるおそる質問する古城に、体温の感じられない事務的な声で雪菜が答える。

「そ、そうか……だったらいいんだが」

「はい」

どう見ても怒ってないという雰囲気ではなかったが、これ以上踏みこむのは危険だと本能的に察知して、古城は気づかないふりをすることにした。停電中で薄暗い廊下を抜けて、蒸し暑さが残るリビングに向かう。

凪沙が言っていたとおり、夕食の準備はすでに済んでいた。ダイニングテーブルの上には、照明代わりの非常用ロウソクと一緒に、大量の料理の皿が並んでいる。

「なんか、豪華な晩飯だな……つか、さすがに量が多すぎないか？」

「溶けて腐るといけないと思って、冷凍庫の中身を全部使っちゃったんだよ。野菜とお肉とお魚とうどんでしょ。あとは先週作ったカレーとハンバーグと、お夜食用のおにぎり」

困惑する古城の質問に、凪沙がすらすらと早口で答えた。

「……それでこんな変な組み合わせだったのか……つか、これ主食だけで三日ぶんくらいありそうな感じなんだが」

「残しても保存できないから、頑張って食べてね。あと、ごめんね。古城君が大事にとってお

いたアイス、全部食べちゃった。仕方ないよね。美味しかったです」
「ぬお……このクソ暑いときに俺はアイスも喰えないのか……」
いきなり大きな精神的ダメージを受けながら、古城は手を洗って席に着く。目の前に置かれているのは、どこから手をつけたらいいのかもわからない大量の料理たちだ。古城の隣に座った雪菜も、途方に暮れたような表情を浮かべている。
蒸し暑さのせいで食欲が湧かないが、そんなことを言っていられる状況でもない。古城は、やれやれと覚悟を決めて、ナイフとフォークを手に取った。
暁家の玄関ドアが乱暴に打ち鳴らされたのは、その直後のことだった。
暗がりの中に響いた突然の騒音に、その場にいた全員が顔を強張らせる。
「なんだ……？　客か？」
ゴンゴンと響く騒音の正体に気づいて、古城がホッと息を吐いた。どうやら古城たちの家を訪ねてきた誰かが、ドアを荒っぽくノックしているだけらしい。
「あ、そっか……インターホンも使えないんだっけ。はいはーい。どちら様ですかー」
凪沙も安堵したように硬直を解き、玄関に向かって叫びながら立ち上がる。と、
「待て、凪沙！　おまえ、その恰好で表に出る気か!?」
「わ!?　そ、そっか……古城君、お願い！」
自分が水着エプロンのままだったことに気づいて、凪沙は再び動きを止めた。

さっさと着替えてこい――と、そんな妹を自室へと押しやって、古城は玄関へと向かう。
その間も荒っぽいノックは続いていた。その騒々しい響きに、古城は軽い苛立ちを覚えつつ、
「はいはい、今出ますよ……ったく、近所迷惑だろうが！」
怒鳴りながら勢いよくドアを開ける。と、視界に入ってきたのは、よく見知った顔だった。
軽く染めた短髪を逆立たせ、首にヘッドフォンをぶら下げた少年だ。口元を皮肉っぽく歪めながら、彼は愉快そうに微笑んで、
「おーす、古城。どうなってんだ、このインターホン？　電池切れか？」
「矢瀬？　こんな時間にどうしたんだ、おまえ？」
突然押しかけてきた中学時代からの友人を、古城が不審げな目つきで睨む。
矢瀬基樹とは、ほんの数時間前に、教室で別れたばかりである。しかもこの男は、プール掃除を手伝え、という古城の要請を無視して、逃げるように立ち去ったのだ。今さらどの面を提げて、古城の家にまで押しかけてきたのか、と思う。
しかし矢瀬は、そんなことは綺麗さっぱり忘却した、と言わんばかりの馴れ馴れしさで、勝手に玄関ドアをくぐって、
「ああ、悪いな。急に押しかけたりして……って、うわ、暑ぃな。なんだこれ？」
「停電中でエアコンが使えねーんだよ」
苦々しい表情で答える古城。本来なら矢瀬ごときに親切に説明してやる義理もないのだが、

料金未納で電気を止められたなどという不本意な勘違いをされても困る。面白がって学校中に言いふらすくらいのことは、この男ならやりかねない。

もっとも矢瀬も、薄々事情は察していたのか、特に驚きもせずに納得して、

「はー……なるほど。んで、古城。……おまえまさか、この暑さを利用して凪沙ちゃんに水着エプロンを着せたりしてないだろうな？」

「俺がやらせてるわけじゃねーよ！」

あまりにもピンポイントな矢瀬の指摘に、思わず口を滑らせてしまう古城。さすがの矢瀬も、一瞬、呆気にとられたように目を瞬いた。

「……え？　どういうことだ、おまえ、マジで？　うわ！……」

引くわー、と本気の口調で矢瀬が呟く。古城は逆ギレ気味に声を荒らげて、

「うるせーな！　おまえは結局なにしに来たんだよ!?」

「おお、そうだ。とりあえず、こんなところで立ち話もなんだから上がっていいか？」

「勝手に上がっといてから訊くなよな」

ずかずかと部屋の中に踏みこんでいく矢瀬の背中を、古城は呆れ顔で見送った。

リビングでは着替えを終えた凪沙が、ちょうど自分の部屋から出てきたところだ。Tシャツに短パンという軽装だが、水着エプロンよりはずいぶんマシだろう。

「あれ！……矢瀬っち？　どうしたの？」

「こんばんは、矢瀬先輩」

「よぉ、凪沙ちゃん。姫柊ちゃんもいたのか。そいつはいいな。手間が省けたぜ」

自分を出迎えた後輩二人を見て、矢瀬がご機嫌な声を出す。

「手間ってなんだ？」

警戒心もあらわに古城が質問した。矢瀬の口振りでは、なにかしら古城たちに伝えたい話があるようだが、電話やメールで済まずに、わざわざ訪ねて来たというのが引っかかる。凪沙や雪菜を巻きこむ用件だとすれば、怪しさも倍増だ。

しかし矢瀬は、睨みつける古城を見返して、やたら自慢げに笑ってみせた。

「なあ、古城。急な話でアレだが、おまえら、泊まりがけでリゾートに行きたくないか？」

「……リゾート？」

「おう。ブルーエリジアムってやつ」

「えええええっ!?」

古城が反応する前に、大声を出したのは凪沙だった。矢瀬の眼前に詰め寄って、持ち前の早口でまくし立てるように訊き返す。

「ブ、ブルーエリジアムって、あのブルーエリジアム？　青の楽園？　遊園地とかホテルとか魔獣庭園とか九種類のプールとかがあるブルエリのこと？」

「そうそう。そのブルエリのこと」

凪沙の勢いに若干圧倒されながらも、不敵に微笑んでうなずく矢瀬。

「正式オープンは来年からだけど、今月から完全招待制の仮営業をやってるのは知ってるだろ？　スタッフの研修やマスコミへのお披露目を兼ねてのリハーサルみたいなやつな」

「……それに俺たちを招待してくれるっていうのか？」

古城は無意識に顔をしかめて訊き返した。降って湧いたような魅力的な勧誘に、喜びよりも不信感のほうが先に立つ。なにしろ完全招待制とされるブルーエリジアムの入場券は、その目新しさと希少性もあって、一枚数万円で取り引きされているプラチナチケットなのだ。

しかし矢瀬は、むしろそんな古城の反応を愉しんでいるようにニヤニヤと目を細め、

「二泊三日で入場料と宿泊費は無料。なかなか美味しい話だろ？」

「美味しいというよりは、胡散臭ェよ。絶対なにか裏があるだろ？」

「いやいやいや……実際のところ、ブルエリの施設のいくつかは、矢瀬家が経営に絡んでるんだよ。ところが、予約ミスがあってな。急に欠員が出ちまったってわけ。ありがちだろ？」

「……かもな」

古城は渋々とうなずいた。完全予約制を標榜しているにもかかわらず、ミスによって予約に欠員が発生。たしかにありがちなトラブルに思える。

「んで、施設の稼働率や、なにかと問題があって、欠員のままにしとくのはまずいんだよな。不安がる出資者も出てくるし、予約部門の責任問題になっちまう」

「それで俺たちに代わりに泊まってくれって？」

「ま、平たく言うとそういうことだな」

軽薄な口調とは裏腹に、真面目な表情で矢瀬が言った。

ようやく古城も、矢瀬がわざわざ訪ねて来た理由を理解する。

矢瀬の実家は、〝魔族特区〟の運営にも少なからず影響力を持つ名門の財閥だ。彼らが、新造の増設人工島であるブルーエリジアムの経営に関与していると言われても、まったく意外でもなんでもない。そして矢瀬は実家の誰かに、予約の欠員を埋めてくれと、頼まれでもしたのだろう。欠員のまま放置するよりも、無料でも誰かを泊めたほうが、ブルーエリジアム的に面目が保てる、ということなのかもしれない。

そのあたりの事情を知ってかしらずか、凪沙は力強く挙手して飛び跳ねながら、

「はいはい！　行きたい行きたい！　ねえ、古城君、行こうよ。話題のブルエリだよ。普通に泊まったら何万円もするんだよ」

「……姫柊もいいのか？」

騒ぎ立てる妹を放置して、古城が雪菜に小声で訊く。いちおう任務中ということで、レジャー施設に遊びにいくことを雪菜が拒否するのではないかと思ったのだ。

しかし雪菜は迷うことなく首を縦に振って、

「はい、先輩と一緒ならどこにでも行きます。わたしは先輩の監視役ですから」

「ん？　監視役？」

いろいろと誤解を招きそうな雪菜の発言に、喰いついたのは矢瀬だった。

雪菜はハッと表情を硬くして、

「……い、いえ、かんしや……感謝、です！」

「なるほど、感謝か。感謝の気持ちは大切だよな。なあ、古城？」

「へいへい。誘ってくれてありがとよ」

恩着せがましく見つめてくる友人に、古城はぞんざいな謝意を伝えた。

胡散臭さは拭いきれないが、噂の最新リゾートにタダで招待するという矢瀬の提案は魅力的だ。古城が海に連れていってくれなかった、と凪沙に文句を言われたばかりでもある。行き先がブルーエリジアムならば、凪沙も文句はないだろう。

「交渉成立だな。じゃあ、ブルエリのパンフとチケット渡しとくから、あとはよろしくな」

そう言って矢瀬は、テーブルの上に、三人ぶんのチケットが入った封筒を投げ出した。そして別れの挨拶もそこそこに、忙しない足取りで部屋を出て行こうとする。

「あ……おい、矢瀬！」

「悪ィ、まだちょっと用事が残ってんだ。じゃあな」

「……なんだ、あいつ？」

慌ただしく帰っていく矢瀬を、古城は、ぽかんと見送った。あの男がなにを考えているのか、さっぱりわけがわからない。

「矢瀬っちも晩ご飯食べてけばよかったのに……今から連れ戻してこようか？」

テーブルの上の料理を眺めて、凪沙が残念そうに息を吐く。手つかずで残った大量の料理は、あと一人くらい客が増えても余裕で賄える分量なのだ。

「ていうか、予定を聞き忘れたな……俺たちはいつブルエリに行けばいいんだよ？」

肝心な情報が抜け落ちていたことに気づいて、古城は携帯電話に手を伸ばす。矢瀬に連絡して日程を確認し、ついでに夕飯を食べていくように強制しようと思ったのだ。が、

「先輩、このチケットの日付……今週の土曜日になってますけど」

困惑混じりに告げてきたのは、封筒の中身を確認した雪菜だった。古城は彼女が取り出したチケットの日付を、ロウソクの頼りない明かりで確認し、

「今週の土曜日？」

携帯電話の画面に映るカレンダーの表示と見比べる。

雪菜と凪沙も沈黙し、一瞬の静寂が訪れた。矢瀬がわざわざ古城の自宅まで押しかけてきて、息つく間もなく帰って行った理由を、ようやく全員が理解していた。

チケットに刻印されたブルーエリジアムの招待日は――

「――って、明日かよ!?」

停電中の薄暗い部屋に、動揺する古城の声が鳴り響く。

明朝からのリゾートへの出発準備に追われる、慌ただしい夜の始まりだった。

3

エアコンで冷えた快適な室内。スプリングの効いたベッドの上に、藍羽浅葱は寝転んでいた。文句なく整った顔立ちに、華やかな髪型の女子高生だ。部屋着にしている微妙にダサい柄のTシャツですら、彼女が着ていると女子力高めに感じられる。

洋服やファッション誌やメイク用品、そして少々のぬいぐるみなどが置かれた、ありふれた女子の部屋だった。

ただ、勉強机の隣にある一部分だけが、明らかな異彩を放っている。無骨な業務用ディスプレイと超高速PCクラスタ。なぜか最新鋭の並列コンピュータが、女子高生の個室に置かれているのだ。どことなくシュールな光景だった。

「……んで、あんたは、いったいなにを企んでるのよ……？」

ボイスチャット用のヘッドセットに向かって、浅葱が不機嫌そうに問い質す。

通話相手は矢瀬基樹。幼なじみということもあって、遠慮のない辛辣な口調である。なにしろ小学校に入る前からの長いつき合いだ。今さら気を遣うのも馬鹿馬鹿しい。

『企んでるって、なんの話だ？』

とぼけた口調で訊き返してくる矢瀬。ある意味、予想どおりの反応だ。

浅葱は冷たく鼻を鳴らして、

「とぼけなくてもいいわよ。このブルエリの招待チケット――欠員うんぬんってのは、ただの口実でしょ。あたしらを連れ出してどうするつもりよ？」

『人聞き悪ィな。いちおう今回のやつは、おまえのためでもあるんだぜ。古城と一緒にリゾートにお泊まりってのは、ある意味チャンスだろ？』

余計なお世話よ、と浅葱が眉を痙攣させる。本気で気を回しているつもりの矢瀬の物言いと、それを完全に否定できない自分自身が腹立たしい。

「はいはい。またそうやって人をからかって愉しむつもりなわけね。ていうか、あの転校生や屈沙ちゃんも一緒じゃ全然意味ないじゃん！」

『いやいや。こういうのは、ちょっとくらい邪魔者がいたほうがいいんだよ』

うるさい、黙れ、と浅葱は内心で毒突いた。

「だいたい胡散臭いのよね。あんた、実家の稼業に関わるのを、あんなに嫌がってたくせに、今回に限ってどういう風の吹き回しよ？」

『ちょっとした心境の変化があったんだよ。利用できるものは、なんでも利用しないとな』

笑い含みの軽薄な声で矢瀬が答えてくる。矢瀬家の現当主――矢瀬顕重は、経済界では名を知られた大物だ。そして矢瀬は、そんな父親のことをひどく嫌っている。その原因を知ってい

る浅葱としては、矢瀬の態度に、不信感を抱かずにはいられなかった。

「ふーん……それで今度はあたしたちを利用することにしたわけ？」

『いやいやいや、人聞き悪ィな。助け合いって言ってくれよ』

皮肉混じりの浅葱の問いかけを、矢瀬は笑ってはぐらかした。

これ以上問い詰めても得られるものはない、と判断して、浅葱は気怠く溜息をつく。

「はいはい、もういいわよ。ブルエリにはあたしもちょっと興味あったしね」

『そりゃよかった。じゃあ、そういうことで――』

矢瀬との接続が途切れたのを確認して、浅葱はイヤフォン型のヘッドセットを外した。

そのままむくりと上体を起こして、ベッドの上にあぐらをかく。

いきなり両手で頬を叩いたのは、思わず口元がにやけそうになるのを自制するためだ。だがそれでも、こみ上げてくるニヤニヤ笑いが止められない。

古城と一緒にリゾートにお泊まり。矢瀬の策略に乗せられるのはシャクだが、たしかにチャンスではあった。開放的な旅行先。プールに水着。絶叫マシン――あの女心に疎い元体育会系の鈍感シスコン男との距離を詰めるには、またとない絶好のシチュエーションだといえる。矢瀬の言葉ではないが、利用できるものは利用しておくべきだろう。

「ブルーエリジアムかー……遊園地のアトラクションもいいけど、やっぱプールよね」

ベッドの上から飛び降りた浅葱は、パソコンを起動して愛用の通販サイトに接続した。

検索したのは最新の水着だ。絃神市内の業者が運営しているこのサイトなら、今すぐに注文すれば明日の朝までには商品が届く。念のために荷物の送り先をブルーエリジアムの宿泊先にしておけば確実だろう。

「このあたりが無難といえば無難だけど、今イチ地味かな。せっかくのリゾートプールだし、このくらいは冒険しても……いやいや、やっぱりさすがにこれは」

ずらりと表示された水着の写真を睨んで、真剣そのものの口調で呟く浅葱。プールにおける水着とは、戦場における鎧のようなものだ。当然、浅葱の水着を選ぶ基準は厳しいものになる。古城のようなボンクラにも十分に可愛らしさをアピールしつつ、同性にも舐められないセンスの良いものでなければならない。このあたりのバランスが実に難しい。

『ケケッ……！』

悩み続ける浅葱の耳元に、奇妙な笑い声が聞こえてきたのはそのときだった。絃神島を管理するスーパーコンピューターの現身にして、ハッカーとしての浅葱の相棒である補助人工知能――通称〝モグワイ〟の合成音声である。

ディスプレイに表示されたぬいぐるみ状のマスコットが、妙に人間臭い声音で笑っている。

『ずいぶん気合い入ってるな、嬢ちゃん。水着選びなら俺がアドバイスしてやろうか？』

「うるさいわね、このエロ人工知能！　今忙しいの。邪魔するならＤｏＳ攻撃ぶちこむわよ」

皮肉屋の人工知能を適当にあしらいながら、水着選びを続ける浅葱。そんな浅葱をからかう

ように、モグワイは勝手に浅葱の自宅の家庭内ネットワークに侵入し、『嬢ちゃん家の体重計に残ってた、最新の体重と体脂肪率はこれか。あとは彩海学園の保健室から、春の身体測定のときのデータを呼び出して現在のスリーサイズを推定、と。ここから導き出される今の嬢ちゃんにもっとも似合う水着は――』

「ぎゃあああ――っ！　あんた、他人の個人情報でなにやってんのよ!?」

浅葱の悲鳴が、深夜の住宅地にこだまする。

旅行前夜の知られざる一幕だった。

「――とまあ、こんな感じでよかったのか？」

ボイスチャットを終えた矢瀬が、そう言ってスマートフォンをポケットにしまいこむ。

彼が立っているのは、紘神島西地区の巨大ショッピングビル――テティスモールの屋上だ。紘神島の夜景が楽しめるこの場所は、デートスポットの定番だった。

矢瀬の周囲にいるのは、ほとんどがデート中の若いカップルばかり――

だからこそ矢瀬たちの存在も目立たない。

「お疲れさまでした、基樹。面倒な仕事を押しつけてしまいましたね」

矢瀬の隣に立っていた人影が、静かな声で答えてくる。

流行遅れの長いスカートと地味なシャツ。眼鏡をかけて分厚い本を抱えた、目立たない容姿の少女だった。口調は丁寧だが、堅苦しさはない。笑いを含んだような悪戯っぽい声音だ。

「水臭いな、先輩。あんたの頼みを俺が断るわけないだろ」

彼女の横顔を不躾に眺めて、矢瀬がふてぶてしく笑う。

眼鏡の少女はなにも答えない。やんちゃな弟の我が侭を聞き流すように、寂しげな微笑を浮かべただけだ。

そんな彼女の反応に、矢瀬は不満げに唇を曲げて、

「だけど、あんたらしくはないな。古城や姫柊ちゃんはともかくとして、どうして浅葱や凪沙ちゃんまで巻きこんだ？」

「これはただの保険です。万一のときに、被害を最小限に抑えるための」

眼鏡の少女が素っ気なく答えた。

思いがけない彼女の答えに、矢瀬は驚いたように眉を上げる。

未来のことをすべて見通しているかのように振る舞ってきた少女が、そんな言葉を口にするとは予想していなかったのだ。

「保険か。それはつまり、あんたたちにも制御できない危険があるってことか？」

「できる限りの手は打ちました……ですが、そうですね。今の状況は少し厄介かもしれません」

少女の言葉に切迫感はなかったが、そのことが逆に事態の深刻さを臭わせていた。
どうやら矢瀬の知らないところで、〝魔族特区〟を取り巻く環境に変化が起きているらしい。
彼女の地位と能力をもってすら、律することのできない変化が。
「本当にらしくないな。吸血鬼の真祖とすら対等にやり合うあんたにしては、ずいぶん弱気じゃないか」
揶揄とも励ましともつかない口調で矢瀬が言う。
しかし少女は自嘲するように笑って首を振り、
「獅子王機関の三聖などと枠がったところで、組織の歯車でしかありません。ままならないことのほうが多いものです。しょせんはただの消耗品ですから」
「緋稲さん……あんたは……」
少女が唐突に洩らした本音に、矢瀬は不意を衝かれて動揺した。駄目ですよ、と言いふうに人差し指を立てて、彼女がそんな矢瀬を黙らせる。
「今のわたくしは閑古詠です、矢瀬基樹」
静かに言い放つ少女を見返して、悪ィ、と矢瀬は肩をすくめた。
そして矢瀬は、急にくだけた笑みを浮かべて、古詠と名乗った少女に質問する。
「あんたもブルエリには行くんだろ。水着姿くらいは期待してもいいのかな？」
「水中戦はわたくしの管轄外です。あなたと同じで」

いつもと同じ淡々とした口調で、表情も変えずに古詠が答えた。
予想どおりの彼女の反応に、つれないねえ、と矢瀬は苦笑する。
眼鏡の下の頬を赤らめ、消え入りそうな声で古詠が呟いたのは、その直後のことだった。
「それに水着は嫌いです……どうせわたくしには似合いませんから……」
え、と思わず矢瀬が視線を向けたときには、古詠の姿は見えなくなっていた。
まるで最初から誰もいなかったように、なんの痕跡もなく消えている。
しかし彼女の最後の言葉は、矢瀬の脳裏に鮮明に焼きついていた。
「不意討ちはずりぃーよなあ……ったくよぉ」
可愛いじゃねえかよ、と顔をしかめて矢瀬がうめく。
年相応の少女のような態度を、古詠が矢瀬の前で見せたのは初めてのことだ。やはり〝魔族特区〟を取り巻く環境には、確実に変化が起こり始めているようだった。

4

増設人工島ブルーエリジアムは、紘神島本島から十八キロメートルほど離れた海上に建造されていた。切り分けたパイナップルの形に似た、扇形の小さな島である。
専用のシャトル船が紘神島との間を往復しており、所要時間は二十分ほど。

就航して間もない船内は綺麗で、デッキからの眺めも素晴らしい。ドリンクやお菓子などの無料サービスも充実している。

しかしそれらのサービスを堪能する余裕は、その日の古城には残されていなかった。

「だ、大丈夫ですか、先輩？　なんだか顔色が凄いことになってますけど……？」

ブルーエリジアムの港への到着直後。桟橋にうずくまってる古城の背中を、雪菜が心配そうにさすり続けている。

うつむく古城の顔面は、完全に血の気を失って蒼白になっていた。ある意味、吸血鬼らしいといえなくもないが、べつに吸血衝動の発作に襲われているわけではない。

古城の体調不良の原因は船酔い。シャトル船の揺れに三半規管をやられて、胃の中のものをすべて吐き出し終えたところだった。世界最強の吸血鬼にあるまじき情けない姿である。

「な、なんとかな……このまましばらく休めば復活する……と思う」

それでも古城は、雪菜たちに心配をかけまいと精一杯の虚勢を張る。

幸いなことに、矢瀬との待ち合わせの時間には、まだ十五分ほどの余裕があった。

矢瀬は一足先にブルーエリジアムに到着して、宿泊施設へのチェックインなどの面倒な手配を済ませておいてくれることになっている。そんなわけで古城たちは、彼が戻ってくるのを、ぼんやりと港で待っているのだった。

「なんか意外だね。知らなかったよ。古城君って乗り物酔いする人だっけ？」

そう言いながら隣に屈みこんだ凪沙が、古城の横顔を覗きこんでくる。普段よりもハイテンションな彼女の早口に、古城はうんざりと顔をしかめ、

「そんなことはないと思うんだが、船にはちょっと嫌な思い出があってな。そのせいかもな」

「……そうなの？」

「まあな」

特区警備隊の警備艇に追い回されて、銃撃を喰らったことがあるのだ――などと口にするわけにもいかず、古城は曖昧に言葉を濁す。

幸い凪沙は、特に古城の発言を追及することもなく、

「ふーん……とりあえず、なんか飲む？　売店で飲み物買ってきたけど？」

そう言ってペットボトルを詰めこんだ買い物袋を広げてみせた。体調不良の古城を見かねて、わざわざ運んできてくれたらしい。

出来のいい妹の気遣いに感謝しながら、古城は買い物袋の中身に手を伸ばして、

「そうだな。炭酸系のやつってあるか？」

「あるよ。どっちがいい？　ジャーマンポテトソーダと、コーラの栄養ドリンク味」

ぶほっ、と思わず噎せる古城。想像するだけでも不快な味が口の中に浸み出してくる。

「この最悪の体調でそんな不味そうなもの飲まされたら死ぬわ！　っつか、栄養ドリンク味のコーラってなんなんだよ!?　最初から栄養ドリンクを飲めばいいだろ！」

我ながら妥当な抗議だと思う古城だが、凪沙は反省の色もなく不満げに頬を膨らませて、
「こういう意欲的な新商品は嫌いじゃないけどなあ。冒険心が感じられて」
「冒険を通りこして、ただの無謀な挑戦になっちまってるじゃねえか」
「古城君が飲まないなら、雪菜ちゃんに犠牲になってもらうことになるけどいい？」
「……え⁉」
いきなり会話に巻きこまれた雪菜が、凪沙が握る不気味なペットボトルを見て凍りつく。
ベーコン風の固形物が浮かぶ乳白色の飲料と、栄養ドリンクのイメージそのままの黄色いコーラ。斬新なのは認めるが、どう考えても一般受けする飲み物とは思えない。
「犠牲って自分で言い切ってるじゃねえかよ……」
本人たちには聞こえないように小声でツッコミながら、古城はそっとその場を離れた。「どっちにする？」と凪沙に訊かれたまま固まっている雪菜に、心の中で、済まん、と詫びる。
時刻は午前九時を過ぎたところだった。
遊園地やプールなどの営業開始時間はまだ先だが、ブルーエリジアムには、続々と招待客が押し寄せている。さすがは噂の最新リゾートといったところだ。
古城は傍にあったベンチに座って、人々の姿を眺めながら、吐き気が治まるのを待っている。
そんな古城の首筋に、突然ひんやりとしたなにかが押し当てられた。
うお、と驚いて振り返る古城を見下ろして、小洒落た私服姿の浅葱がニヤニヤと笑っている。

彼女が古城の首に押しつけていたのは、熱冷まし用の白い冷却ジェルシートだった。
「はい、古城。これ貼っとくと、ちょっとは楽になるわよ」
「……浅葱か。体調悪いんだから、ビビらせんなよ！」
「船酔いくらいで、なっさけないわね」
口ではきついことを言いながらも、浅葱は古城の首の後ろに、丁寧にシートを張りつけてくる。心地好い冷たさが身体の芯にまで伝わってきて、耐え難かった吐き気がいくらか和らいだように感じられた。
「おお、なんか効きそうな気がする」
「でしょう？」
古城の素直な反応を眺めて、浅葱が得意げに顎を逸らした。
そして彼女はそのまま、ぷふっ、と小さく噴き出す。
「……なんだよ？」
「だって、第四真祖のクセに船酔いして冷えペタとか、いくらなんでもダサすぎじゃない？　そんなんで世界最強の吸血鬼とか言われても、いまだに信じられないわ」
古城の額に二枚目のシートを貼りながら、浅葱は愉快そうに笑い続ける。そう言えば彼女はつい先日、古城が吸血鬼になったということを知ったばかりなのだ。
普通なら、そのことで動揺したり怯えたりしそうなものだが、古城に対する浅葱の態度は、

吸血鬼バレする前とまったく変わりなかった。むしろこんなふうに面白がっているような印象すら受ける。古城としても、そんな浅葱の反応に感謝していないわけではないのだが、

「俺だって好きでこんな体質になったわけじゃねーよ！　それからくれぐれも言っとくけど、この話、凪沙にはするなよな」

「そっか、凪沙ちゃんって魔族恐怖症だもんね……ふふーん」

真面目な顔で一度うなずいたあと、浅葱はニヤリと唇の端を吊り上げた。

その表情に一抹の不安を覚える古城。

「な……なんだよ、その、弱みを握ってやったと言いたげなドヤ顔は……!?」

「冗談よ、冗談。吸血鬼なんかをネタにしなくても、凪沙ちゃんに言えない古城の秘密なんて腐るほど握ってるし。ほらほら、中二のときの体育倉庫のアレとか……」

「やかましいわ！　くそ、忘れたかった過去を思い出しちまったじゃねえかよ！」

思わず頭を抱えて苦悩する古城。古城が吸血鬼だったという秘密など、浅葱にしてみれば、中学時代の黒歴史とせいぜい同じ扱いらしい。

「そういえば矢瀬のやつ、おまえが一緒に来るなんてひと言も言ってなかったんだが」

これ以上、浅葱が余計な記憶を掘り起こす前に、古城は話題を変えることにする。

「そりゃそうでしょ。あたしも昨日の夜遅くに、いきなり基樹に誘われたんだもん。おかげで準備する時間が足りなくてさ。今日の水着は今イチ気に入ってるやつじゃないのよね」

「いや、そんなもんはべつにどうでもいいんだけどな」

深刻そうな浅葱の呟きを、古城はあっさりと受け流す。浅葱は、ピキ、と頬を引き攣らせ、

「は!?　そんなもん……？　どうでもいい……？」

「それよりも、矢瀬のやつ、なに考えてんだ？　怪しくないか？」

「……それはあたしも気になってたのよね。なんか裏がありそうで」

ふて腐れたように唇を歪めながらも、浅葱は古城の発言に同意した。

軽薄そうな見た目に似合わず、矢瀬は細かいところまで気が回るいい友人だ。だが逆に気が回りすぎて、妙な陰謀を企むことがある。

たとえば球技大会のときに、古城と浅葱を無理やりダブルスのペアにしようとしたのが、その一例だ。本人に悪気はないのだろうが、お節介なことには変わりない。今回のブルーエリジアム旅行の裏にも、同じような陰謀が隠されているような気がして、古城たちは完全に疑心暗鬼になっていた。と、

「あれぇ……矢瀬っち？」

「悪イ悪イ、待たせたな」

まさに、噂をすれば――というタイミングで矢瀬本人の声が聞こえてきて、古城と浅葱が振り返る。古城たちがいる船着き場の前に、一台の車が入ってきたところだ。

ゴルフ場などでよく見かける、小型の電動カートである。運転席に座っていたのは、密閉型

ヘッドフォンを首に引っかけたアロハシャツ姿の少年だ。
「え、矢瀬っち、運転できたの!? 免許は？」
電動カートに駆け寄った凪沙が、驚いて運転席の矢瀬に訊く。矢瀬は堂々と道の真ん中にカートを停めて、
「ブルエリの中は私有地だから、免許は要らねーんだよ。それに、こいつは無人運転だしな」
そう言って矢瀬が指さしたダッシュボードには、ブルーエリジアム内の簡易なマップと、行き先を指定するタッチパネルが埋めこまれていた。ちなみにタッチパネルの横には、コインを投入するスロットがある。どうやらこの電動カートは、百円玉を投入して動かす仕組みになっているらしい。ハイテクなのか安っぽいのか、よくわからないシステムだ。
「えー、それではこれより本日の宿泊地に案内いたします。皆様、カートにお乗りください」
唐突に旅行添乗員と化した矢瀬が、古城たちに指図する。なんだその口調、と思いつつも、ぞろぞろとカートに乗りこもうとした古城たちだが、
「あの……この車って四人乗りなのでは？」
座席が足りないことに気づいて、雪菜が途中で立ち止まる。
矢瀬を含めた一行の人数は五人。しかし電動カートの座席は四つ。それぞれが肘掛けつきの一人用シートなので、無理やり詰めて座ることもできそうにない。
「ああ、大丈夫だいじょうぶ。ほら、荷台が空いてるだろ？」

そう言って矢瀬は、リアシートの裏側を指さした。たしかにそこには荷物を載せるためのスペースがあるが、おそらく本来はゴルフバッグ置き場だ。座ることもできないくらい狭い上に、ゴルフクラブを取り出しやすくするために思いきり斜めに傾いている。
「荷台って……誰がこんなところに乗るんだ……？」
あからさまに不安定な荷台を眺めて、ぼそりと呟きを洩らす古城。その瞬間、その場にいた全員の視線が一斉に古城に集まった。
「って、俺かよ!? ちょっと待て、まだ俺は船酔いの後遺症が……」
「車酔いするほどスピード出ないから安心しろって。じゃあ、出発すぜ。ポチっとな」
「ちょっ……待てって言ってるだろ！」
いきなり置き去りにされそうになった古城が、慌てて荷台によじ登る。その瞬間、古城たちを乗せたカートは、突然弾かれたように加速した。
たしかにスピードはそれほどでもない。普通の車に比べれば全然遅い。が、
「どわっ、揺れる揺れる落ちる落ちる停めろ矢瀬、せめてスピード落とせっ！」
剝き出しになったカートの荷台は、路面のわずかな凹凸を拾って揺れまくる。もともと人が乗るようには造られていないので、震動がもろに伝わる構造になっているのだ。
「せ、先輩……!?」
振り回されている古城に気づいて、雪菜が不安そうに振り返る。

しかし矢瀬は、計算外だったなあ、と呑気に頭をかいて、
「悪ィ、古城。こいつ、一度動き出すと目的地に着くまで止まれないんだわ――」
「え!?」
お手上げだ、というふうに肩をすくめる矢瀬。無人運転中のカートは、その間にもぐいぐいと力強く加速して、
「止めろおおおおおおおおおおおおっ――――!」
古城の悲痛な絶叫が、リゾートの空に響き渡る。
ブルーエリジアム滞在初日の朝は、そんなふうにして始まった。

5

船着き場を出発したカートは、扇形のブルーエリジアムの外周を反時計回りに進んでいく。
最初に見えてきたのは、〝魔獣庭園〟と名づけられた水族館及び動物園。絶滅危惧種を含む世界各地の魔獣たち二百種・二千二百匹を飼育、研究する施設だ。その多くは一般の見学者にも公開されており、特に海棲魔獣の飼育数では世界一の規模を誇ると言われている。
その次は、ブルーエリジアム最大の売りである、海岸沿いの広大なプールエリアだった。国際大会も開催可能な室内競泳プールから、全長二百メートルを超えるウォータースライダーまで、趣向を凝らした多数のプールが用意され、水着のままで一日中遊べるようになっている。
プールの隣はアミューズメントパークだ。観覧車やジェットコースターなどの定番アトラクションだけでなく、〝魔族特区〟の特性を活かした本物のお化け屋敷、さらには魔族以外の生還は保証しないという、とんでもない絶叫マシンが用意されているという。
そしてレストランや売店が建ち並ぶショッピングモールを抜けた先が、古城たちが今夜から滞在する予定の宿泊エリアだった。ブルーエリジアムの象徴ともいうべき巨大な〝ホテル・エリュシオン〟を中心に、多数のリゾートマンションや貸別荘が運河沿いに配置されている。
無人運転の電動カートが停車したのは、その中の一軒――
二階建ての白いコテージの前だった。
「いやあ、全員、無事に着いてなによりだったな」
運転席に座っていた矢瀬が、カートを降りてのんびりと背伸びをする。
「これが……どうやったら無事な姿に見えるんだ……?」
恨みがましい口調で答えたのは、荷台にしがみついたままの古城だった。船着き場からコテージまでの運転所要時間は約十五分。その間、荷台で内臓をシェイクされ続けた古城の体調は最悪だった。ただでさえ船酔いで弱っていた胃腸が、全力で不調を訴えてくる。
しかし矢瀬は、そんな古城の苦情をあっさりとスルーして、
「おかげで電動カートの安全面に、改善の余地があるってことがはっきりしたな。運営会社に

レポートを上げとかないと」

「……てめェ」

あとで体力が回復したら、絶対にこいつは殴っておこう、と古城は決意した。

その間にカートから荷物を下ろした凪沙は、地中海風のコテージの中へと移動して、

「ね、矢瀬っち。今日から泊まるとこって本当にここ？　いいの!?」

「なかなか立派なもんだろ」

歓声を上げる凪沙を眺めて、矢瀬が自慢げに笑ってみせる。

実際、凪沙がはしゃぐだけあって、真新しいコテージ中身は予想以上に豪華なものだった。

広大な室内。充実した設備。冷蔵庫の中には冷えた飲み物がぎっしりと詰まっている。

「ベッドは余ってるはずだから、適当に部屋を割り振っといてくれ」

「はーい！　わっ、二階も広い！　お洒落！　エアコン効いてるし、キッチンも豪華だし、ソファはふかふかだし、お風呂にサウナまでついてるよ！」

興奮した子犬のように、屋内を忙しなく走り回る凪沙。一方、外に取り残された古城たちは、豪華すぎるコテージに圧倒されて玄関前で固まっていた。

「――基樹、あんたホントなに考えてんのよ!?」

「え、なにがだ？」

「とぼけてんじゃないわよ！　いくら予約ミスの穴埋めだからって、タダでこんないいところ使わせてもらえるわけないでしょうが！」

古城たち全員の意見を代弁して、浅葱が矢瀬を問い詰める。

日本本土から遠く離れた絃神島では全般的に物価が高い。ましてやこのブルーエリジアムは観光地――それも予約が殺到している人気リゾートなのだ。正式オープン前の仮営業期間とはいえ、利用料金は生半可な金額では済まないはず。

「心配性だな、俺は嘘はついてないぜ。入場料と宿泊費はタダだって。入場料と宿泊費はな」

浅葱に胸ぐらをつかまれたまま、矢瀬は降参したように両手を挙げる。含みのある彼の言い回しに、浅葱は更に目つきを険しくした。

宿泊エリアのゲートをくぐって、新たな電動カートが近づいてきたのは、そのときだった。

古城たちが乗ってきた来場者用のカートとは違う。白一色のシンプルな業務用カートである。

運転席に座っているのは、タイトスカートを穿いた若い女だ。

年齢は二十代の後半くらい。清潔感のあるメイクや髪型から判断するに、職業は飲食店関係だろうか。ファミレスやファーストフード店あたりの有能な女店長という雰囲気だ。

「おーい。ごめんね、待たせちゃったわねー」

意外におっとりとした女性らしい口調で、女が矢瀬に呼びかける。

矢瀬はなぜか姿勢を正し、礼儀正しく頭を下げて、

「あー、チーフ。お疲れっす」

「……チーフ？　誰だ？」

いったいどういう関係だ、と矢瀬と女を見比べる古城。

カートを停めて降りてきた女は、そんな古城の全身をざっと眺め回して、

「助っ人に来てくれたのは、この子たち？　うんうん、見た目もまあまあだし、助かるわー。この週末はギリギリの人数でシフト回してたからね。さっそく今日の午後からお願いね」

「……助っ人？」

話の展開についていけずに、古城はひたすら困惑する。呆然としているのは浅葱たちも同様だ。唯一、状況を理解している矢瀬は説明責任を放棄して、素知らぬ顔で口笛を吹いている。

「おい、矢瀬」

「シフトってなんのことよ？　あんた、まさかあたしたちを働かせるつもりだったわけ⁉」

左右から矢瀬に詰め寄って、古城と浅葱が小声で訊く。

しかし矢瀬は悪びれた様子もなく、むしろ邪悪な表情で微笑んでみせた。

「ん？　だから説明しといただろ。予約にミスがあって欠員が出てるって」

「欠員って、アルバイトの頭数のことかよ⁉」

思わず激昂しながらも、古城は意識の片隅で妙に納得していた。

考えてみれば当然のことだった。ブルーエリジアムは、年間数十万人の来場を予定している巨大施設である。予約ミスで客が一組減った程度では、影響などないも同然だ。わざわざタダで古城たちを招待する理由などどこにもない。

矢瀬が必要としていたのは客ではなく、施設で働くバイト店員だったのだ。

とはいえ、急な欠員ということで、普通のやり方でアルバイトを募集している暇はなかったのだろう。それにブルーエリジアムは仮営業中で、非公開の情報も多い。あまり信用できない人間を連れてきて働かせるわけにもいかないはずだ。そこで矢瀬が目をつけたのが、古城たちだったというわけだ。

「なんであんたは、そういう大事なことを最初に言わないのよ⁉」

「だってな……普通にタダ働きしろって言っても、古城はともかく、おまえは嫌がるだろ？」

「あたりまえでしょ！」

「なんで俺はタダ働きさせても大丈夫なことになってんだよ⁉」

浅葱と古城が猛烈な勢いで抗議する。矢瀬がなにか企んでいるのではないかとずっと不安に思っていただけに、陰謀の正体が判明したときの憤りはひとしおだった。

一方、放置される形になってしまっていた雪菜は、所在なげな表情で矢瀬を見上げて、

「あの……わたしたちはどうすれば……？」

「ああ、姫柊ちゃんたちは、こいつらのことは気にせずに遊んでてくれ」

そう言って矢瀬は、ブルーエリジアムの刻印が入ったICカードを何枚か取り出した。

「コテージの鍵とアトラクションの無料パスを渡しとく。これがあれば基本的にブルエリ内の

施設はタダで利用できるから」
「で、でも……」
「気を遣わなくても大丈夫だって。どのみち中学生を働かせるのは禁止されてるしな。古城からのプレゼントだとでも思って、凪沙ちゃんと一緒にのんびり過ごしな」
遠慮しようとする雪菜の手に、矢瀬がICカードを押しつける。そんなふうに言われてしまうと、雪菜としても断る理由がない。すみません、と困り顔で礼を言うのが精一杯だ。
「待って……姫柊さんたちが別行動ってことは、働くのはあたしと古城の二人だけ？」
雪菜たちの会話を聞いていた浅葱が、不意に声のトーンを落として確認する。もちろん、と矢瀬は意味ありげに浅葱に微笑み返して、
「さすがに心細いだろうと思って、同じ職場に配属してもらうように頼んでおいたぜ」
「だから職場もなにも、俺たちはまだ働くとは――」
言ってないだろ、と反論しかけた古城の言葉を、浅葱が途中で遮った。
「まあ、いいわ」
「え？　あ、浅葱？」
「ここまで来ちゃった以上、文句言ってても仕方ないしね。どうしてもって言うなら手伝ってあげるわよ」
「おお、順応性高いな。さすがだぜ」

矢瀬がパチパチと手を叩いて浅葱を賞賛する　彼女の突然の心変わりについていけずに、古城は呆然とするだけだ。
そして浅葱は、すっと目を細くして矢瀬を睨め上げ、
「その代わり、バイト代はきっちり請求するわよ。わかってんでしょうね。あたしは高いわよ」
「お……おう……わかってるぜ……」
浅葱の視線に気圧されたように、脂汗を滲ませてうなずく矢瀬。
チーフと呼ばれていた女性は、それを見て話がまとまったと判断したらしい。立ち尽くす古城を呼び寄せて、カートから取り出した荷物を押しつけてくる。
「これ、スタッフTシャツね。下は水着で大丈夫。時間がないから、早めに着替えてきてね」
いまだ混乱から立ち直っていない古城は、手渡された二人ぶんのTシャツを無言で見つめた。
ブルーエリジアムの上空はよく晴れて、強い陽射しが濃い影を落としている。
「……マジか、おい」
古城の弱々しい呟きは、運河沿いの湿った風に流されて消えていく。

第1話 働く第四真祖
Vampire's at Work

1

競泳プール数面ほどの広大な水槽に、無数の魔獣たちが泳いでいた。
水底近くで眠っているのは、マカラと呼ばれる南アジアの怪魚。カエルのような胴体にトビウオのような翼を持っているのは、海棲のウォーター・リーパーだろう。それ以外にも、タコやウナギに似た名も知れぬ魔獣たちが、数え切れないほど多く水槽内を回遊している。
ブルーエリジアム最大の観光名所――〝魔獣庭園〟の大水槽だ。
「うっわー……」
通路の手すりから小柄な身体を乗り出して、暁凪沙が目を輝かせる。ショートカット風に短く結った長い髪が、そのたびにヒョコヒョコとリズミカルに揺れた。
「本当にでかいねえ。さすが世界最大級の魔獣水族館だね……あれって馬？　馬の人魚？」
そう言って凪沙が指さしたのは、馬の前半身と魚の後半身を持つ不思議な生物だ。鬣の代わりに伸びた銀色のヒレが、水に濡れてキラキラと輝いている。神々しさすら感じさせる美しい魔獣だった。
「ヒッポカンポスだね。北海帝国の沿岸に棲んでる海馬の一種かな。わたしも実物を見たのは初めてだけど」

凪沙の隣で、雪菜が解説する。獅子王機関の剣巫として、様々な魔獣の知識を持つ雪菜だが、さすがに絶滅寸前の稀少な海棲魔獣を、こんな間近で目にする機会はなかった。冷静さを装いながらも、得がたい体験に興奮を隠せない。
「あの目が可愛いよね……あたしもエサを上げてみたいなあ」
うっとりとした口調で呟く凪沙。
水槽の縁では、ウェットスーツを着た魔獣の飼育員が、ヒッポカンポスを餌付けしていた。来年からの正式開業に向けて、ヒッポカンポスに芸を仕込んでいるのだ。
噂では、この〝魔獣庭園〟が建設された目的は、魔獣の研究に必要な膨大な飼育費の一部を、来場者からの入場料収入で補うことだという。世界初のヒッポカンポス・ショーは、その集客の目玉になると期待されているらしく、飼育員の指導にも熱が入っているように思われた。
吸血鬼や獣人のように、人間と意思疎通できるだけの知性を持ち、聖域条約によって権利を保障された魔族と違って、魔獣の保護は遅れている。世間では、多くの魔獣が、いまだ危険な怪物だと思われており、密猟や虐殺事件も後を絶たないのだ。
そして現実に魔獣の多くは高い戦闘能力を持ち、人を襲う種族も少なくない。
〝魔獣庭園〟のような施設が増えて、魔獣の生態の研究が進めば、人類と彼らの共生もやりやすくなるのかもしれないが、道のりは決して平坦とは思えなかった。
そんな感傷に耽る雪菜の隣では、ビーチボールでお手玉をするヒッポカンポスの芸達者ぶり

に凪沙が歓声を上げている。雪菜はそんな彼女の横顔を黙って見つめた。

「――雪菜ちゃん、どうしたの？」

怪訝そうな雪菜の視線に気づいた凪沙が、ん、と首を傾げて訊く。

雪菜は、微笑んで首を振り、

「ううん。恐くないのかな、と思って……ヒッポカンポスのこと」

「あ、もう……！　古城君でしょ、雪菜ちゃんに余計なこと言ったの！」

怒りを表現するように両手を突き上げながら、凪沙が乱暴に息を吐く。

「……余計なこと？」

「あたしの魔族恐怖症のこと。もしかして凪沙が事故で入院していたことも聞いた？」

うん、と雪菜は遠慮がちにうなずいた。暁凪沙は、過去に魔族がらみのテロ事件で重症を負ったことがあり、それ以来、魔族との接触を極端に恐れているという。それを雪菜に教えたのは、実は古城ではなく浅葱だったのだが、たいした違いではないだろう。

魔族と遭遇した彼女が取り乱してパニックになった姿を、雪菜も何度か目撃したことがある。その凪沙が今の今まで、自分が魔族恐怖症だとバレてない、と思っていたのは意外だが。

「差別するつもりはないんだけど、やっぱりまだちょっと恐いんだ。吸血鬼とか獣人とか」

落ちこんでいるような頼りない口調で、凪沙が告白する。しかし心配顔の雪菜を見返して、彼女はすぐに明るく笑い、

「でも魔獣は平気だよ。男性恐怖症の人だって、犬のオスなら大丈夫でしょ　あたし、動物好きだし、爬虫類も平気だし。でも昆虫系はつらいかな。海蜘蛛とか、ちょっと勘弁して欲しいよねえ」

「昆虫系……？」

蜘蛛は昆虫ではないと指摘するべきか聞き流すべきか、どうでもいいことで悩み始める雪菜。

凪沙は、その雪菜の顔を興味深そうにジッと覗きこんで、

「ねえねえ、もしかして、古城君と浅葱ちゃんのこと、気になってる？」

「うん……少し。わたしたちだけこんなふうに遊んでるのは、先輩たちに悪い気がして」

微苦笑を浮かべて、雪菜は答える。

古城と浅葱が、ブルーエリジアムに着くなりバイトに駆り出されたのは一時間ほど前のこと。実家の稼業の手伝いがあると言って矢瀬もいなくなってしまったため、取り残されてしまった雪菜たちは、仕方なく二人きりで〝魔獣庭園〟見学に来たのだった。

それはそれで気楽で愉しかったりもするのだが、古城の監視役という立場上、これでいいのだろうかと多少の罪悪感を覚えてしまう雪菜である。

「そっちかあ……」

しかし凪沙は、落胆したようにぐったりとうなだれる。どうやら雪菜の反応は、凪沙が求めていた答えとは少し違っていたらしい。

「え？」

「いやあ、お仕事を手伝えないのは仕方ないよ。あたしたちまだ中学生だし。矢瀬っちもそう言ってたし……ていうか、そういうことじゃないんだよ。ほら、浅葱ちゃんのことですよ」

「藍羽先輩がどうしたの？」

目を瞬いて訊き返す雪菜。凪沙は、わざとらしく真剣な表情になって、

「つまりね、雪菜ちゃんって浅葱ちゃんのこと、どう思ってるの？」

「え……と、恰好いい人だな、と。度胸があって、優しくて」

それは雪菜の本心からの言葉だった。

なにしろ雪菜は、浅葱に二度も命を救われているのだ。一度目は、雪菜たちが黒死皇派に拉致されたとき。二度目は、雪菜が絃神冥駕と戦ったとき。

普通の人間なら恐怖で動けなくなるような状況下で、浅葱は、古代兵器の破壊プログラムを作り、あるいは施設の警備ポッドをハッキングして雪菜を救った。獅子王機関の剣巫が、なんの戦闘訓練も受けていない女子高生に救われたのだ。それ以来、雪菜は浅葱に敬意を払っていたし、同じくらい警戒してもいたのだった。そして、

「雪菜ちゃん、好き！」

「……え!?」

唐突に凪沙に抱きつかれて、雪菜はわけがわからず困惑する。凪沙はどこか興奮した様子で、

雪菜の両手を強く握り締め、

「雪菜ちゃん、すごいね。さすがだよ。わかってるよ。そうなんだよ、浅葱ちゃんは頭よくて、優しくて、格好いいんだよね。みんな言ってもわかってくれないんだけど」

「……わかってくれない？」

「そうだよ、みんな浅葱ちゃんの見た目しか褒めないんだよ。特にうちのクラスの男子！　雰囲気がエロいとか、いろいろ手取り足取り教えて欲しいとか、援交やってそうとか……んもー、あいつら！」

思い出しているうちに腹が立ってきたのか、まるで自分のことのように怒り出す凪沙。

雪菜は、しばらく呆気にとられてそれを眺めていたが、

「藍羽先輩のこと、好きなんだね」

微笑ましく思いながら雪菜が言うと、凪沙は照れたように小さくうなずいた。

絃神島に来た直後から、長い入院生活を送ることになった凪沙にとって、浅葱は貴重な同性の友人で、同時に数少ない外の世界との絆だった。それでなくても才色兼備を地でいく浅葱に対して、凪沙が憧れを抱くのはむしろ当然のことだ。

「浅葱ちゃんが本当のお姉ちゃんになってくれたらいいよねえ……古城君が相手じゃ勿体ないという問題は置いといて」

あながち冗談とも思えない真剣な口調で、凪沙が呟く。そうだね、と雪菜はうっかり同意し

そうになったものの、さすがに友人の兄に対して失礼だと思い直して口ごもり、
「え……と、それは……」
「でもそれは雪菜ちゃんも同じなんだよ！」
「……はい？」
唐突に話の矛先を向けられて、雪菜の思考が一瞬停止する。
「たしかに浅葱ちゃんのことは好きだけど、凪沙の立場は中立だから！　雪菜ちゃんのこともしっかり応援してるから！　というわけで、雪菜ちゃんの正直な気持ちを聞きたいというか、でも、聞かないほうがいいのかな。うわあ、悩むよう……」
「あの、いろいろと誤解があると思うんだけど、わたしは、その――」
頭を抱えて苦悩する凪沙に、雪菜はしどろもどろに言い訳する。よもや自分はおまえの兄を監視しているだけなのだ、と面と向かって言うわけにもいかない。
しかし凪沙は、雪菜の葛藤などお構いなしに、
「でも、雪菜ちゃんをお姉ちゃんって呼ぶのは抵抗あるよねえ……ちょっと頼りないし……」
「た、頼りない……？」
友人からの思わぬ低評価に、雪菜は軽く衝撃を受けた。よりにもよって凪沙が自分をそんなふうに見ていたとは。自分ではしっかりしているつもりだっただけにショックが大きい。
さすがに反論しなければ、と焦りに駆られて、雪菜が口を開きかけた。その直後――

爆撃にも似た暴力的な震動が、雪菜たちの足元から頭上に向けて突き抜けて、増設人工島を轟然と揺らした。
足元が陥没するような錯覚を覚えて、雪菜は咄嗟に通路の手すりをつかむ。
「これは……!?」
「なに……今の？」
ふと見れば、凪沙も雪菜と同じような姿勢で柱にしがみついていた。
だが、変化があったのは、それだけだ。
増設人工島の地面は揺れていない。水面が波打っているわけでもない。雪菜たち以外の来場者は笑顔のまま、〝魔獣庭園〟の見学を続けている。
異変に気づいていたのは雪菜と凪沙だけ。強力な霊媒の素質を持つ二人だけが、不可視の衝撃を感知した。おそらくあれは魔力の波動――それも、ブルーエリジアム全体を揺るがすほどの爆発的な魔力を、どこかで誰かが放ったのだ。
まさか、と真っ先に雪菜が疑ったのは古城のことだった。前に彼が何度かやらかしたように、第四真祖の眷獣が暴走したのなら、今の規模の魔力が発生してもおかしくはない。
だが、雪菜が感じた魔力の質は、明らかに古城のものとは違っていた。
それどころか、魔力の発生源は、ブルーエリジアムの中ではない気がする。あれはもっと遠い場所――増設人工島から遠く離れた、深海底で発生したものだ。

逆に言えば、それほど遠く離れていてもなお、雪菜たちには、第四真祖の眷獣と同等の魔力が感じられたということになる。だとすれば、

魔力の波動を放った存在は、第四真祖以上の化け物なのではないか――

その可能性に思い至って、雪菜の背筋をゾッと戦慄が駆け抜けた。

そして雪菜の思考を現実に引き戻したのは、恐怖におののく凪沙の絶叫だった。

「雪菜ちゃん……魔獣が……！」

凪沙が叫び終える前に〝魔獣庭園〟の水槽が激しく揺れた。

恐慌状態に陥った魔獣たちが、我を忘れて水中で暴れていた。

怪魚マカラの巨体が水槽の壁に激突し、強化ガラスが不気味に軋む。水面付近ではヒッポカンポスが荒れ狂い、飼育員が腰を抜かして倒れこんでいる。

だが、彼らに攻撃の意思はない。彼らはただ怯えているのだ。

霊媒である雪菜たち以上に魔力に敏感な魔獣たちが、あの強烈な波動を感知して、ここから逃げ出そうと焦っている――

「くっ……」

雪菜が焦燥に唇を噛む。

たとえ事情がわかったところで、今の雪菜に、あの魔獣たちを鎮圧するすべはない。

雪菜の手元に〝雪霞狼〟はなかったし、どのみち雪菜一人では、水槽内の魔獣たちすべてを

無力化するのは不可能だ。ただ怯えているだけの魔獣たちを殺すことへの抵抗もある。

だが、このままではいずれ水槽は崩壊し、ブルーエリジアム内に甚大な被害をもたらすことになるだろう。おそらく、この水族館エリアだけでなく、地上の野外エリアにいる魔獣たちも、同じようにパニックになっているはずだ。彼らが〝魔獣庭園〟の外に逃走すれば、一般の来場者たちも危険に晒されることになる。

どうすればいい、と雪菜は絶望に打ちひしがれそうになり、そのとき、

「――静まれ」

凍気を孕んだ静かな声が、凪沙の唇から洩れ出した。

同時に解き放たれたのは、身体の芯まで凍えるような爆発的な魔力だった。

その膨大な魔力に圧倒されて、暴れていた魔獣たちが一斉に沈黙する。恐怖に囚われていた彼らの心を絶望させることで、逆に沈静化させたのだ。

凪沙の瞳は、凪いだ水面のような無感情な光を湛えていた。

超然としたその気配は、普通の人間のものではない。強大な魔力を秘めた何者かが、凪沙に憑依しているのだ。第四真祖の眷獣にも匹敵する力を持つ何者かが――

「あなたは……」

壮絶な威圧感に必死に耐えながら、雪菜が凪沙を見つめて訊く。

しかしそんな雪菜の目の前で、糸の切れた人形のように凪沙の全身から力が抜けた。

凪沙の肉体にかかる負担を恐れているかのような、性急な憑依の幕切れだった。

「わっ……と!?」

バランスを崩して倒れそうになった凪沙を、雪菜がギリギリで抱き留める。

凪沙は自分の身になにが起きていたのか、気づいていないというふうに首を振り、

「あいたたた……あれ？　ヒッポちゃんたちは？」

「それは……」

どう伝えればいいのかわからずに、雪菜は沈黙した。

代わりに雪菜たちの背後から、聞き覚えのない静かな声が聞こえてくる。

上品だが、どこか冷たく突き放したような、距離を感じさせる声だった。

「もう、落ち着いたみたいね」

気配もなく聞こえてきたその声に、雪菜は驚いて振り返る。

声の主は若い女だった。通路の隅の休憩用ベンチに、彼女は一人きりで座っている。

古風な長い黒髪が似合う綺麗な少女だ。黒を基調とした制服は、紘神市内にある名門校のものだった。上品に揃えた膝の上には、コンパクトな一眼レフカメラが抱かれている。壁に立てかけた黒い筒は、三脚を持ち運ぶためのケースだろう。

「――違って？」

驚く雪菜を見返して、黒髪の少女が首を傾げる。魔獣たちのパニックを間近で見ていたはず

なのに、彼女はひどく落ち着いていた。不自然なほどに穏やかだ。
「いえ……そうですね」
戸惑いながらも雪菜はうなずく。
つかみどころのない印象はあるが、目の前の少女に敵意は感じられなかった。彼女は、ただ雪菜たちを観察しているだけだ。庭園に迷いこんだめずらしい小動物を監視するように――
「恐かったわね、さっきの」
困惑する雪菜を面白そうに眺めて、少女が訊く。
雪菜は、凪沙を抱き支えたまま曖昧にうなずいて、
「あの、あなたは」
「写真」
「……え？」
「写真、撮らせてもらえて？」
黒髪の少女が、カメラのレンズをそっと雪菜たちに向けてくる。彼女の唐突な要求に焦った雪菜は、レポーターに追われる芸能人のように掌で目線を遮りながら、
「いえ……あの、今はその、プライベートなので……」
「そう。残念」
意味不明な雪菜の言い訳を訊いて、黒髪の少女は小さく噴き出したようだった。三脚のケースを担いで彼女は立ち上がり、さよなら、というふうに唇の端を吊り上げた。
「また会えるわ。たぶんね。できれば、そのときは仲良くしてもらえると嬉しいのだけど」
最後にそう言い残して、黒髪の少女は背中を向けた。
どこか意味ありげな彼女の言葉に、雪菜は黙って唇を噛む。
「今の人……綺麗な人だね。年上かなあ……」
雪菜に支えられたまま、凪沙がぼそりと感想を洩らした。
緊張感のない友人の態度に、思わず苦笑しかけた雪菜は、しかし、凪沙の次の言葉を聞いてハッと息を呑んだ。それは雪菜自身、無意識に自覚していたことだったからだ。
「――ちょっと、雪菜ちゃんに似てたね。雰囲気が」

2

灼熱の太陽が照りつける、広大なプールサイドの片隅。
こぢんまりとした屋台のレジで、藍羽浅葱が満面の笑みを浮かべている。やけくそ気味の営業スマイルだ。下ろしたての華やかな水着の上に着ているのは、目立つことだけが取り柄のダサいロゴが入った白Tシャツ。売店〝ラダマン亭ズ〟のスタッフTシャツである。

「焼きそば二つとウーロン茶とコーラとメロンソーダで二千二百五十円になります！　占城！」

「へい、焼きそば二つ入りました！」

息の合ったリズムで、浅葱の注文を受ける古城。彼女と同じスタッフTシャツを着た古城が立っているのは、屋台の厨房。チリチリに焼けた黒い鉄板の前だった。

「だーっ、鉄板が熱ィ……死ぬ！　焦げる！　灰になる！」

鉄板の上に油を引きながら、古城は絶え間なく愚痴を吐き続ける。炒めた豚バラ肉と野菜から立ち上る湯気が、屋台の中の不快指数を跳ね上げていく。

なにしろリゾートに遊びに来たはずなのに、なぜかプールサイドの屋台で焼きそばを売らされているのだ。不満のひとつも洩らしたくなるのは、むしろ当然というものだろう。

「話が違うぞ。海辺の快適なリゾートじゃなかったのかよ！」

「うるさい。熱いのはあんただけじゃないんだから黙ってなさい」

出来たての焼きそばのパックを受け取りながら、文句たらたらの古城を、浅葱が一喝する。

その言葉を裏付けるように、浅葱もすっかり汗だくだ。暑さ対策で結い上げた髪の隙間から、しっとりと濡れた白い首筋がのぞいている。

「ああ、でもホント暑いわね……古城も水分補給しときなさいよ。脱水症状で倒れるわよ」

「お、おう……」

浅葱が差し出す飲みかけのペットボトルを受け取りながら、ごくり、と古城は喉を鳴らした。

本人が自覚しているのかどうかは知らないが、汗で濡れたTシャツがぴったりと肌に張りついて、浅葱の身体のラインが鮮明に浮き出ている。普通に水着でうろつかれるよりも、なぜか妙に気になってしまう。それにTシャツの裾から伸びている白い太腿もやばい。狭い屋台の中では、どうしても距離が近くなってしまうため、余計に意識してしまう。

「古城……どうしたの？」

挙動不審な古城に気づいて、浅葱が訝しげに顔を寄せてきた。

古城は慌てて彼女から視線を逸らし、

「あ、いや、おまえって、そういうのもけっこう似合うなと思ってな」

「似合うって、もしかしてこのTシャツのこと？」

浅葱は、自分が着ているTシャツを眺めて、しみじみと深く溜息をついた。

ファッションに人一倍気を遣う浅葱にしてみれば、このTシャツのダサいロゴに対して、いろいろと思うところがあるのだろう。

「なんかそれ全然褒められてる気がしないわ。いちおう礼は言っとくけど」

不機嫌そうにそっぽを向く浅葱を眺めて、古城はこっそり苦笑する。

古城が似合うと思ったのは、彼女のTシャツ姿ではなく、屋台で働く彼女そのものだった。

見た目に反して根が真面目な浅葱は、なんだかんだでよく動く。慣れない接客業にもかかわらず、持ち前の頭の回転の速さと記憶力を活かして、ランチタイムの混み合う時間帯も無難に

客をさばいてみせた。それにつき合いが長いぶん、厨房に立つ古城とのやりとりもスムーズだ。

おかげで ド素人である古城たちが、どうにか屋台を回せているのだから、控え目に言っても上出来の部類だと思う。そんな古城の自己採点を裏付けるかのように、チーフと呼ばれていた店長の女性が、上機嫌で古城たちに声をかけてきた。

「お疲れさま。すごいね、きみたち。ここまで使えるとは、正直思ってなかったよ。これは基樹っくんに感謝かな」

「も、基樹っくん？」

矢瀬に似合わない可愛らしいあだ名に、古城と浅葱は思わず噴き出しそうになる。なんでもチーフは矢瀬の兄の友人らしいのだが、その女性に基樹っくん呼ばわりされているあたり、矢瀬自身、彼女とそれなりに親しい間柄なのだろう。あとで追及しなきゃね、と浅葱が古城に目配せし、同じくアイコンタクトで古城もうなずいた。

そんな古城たちの思いを知ってか知らずか、チーフは人懐こく微笑んで、

「慣れない仕事で疲れたでしょ。順番に休憩入っていいよ」

「はい、ありがとうございます。古城、先いいわよ」

「悪い。助かる」

額の汗を拭いながら、古城がホッと息を吐く。クソ熱い鉄板の前に立ちっぱなしで、さすがに疲労の限界だったのだ。

「そうだ　事務所に戻るついでに、配達をお願いできるかな　これを監視員の詰め所まで」

「了解ッス」

休憩を与えられて気分が軽くなっていたこともあって、古城は気楽にチーフの依頼を引き受けた。渡されたのはLサイズのドリンクが二十人ぶん。一人で運ぶとなるとけっこうな重量だ。

「監視員の詰め所……って、これか。ライフガードセンター……メチャメチャ遠いな！」

配達先の建物があるのは、ラダマン亭ズから見てちょうどプールを挟んだ反対側。道のりにして一キロ近く離れた場所だった。監視員の詰め所や救護室、迷子案内所などが集まっているビルらしい。

「くっそー……騙された。あのチーフ、俺たちに休憩しろとか言っといて、単に自分が配達したくなかっただけじゃねーかよ！」

呪詛の言葉を吐きながら、古城はとぼとぼとライフガードセンターに向かう。今にして思えば、浅葱が古城を先に休憩させたのも、チーフの目的に気づいていたからなのかもしれない。

仮営業期間にもかかわらず、プールエリアは混んでいた。

灼けたコンクリートの上を歩く古城とは対照的に、水の中ではしゃぐ人々の姿は涼しげだ。あまりの羨ましさと妬ましさに、荷物の重みが余計に腕にのしかかる。流れるプールをぐるりと迂回して、どうにか目的地に辿り着いたときには、古城はぐったりと疲れていた。

「ちわーっす……ラダマン亭ズです！　飲み物のお届けに上がりましたー！」

体育会系特有の無遠慮な大声で、古城はライフガードセンターの中に呼びかける。
「おー、こっちこっち。待ってたよ」
監視員の詰め所から顔を出したのは、真っ黒に日焼けした競泳水着姿の男性ライフガードだった。体型は見事にシェイプされた逆三角形。盛り上がった大胸筋で、Tシャツがはち切れんばかりに膨らんでいる。
古城がドリンク満載の紙袋を渡すと、ライフガード氏は真っ白な歯を剝いて笑い、そして不意に目つきを鋭くした。
「……む？」
「な、なんスか？」
ぎょろりとした目で睨まれて、古城は身体を硬くする。ライフガード氏は無言のまま、古城の隣へと回りこんで、
「きみ、名前は？」
「古城ッス。暁古城」
「ふむ……意外にいい身体をしてるな。ライフガードやらないか？　ブルエリでも資格講習会やってるから紹介するぞ？　スタッフ用のトレーニングスタジオも完備してるしな」
そう言って筋肉の具合を確かめるように、古城の背中にそっと手を触れてくる。
「い、いや、遠慮しときます。売店のバイトもありますんで」

「そうか。気が向いたらいつでも声をかけてくれ。やはり人助けの仕事はいいぞ！」
腰に手を当てて、ハッハッハ、と快活に笑い出すライフガード氏。古城は引き攣った笑顔で頭を下げ、逃げるように詰め所の外に出た。このままここで話を聞いていたら、いつの間にか筋トレにつき合わされてしまいそうだ。運動するのは嫌いではないが、ただでさえ暑いこんな日に、この暑苦しい筋肉男と二人で筋トレというのは全力で遠慮したい。
「……やれやれ……休憩する時間なんて残ってねえじゃねーか」
ライフガードセンターの壁の時計を見上げて、古城は弱々しく溜息をつく。
そのとき、ふと視界の端に入った少女の姿が、なぜか少し気になった。
セパレートの青い水着の上に、ナイロン製のパーカーを羽織った幼い少女だ。年齢は十一、二歳くらいだろうか。ぶかぶかのパーカーの袖口を握り締め、彼女は、迷子案内所のベンチに一人きりで所在なげに座っている。
古城と目が合ったことに気づくと、少女は、ふい、と顔を背けた。
肩のあたりで切り揃えた、クセのある髪がふわりと揺れる。
そして彼女は、立ち上がって迷子案内所のカウンターに近づくと、
「ありがとうございました。連れが見つかったので、もう大丈夫です。お世話になりました」
そう言って礼儀正しく係員に頭を下げた。
ずいぶんしっかりした迷子だな、と古城は少し感心する。あの様子なら、古城が気に懸ける

必要もなさそうだ。そう判断した古城は、再び来た道を戻って売店へと向かった。

「――遅い！」

売店に戻った古城を待っていたのは、やさぐれた浅葱の恨みがましい視線だった。

どうやら古城が配達に出かけていた間、彼女が、ほとんど一人で売店を切り盛りしていたらしい。そんなときに限って団体客が押し寄せてきたらしく、厨房の周りは、嵐の後のような惨状を晒していた。その忙しさの反動で、浅葱は完璧にご立腹だ。

「悪かったよ！　配達先が遠かったんだよ、仕方ねえだろ！」

「ふーん……」

弁解する古城を、浅葱がジト目で眺める。なぜか露骨に軽蔑したような表情だ。

「で、その子はなに？　まさかナンパしてきたとか言わないでしょうね？」

「……ナンパ？」

なんのことだ、と困惑しながら、古城は、浅葱の視線を追って振り返る。

そこにいたのは見覚えのある小学生だった。ナイロン製のパーカーを羽織った女の子だ。明るい色の猫っ毛の髪と、気難しい猫を連想させる大きな瞳が印象的な少女である。

彼女は無言で立ち尽くしたまま、古城の背中を見つめている。

「あれ？　おまえ、さっきライフガードセンターにいた迷子か……？」

古城が驚いて声をかけると、小学生は怖ず怖ずと会釈した。彼女の瞳には、警戒心と期待が入り混じった複雑な感情が浮かんでいる。

「江口です。江口結瞳」

硬い声で少女が名乗る。そんな彼女の反応に古城は少し困惑して、

「……結瞳？」

「はい。子どもっぽい変な名前だと思うかもしれませんけど……すみません」

「そうか？　普通にいい名前だと思うぞ。可愛いだろ？」

古城は思ったことをそのまま口にする。もっと変わった名前の持ち主は、今どきいくらでもいるだろうし、それを言うなら古城という名前だって十分に変だ。

しかし古城の返事は、少女にとっては少し意外なものだったらしい。大きな目をパチパチと瞬いたあと、彼女は頬を赤らめながら目を伏せて、

「そ、そうですか。お世辞でも嬉しいです」

「――なに口説いてんのよ、あんたは。こんな小さい子を相手に！」

その直後、古城はいきなり後頭部を浅葱にはたかれた。

俺がなにをしたんだよ、と古城は、あまりの理不尽さに涙目になりながら浅葱を睨み、

「ていうか、結瞳ちゃんだっけか。この店の誰かに用があるのか？」

「用があるのはあなたですから、心配しないでください。暁古城さん、ですよね？」

結瞳はそう言って、ジッと古城を見上げてくる。彼女の手の中に握られているのは、破れた跡の残るクシャクシャの写真だ。

「どうして、俺の名前を？　おまえとは初対面だよな？」

「古城さんの恋人さんに教えてもらいました。困ったことがあったら、あなたに頼れって」

「こ、恋人……!?」

声を裏返らせて叫んだのは浅葱だった。ものすごい目で睨みつけてくる浅葱に、古城は慌てて首を振り、

「いや、知らん知らん！　全然心当たりないぞ！」

「あの、余計なお世話ですけど、浮気はいけないと思います。二股なんて……」

古城と浅葱のやりとりを見ていた結瞳が、いかにも少女らしい潔癖な口調で忠告してくる。

だーっ、と古城は頭を抱えて、

「だから違うって！　誰だよ、おまえに適当なデマを吹きこんだのは!?」

「背の高い綺麗なお姉さんです。胸がおっきくて、髪をこんな風に結んでて」

「……胸のでかいポニーテールの女って……まさか……」

「煌坂さん？」

結瞳の説明を聞いた古城と浅葱は、互いに顔を見合わせた。

どういう勘違いがあったら自分があの男嫌いの恋人だと誤解されてしまうのだろう、と心底不思議そうに首を捻る古城。対して浅葱は、なるほどね、と妙に納得したようにうなずいている。

「待った、煌坂に会ったって、あいつブルエリに来てるのか？　おまえとどういう関係だ？」

気を取り直して古城が訊いた。

結瞳は表情を暗くして、ぽそり、と弱々しく答えてくる。

「あの人は……閉じこめられていた私のことを助けてくれたんです」

「閉じこめられていた？」

結瞳が口にした不穏な言葉に、古城が目つきを険しくした。

誘拐、監禁、あるいは人身売買――あまり想像したくもない不愉快な単語が、次々に古城の脳裏をよぎった。古城たちのような例外を除けば、仮営業中のブルーエリジアムを訪れているのは、特別に招待された人々だけ――つまり金持ちや社会的な影響力を持つ人物の家族である。誘拐の対象になっても不思議ではないのだ。

それに、結瞳が誘拐事件に巻きこまれていたというのなら、紗矢華が彼女を助けたことにも納得できる。紗矢華は、魔導犯罪対策を担当する獅子王機関の舞威媛だ。結瞳を監禁していた組織のことを捜査中だった可能性は十分に考えられる。

「それで、煌坂のやつは今どこにいるんだ？」

「わかりません……」

古城の迂闊な質問に、結瞳の声が頼りなく震えた。
彼女の瞳が見る間に潤んで、ぼろぼろと大粒の涙がこぼれ出す。結瞳が必死に抑えつけていた感情が、古城の不用意なひと言で決壊して一気にあふれ出したのだ。
「逃げる途中で、追いかけてきた人たちに見つかって、結瞳に先に行けって。あとですぐに追いつくからって。でも、いつまで待ってても来てくれなくて、それで――」
何度もしゃくり上げながら、途切れ途切れの弱々しい声で結瞳が言う。
嗚咽を始めた結瞳を見て、古城の頭の中は焦りで真っ白になった。
「あ、ちょ、ちょっと……泣くな！　えーと、泣くなって、結瞳！　そうだ、焼きそば喰うか、焼きそば！　ジュースもあるぞ！」
「……ホントになにやってんのよ、あんたは」
必死で結瞳をなだめる古城を眺めて、浅葱が気怠く頬杖をつく。
どうやらまた面倒な事件に巻きこまれてしまったようだった。

3

古城たちのバイトは午後五時に終わった。チーフは残念そうにしていたが、それ以降の時間帯は売店で酒類を販売するため、未成年を働かせるわけにはいかないのだという。

焼きそば作りで疲れ果てた身体を引きずりながら、古城はラタトスク学園の寮に帰った。
中に負ぶっているのは、熟睡している結瞳だった。古城たちと出会って緊張の糸が切れたのか、結瞳は泣き疲れてそのまま眠ってしまったのだ。
「……駄目ね。江口結瞳って名前の子は、絃神市に住民登録されてないわ」
浅葱が、愛用のスマートフォンを弄りながら顔をしかめている。人工島管理公社のサーバに侵入して、個人情報にアクセスしたらしい。結瞳の身元が判明すれば、彼女の保護者とも連絡が取れると思ったのだろうが――
「登録魔族の台帳も調べてみたけど、該当者なし。過去の記録も見当たらない」
「……結瞳は絃神市に住んでたわけじゃない、ってことか」
「たぶんね。まさか偽名ってことはないだろうし」
「まあ、そうだよな」
浅葱の推測に、古城も同意する。自分の名前を褒められたときの結瞳の反応はごく自然で、あれが演技とは思えなかった。彼女が初対面の古城たちに、偽名を名乗る理由も思いつかない。
「ブルエリは観光地だもんな……本土から旅行に来てもおかしくはない、か」
「そういうことね。で、どうする？　いちおう警察に届けとく？」
眠っている結瞳の横顔を見ながら、浅葱が訊く。
結瞳の言葉が事実なら、彼女は誘拐の被害者だ。すでに結瞳の両親から、捜索願いが出てい

る可能性もある。常識的に考えれば、警察に引き渡して保護してもらうのが最善だろう。だが、

「いや、警察に行く前に、こいつを姫柊に会わせてみる」

「……姫柊さんに？」

「考えすぎかも知れないけど、煌坂がこの子を助けたって話が気になるんだよ。もしかしたら結瞳を誘拐した連中は、普通の警官じゃ手に負えない相手かもしれない」

それはそれで面倒なことになりそうだけどな、と古城は溜息混じりに思う。

獅子王機関が絡んでいるとなると、誘拐犯は魔族か魔導犯罪者である可能性が高い。彼らが結瞳を取り返そうとして襲ってきた場合、普通の警察官ではひとたまりもないだろう。

それならば古城たちの手元に置いておくほうがまだ安心だ。古城はともかく、雪菜は獅子王機関の剣巫、対魔族戦闘のエキスパートだからだ。おそらく紗矢華も、雪菜が保護してくれることを期待して、結瞳を古城に預けたのに違いない。

「ふーん。そっか……煌坂さんもあの子のお仲間なわけね？　獅子王機関だっけ？」

浅葱が、どこか不満そうな口振りで訊いてくる。

古城が吸血鬼化したことや、その監視役である雪菜の正体を、彼女が知ったのはごく最近だ。当然といえば当然の反応だが、自分だけがずっと秘密を知らされていなかったことを、浅葱は今でも根に持っているらしい。

まあ、気持ちはわかる——と古城は、結瞳を背負ったまま肩をすくめて、

「姫柊とは部署が違うらしいんだけど、まあ事情くらいは問い合わせてもらえるだろ」

同じ組織に所属してはいても、剣巫の雪菜と舞威媛の紗矢華では命令系統がまったく違うと聞いている。互いの任務の内容を知らないことのほうが多いらしい。

紗矢華がたまに古城に電話をかけてきて、雪菜の様子を根掘り葉掘り聞き出そうとするのも、直接本人に連絡する許可がなかなか降りないせいなのだという。だからといって、雪菜の監視対象である古城にそれを訊くのも、なにか間違っている気もするが。

「獅子王機関って、どういう組織なの？」

「えーと、国家公安委員会……的なにかに設置された特務機関って言ってたな。大規模な魔導災害やテロを防ぐのが主な任務だとかなんとか」

古城は、前に雪菜から聞かされたうろ覚えの知識を口にした。

獅子王機関の源流は、平安時代に宮中を怪異から守護していた滝口武者なる存在らしい。そこで魔族との直接戦闘を担当していた者たちが剣巫、内乱の鎮圧や要人警護を担当していた者たちが舞威媛と呼ばれるようになったのだという。

要するに剣巫の担当は魔物退治、そして舞威媛の担当はテロ対策ということだ。剣巫である雪菜に監視されている古城は、どちらかといえば怪物と同じ扱いということになる。

「ふーん……で、組織の規模は？　何人くらい働いてんの？　給与は？　福利厚生は？」

「そういや聞いたことないな。つか、そういう調べ物はおまえのほうが得意だろ？」

「調べたけど出てこないのよね。都市伝説みたいなダミー情報が多すぎて全容がつかめないの。ああいう組織は、外部のネットワークから切り離されてることが多いから、直接侵入することもできないしさ」

そう言って浅葱は、子どものように唇を尖らせた。さすがの天才ハッカーも、そもそもネットワーク上に存在しない情報を抜き出すことはできないらしい。

「気になるなら、姫柊に直接訊いたらいいだろ。あいつもどこまで把握してるのか知らんけど」

なんだかんだで見習いだしな、と古城は口の中だけで呟く。

戦闘能力だけなら一流といっても過言ではない雪菜だが、お世辞にも要領のいいタイプではない。組織の内情や政治的な事柄については疎そうだ。

「……ていうか、なんであんたはそれくらいのことも知らないのよ？　二カ月以上も、ずっとあの子につきまとわれてたんでしょ？」

「興味なかったんだから仕方ねーだろ。知らないとなにか問題なのかよ？」

「問題っていうか、危険じゃない」

「……危険？」

わけがわからず戸惑う古城に、浅葱はいつになく真剣な眼差しを向けてくる。

無意識に古城が抱いたのは、そういう真面目な顔をすると、こいつは本当に美人なんだよな、

という場違いな感想だった。そんな古城の内心を見透かしたように、浅葱は呆れ顔で嘆息し、

「政府の機関ってことは、結局お役所でしょ。組織同士の利害の対立や縄張り争いと無縁ってことはなかろうでしょうよ。仲間内で派閥争いがないとも限らないし」

「姫柊と煌坂は、無駄に仲がいいけどな。あいつら姉妹みたいなものだし」

「あの二人の仲がよくても、組織としてはどうかわからないってことよ。獅子王機関と警察やほかの組織との関係も、どうなってるのか知れたもんじゃないし」

「……それって、もしかして結瞳の事件と関係ある話か？」

眠っている結瞳を起こさないようにと、古城は声を潜めて訊き返した。浅葱がなにを心配しているのか、ようやく朧気に見えてきた気がする。

「関係あるかどうかはわからないけど、無条件に信用するのはどうかと思っただけよ。姫柊さんや煌坂さん個人がどうこうってことじゃなくて、獅子王機関って組織のことをね」

「べつに信用してるわけじゃないけどな……」

むしろ古城は、獅子王機関によって監視されている身の上なのだ。それどころか、破魔の聖槍を突きつけられて、殺すと脅されている立場だったりもする。

「だけど、おまえが言いたいことはわかったよ。煌坂たちのやってることが、本当に正義とは限らないってことだろ。結瞳だって、ただの小学生とは限らないしな」

「まあ、ね」

柄にもなく真面目な話をしている自分自身に照れたように、浅葱は皮肉っぽく笑った。
「正義だの悪だの、そんなもの立場が変われば、あっさり入れ替わっちゃう程度のものだし。どんな人間や組織にだって裏表はあるしね」
そうかもな、と古城は曖昧に首肯した。
閉じこめられていた自分を紗矢華が逃がしてくれたのだ、と結瞳は言った。
だから古城は結瞳を信用した。結瞳は誘拐の被害者で、紗矢華は彼女を救うために犯罪組織と戦っているのだと勝手に思いこんでいた。
だが、違う。そんなふうに決めつけることはできないのだ。獅子王機関は、無条件に人々を救う正義の味方ではないのだから。極端な話、犯罪者として捕らえられていた結瞳の脱獄を、紗矢華が手伝ったという可能性すらゼロではない。
その場合、結瞳を保護した古城たちも、犯罪の共犯者ということになってしまう。
「けどな！……とりあえず、これが悪人ってことがあり得ると思うか？」
結瞳の無防備な寝顔を指さして、古城が投げやりな声を出す。
うーん、と浅葱も我に返ったように、低く唸って、
「……さすがにそれはないわよね。よしんば悪人だとしても、この子を見捨てるのはちょっと」
「だろ。とりあえずコテージに連れて帰って、その先のことは、またあとで考えようぜ。ベッドは余ってるって矢瀬も言ってたし」
こんなところで俺たちが悩んでいても仕方ないしな、と古城は問題の先送りを提案。異存はない、というふうに、浅葱は無言でヒラヒラと手を振った。
古城たちが向かっていたのは、プールエリア中央のバス停である。ブルーエリジアムの園内には無人運転のバスが循環しており、それに乗ればタダでコテージまで帰れると聞いている。
しかし交差点を渡る寸前に、浅葱はなにかに気づいたように立ち止まり、
「待って。古城、今、お金持ってる？」
「いちおう財布は持ってきてるけど……なんでだ？」
「コテージに戻る前に、結瞳ちゃんの着替えを買っていかないと。いつまでも水着でうろうろさせとくわけにもいかないでしょ。なにか履き物も買わないと」
「ああ、それもそうか……」
気が利くな、と感心して、古城は水着のポケットから財布を取り出した。
「って、俺が金を払うのか!?　財布くらいおまえも持ってるだろ!?」
「あんたが拾ってきた子でしょうが。あとで煌坂さんにでも請求しなさいよ。領収書もらっておいてあげるから。たしかこの先に、ちょっとよさげなブティックがあったのよね」
「……気のせいか、メチャメチャ高級そうな店構えなんだが……」
「日本初上陸のブランドなのよ。アルディギア王室御用達なんだって」

「うおい!?」

浅葱が問答無用で古城から財布を引ったくり、そのまま高級ブランドの店へと向かう。明らかに無駄遣いする気満々の彼女を、古城は青ざめながら慌てて追いかけた。

4

大量の服を買いこんでコテージに戻った浅葱は、さっそく張り切って荷物の整理を始めた。

結瞳はまだ目を覚まさずに、女子部屋のベッドで眠っている。

手持ちぶさたになった古城は、風呂に入ることにした。潮風と汗と焼きそばのソースの匂いが染みついた身体をボディソープで念入りに洗っていると、玄関のあたりが騒がしくなる。別行動していた雪菜たちが、コテージに帰ってきたらしい。

どことなく様子が変だと感じたのは、凪沙がやけに静かなせいだった。口数の多さに定評のある彼女が、ほとんどなにも喋っていない。

代わりに聞こえてきたのは、不安そうに響く雪菜の声だ。

「……大丈夫、凪沙ちゃん？　唇の色、すごいことになってるよ……」

「うん、大丈夫、大丈夫。ちょっと休んだら、すぐ復活するから」

雪菜に肩を借りた凪沙が、儚げに微笑んでいる気配がある。囁くような彼女の声は弱々しく震えて、今すぐに消えても不思議ではなかった。

「……凪沙!?」

古城は濡れた髪も拭かずに、慌てて風呂場を飛び出した。上半身裸のままの古城に気づいて、雪菜がぎょっとしたように目を丸くする。

凪沙は、絶句している古城に頼りなく手を振り、

「あ、古城君。先に帰ってたんだ。アルバイト、お疲れさま」

「呑気に挨拶してる場合か！」

完全に動転した古城が、裏返った声を出す。普段は快活に振る舞っている凪沙だが、決して体力に恵まれているわけではない。昨年あたりまでは入退院を繰り返していたし、二週間ほど前にも貧血を起こして倒れたばかりなのだ。

「姫柊、教えてくれ。凪沙のやつ、また倒れたのか？」

「いえ、それが……その……」

問い詰められた雪菜が、どこか困ったように目を逸らす。彼女に支えられたまま、凪沙は、悪戯のばれた子どものように、てへへ、と笑って、

「えっとね、遊園地エリアでジェットコースターに三回連続で乗ったら、こんな感じに」

「……ジェットコースター？」

「いやあ、さすがブルエリ名物の水中突入型コースター〝ハデス〟だよねえ。高さ九十七メー

トルから海面に向かって時速百八十キロで落下するんだよ。すごい迫力だったよ」
「それは普通に倒れるだろ！　なんでそんなものに三回も乗ってんだよおまえは!?」
悪びれずに告げる凪沙を呆然と見返して、古城が怒鳴った。
一方的に叱られた凪沙は、むーっ、と拗ねた子猫のように頬を膨らませて、
「だって、せっかくタダ券があるんだし、たくさん乗らなきゃ損だと思って。ほら、古城君と別行動じゃプールに行っても、水着を見せる相手がいなくてつまんないでしょ。雪菜ちゃんもきっと心ではそう思ってるよ」
「え……!?」
思わぬとばっちりを喰らった雪菜が、咄嗟になにも言い返せずにその場で固まる。
しかし古城は、凪沙のその発言をあっさりと聞き流し、
「そんなことはどうでもいいから、しばらく寝てろ。夕飯の準備が出来たら起こしてやるから」
「はーい」
むくれたまま渋々と返事をして、リビングのソファに寝っ転がる凪沙。なんだかんだでやはり弱っているのか、そのまますぐに小さな寝息を立て始める。
それを見届けて古城は溜息をつき、廊下に立ち尽くしている雪菜を振り返った。
「姫柊も迷惑かけて悪かったな」

「そんなことはどうでもいい、ですか……そうですか」
「え、と……姫柊？」
「いえ、なんでもありません」
無感動な眼差しで古城を睨んで答える雪菜。
彼女が不機嫌になっている理由がわからずに、古城は軽く戸惑って、
「まあいいや。帰ってきたばかりで悪いけど、会わせたい人がいるんだ。ちょっと一緒に来てくれないか？」
「あ、はい」
古城の真剣さが伝わったのか、訝しげな表情を浮かべながらも、雪菜はすぐにうなずいた。
彼女を連れてコテージの階段を上り、古城は二階の女子部屋へと向かう。そこには浅葱と、眠り続けている結瞳がいるはずだった。
「……いいか、姫柊。驚かないで、冷静に結瞳って子の話を聞いてくれ」
「は、はあ」
いちおう雪菜を気遣って、古城は念入りに前置きしておくことにする。
雪菜にとって、紗矢華は姉妹同然の元ルームメイトだ。その紗矢華が危険な目に遭っている前に、心の準備をしてもらっておいたほうがいいだろう、という古城なりの配慮である。雪菜かもしれないのだ。それを知って、雪菜が取り乱さないとも限らない。彼女を結瞳に会わせる

はますます不審そうな目つきで古城を見ていたが、それくらい警戒してもらったほうがいい。
そんなことを思いながら古城は女子部屋のドアノブに手をかけて、
「入るぞ、浅葱」
「――へ!? ちょ、ちょっと待っ……!?」
無警戒にドアを開けた古城の視界に飛びこんできたのは、半裸でベッドの上に座っている浅葱と結瞳の姿だった。服の試着の真っ最中だったのだ。
古城に背中を向けて、頭からワンピースを被ろうとしていた結瞳はまだいいほうで、浅葱は着ていた水着を脱いだ直後だった。ビキニのブラを右手に持って、左手だけで胸を隠した手ブラ状態だ。心の準備がなかった古城は、そんな彼女を見つめたまま呆然と凍りつき、
「あ……あれ?」
「あれ、じゃないっ! なんでノックもせずに女子部屋に入って来てんのよ、あんたはっ!?」
立ち上がった浅葱が、ベッド脇に置かれていた目覚まし時計を蹴飛ばした。無回転で飛んで来た目覚まし時計は、立ち尽くす古城の無防備な脇腹に突き刺さり、
「ぐおぉ!」
廊下に吹き飛んだ古城が苦悶する。
雪菜は無言で女子部屋のドアを閉め、悶絶した古城を見下ろして、しみじみと嘆息した。
「先輩……」

5

その日の夕飯はバーベキューだった。コテージの庭にバーベキューコンロが備えつけられていた上に、単独行動していた矢瀬が、大量の生肉を持参して戻ってきたからである。

「ひゃほおお！　肉だ、肉だァ！」

夕暮れの薄闇の中で、ひときわテンション高く騒いでいるのも矢瀬だ。炭火の面倒を見ている古城の隣で、焼き上がった肉をガツガツと噛みちぎりながら、

「喰ってるか、古城。俺様が調達して来てやったゴージャスな高級生肉だぜ！」

「うるせーな、喰ってるよ！　おまえも少しは焼くのを手伝えよ！　熱ィんだよ！　ていうか、なにが高級生肉だ……思いっきり特売タイムセールのシールが貼ってあるじゃねえかよ」

こいつ本当に金持ちの御曹司なのか、と疑いながら、古城はうちわで炭をあおぐ。

リゾートプールに遊びに来たはずなのに、なぜ俺は一日中、鉄板の前に立ってるのだろうかと自問する古城。間近で浴びる炭火の熱は、想像以上に熱くて体力をすり減らす。

「そういや、矢瀬――おまえ、俺たちが働いてる間、一人でどこに行ってたんだよ？」

「ん、言っただろ。実家の仕事の手伝いだって」

生焼けのカルビを咀嚼しながら、矢瀬が答える。古城は疑惑の眼差しを向けて、

「こんな観光地に来て、おまえがなんの手伝いをするんだよ？」

「まあ、島内の視察だな。一般人の目線で施設の利用しやすさを確かめたり、従業員のサービスを評価したり、あとは口コミサイトに載っける写真を撮ったり……」

「写真？　ちょっと見ていいか？」

「ふごっ……!?」

食事中の矢瀬の返事を聞く前に、彼が持っていたデジタルカメラの電源を入れる古城。液晶画面に表示されたのは、仲睦まじげに売店で働く古城と浅葱の姿だった。

ごほっ、と古城は思わず咳きこんで、

「おまえっ、なにが視察だ。ただの盗撮じゃねーか！」

「いやいや、違うんだって。それはおまけだ。本命はこっちの、プールと水で戯れる水着美女写真集だってのの――」

「なお悪いわっ！」

古城は迷わずデジカメのデータ全消去を選択する。うあああああ、と矢瀬は悲痛な声を上げ、半泣きになりながら肉のやけ食いを始めた。

「ひゃほお、お肉だぁ」

そんな矢瀬とは無関係に、結瞳の隣ではしゃいでいるのは凪沙だった。

どうにかジェットコースター酔いから復活した凪沙は、結瞳のことをいたく気に入って、彼

女を片時も手放そうとしない。末っ子であるところの凪沙にしてみれば、妹が出来たみたいで嬉しくて仕方ないらしい。

「でも、びっくりしたよ。まさか古城君が、こんな可愛い子を拾ってくるなんて」

凪沙が感心したように褒めちぎり、うむ、と矢瀬も腕を組んで重々しく同意する。

「小学生を口説くとは意外な才能だよな。見直したぜ。まったくシスコンは伊達じゃねえ」

「シスコンは全然関係ないだろ！」

そもそも俺はシスコンじゃねえから、という古城の反論を、その場にいる全員が無言でスルーする。古城はそれでも諦めずに声を張り上げて、

「さっきから言ってるだろ、この子は姫柊の友達の連れなんだって。彼女と連絡が取れるまで、ちょっと預かってるだけだ――」

「結瞳ちゃんも食べてね。遠慮しないで」

言い訳を続ける古城に背中を向けて、結瞳のために焼いた肉を取り分ける凪沙。可愛らしいワンピースに着替えた結瞳が、礼儀正しく頭を下げた。

「はい、いただいてます。あと、凪沙お姉さんも、もう少しお野菜を食べたほうがいいと思います。お肉ばかりだと栄養バランスがよくないですから」

「う……しっかりしてるなあ。でも、そう言う結瞳ちゃんもニンジン残しちゃってるよね」

ちょっと意地悪く微笑む凪沙の指摘に、結瞳はバツが悪そうに下を向く。

「それは……その、ニンジンだけは苦手なんです　すり下ろしてカレーに入れてもらえたら食べられるんですけど」

結瞳が垣間見せた年相応の幼さに、凪沙が目を輝かせてふるふると悶える。

「か、可愛い……！　古城君、あたし今からカレー作る！」

「落ち着け。せめてカレーは明日の夕飯にしろ」

興奮する凪沙をどうにか落ち着かせ、古城は疲れた気分で首を振った。

そして古城はベンチの端に座る浅葱へと目を向ける。彼女はさっきからまったく食事に手をつけず、むっつりと海を眺めているだけだった。

そんな浅葱を見かねて古城は立ち上がり、

「浅葱、肉、焼けてるぞ。これ、割り箸な。タレはこっちが甘口でそっちが中辛だから」

そう言ってわざわざ彼女の席まで食器を運んでやる。しかし浅葱は無言で古城から箸を奪い取り、あっち行け、とでも言いたげにプイと横を向いた。

「……まだ謝ってないんですか、さっきのこと」

なんなんだよ、と不満げな顔で戻ってきた古城に、結瞳が気遣うような口調で訊いてくる。

古城はふて腐れたように首を振り、

「謝ったよ、何回も。なのにあいつ、いつまでも根に持ちやがって大人げねえ」

「浅葱お姉さんは、本気で怒ってるわけじゃないと思いますけど。単に古城さんのフォローが

下手なだけで」

遠慮がちな口調で結瞳が忠告する。

しかし古城は、納得いかん、と口を尖らせて、

「フォローって言われてもな……たしかにノックしなかったのは悪かったけど、あいつだって鍵をかけ忘れてたんだし、俺の腹に目覚まし時計をぶちこんだんだからおあいこじゃね？」

「そういう態度が駄目なんだと思います。あのとき浅葱お姉さんが着てた水着、新品だったのになにも言ってあげませんでしたよね。今のお洋服だって何度も着替えてやっと選んだのに」

「……え？　それってなにか関係あるのか？」

意味がわからず、古城は真顔で訊き返す。そもそも下半分しか着ていなかった水着に対して、いったいなにを言えというのか。

はあ、と結瞳は諦めたように深く溜息をついて、少し恨めしげな眼差しで古城を見た。

「あと、着替えを見られたのは浅葱お姉さんだけじゃないんですけど」

「あ……えーと……す、すみませんでした。ごめんなさい」

「わかりました。許してあげます」

頭を下げた古城を見て、結瞳は悪戯っぽく微笑んだ。その目元がまだ少し赤いのは、泣きながら眠ってしまったせいだろう。気丈に振る舞ってはいるものの、結瞳の立場は基本的に今も不安定なままなのだ。

古城の女子部屋生着替え乱入事件の影響もあって、結瞳が監禁されていた事情については、いまだに詳しいことを聞いていない。結瞳本人も、どこから説明すればいいのか、決めかねている様子だった。

とはいえ、古城たちとしても、今までなにもせず肉だけ焼いていたわけではない。

「――先輩。携帯電話、ありがとうございました」

コテージからこっそり戻ってきた雪菜が、古城の貸した携帯電話を差し出してくる。

状況を確認するために、彼女は獅子王機関に電話をかけていたのだ。

「どうだった？　煌坂とは連絡が取れたのか？」

雪菜と顔をつき合わせて、古城が小声で彼女に訊く。雪菜は静かに首を振り、

「いえ。任務中の舞威媛への通信は、一切禁止されてるんです。もともとは呪詛や暗殺を行うための部署ですし……あ、今どき暗殺任務なんて滅多にないですけど、そのぶん最近は要人警護や潜入工作のお仕事が増えてて」

「そうか……言われてみれば情報が外に洩れたらヤバそうな仕事ばかりだな」

古城は顔をしかめつつも納得する。通信が禁止されているということは、獅子王機関の本部といえども、紗矢華からの定時報告を待つ以外、彼女と連絡を取る方法はないのだろう。道理で、古城が紗矢華に何回電話をかけても応答がなかったわけである。

「はい。だから、わたしにも紗矢華さんの任務の内容は教えてもらえませんでした」

残念そうに目を伏せて雪菜が呟いた。
そんな雪菜に、ほら、と古城は焼きたての肉が入った皿を渡してやる。
すみませんいただきます、と雪菜はそれを受け取って、
「ただ、師家様が仰るには、紗矢華さんの代わりの舞威媛は派遣されて来ていない、と」
「……師家様……って、ああ、ニャンコ先生か……」
古城は、獅子王機関の支部で出会った雪菜の師匠のことを思い出す。出会ったといっても、古城が見たのは、猫の姿をした彼女の使い魔だけなのだが。
「つまり、煌坂は今も任務を続けてるってことか？」
「少なくとも生きているのは間違いないと思います」
自分に言い聞かせているような、力強い口調で雪菜が答えた。
紗矢華がどんな目的でブルーエリジアムを訪れていたのかはわからない。が、もしも彼女が、任務続行不能になっているのなら、獅子王機関はすぐに後任の舞威媛を送りこむはずである。逆に言えば、代わりの舞威媛が来ていないという事実から、紗矢華が無事だと判断することもできるはずだ。
「けど、だったら、なんであいつは結瞳を迎えに来ないんだ？」
「わかりません……先輩に結瞳ちゃんの保護を任せて、安心してるという可能性もありますけど。小学生の保護者としては、先輩は世界最強ですから」

「いや、それはなんか違うだろ……」
誤解を招きそうな雪菜の表現に、思わずツッコミを入れてしまう古城。第四真祖は世界最強の吸血鬼なのであって、そんなふうに小学生の保護に世界一熱心な人みたいに言われても困る。
それに今なら、紗矢華がそこまで自分を信用しているとは思えない。
会いたがっている彼女が、このチャンスをみすみす棒に振るはずがない。
だとすれば、やはり紗矢華には、なにか結瞳と合流できない事情があるのだろう。どうやら彼女は、想像以上に厄介な立場に置かれているらしい。
「あの……もしかしたら、あのお姉さんは、莉琉に会おうとしているのかもしれません」
黙りこんだ古城たちを気遣うように、ぼそりと口を開いたのは結瞳だった。
古城は少し驚いて目を細め、
「莉琉？　誰だ？」
「姉です。私の」
「結瞳の姉さん……？」
「はい。私と一緒にクスキエリゼの研究所に閉じこめられていたんです」
ぽつぽつと言葉少なに結瞳が説明する。
古城と雪菜は、互いに目を合わせて無言でうなずき合った。

結瞳以外にも同じ境遇の少女がいたというのは意外な情報だが、一方で、すとんと腑に落ちる部分もあった。監禁されていたはずの結瞳が、不思議なくらい落ち着いていること。そして彼女が今も気丈に振るまい続けていること。監禁されていたのが結瞳ひとりではなく、彼女の姉も同じ施設にいたのなら、そのあたりの疑問は解消される。紗矢華が、莉琉という少女の捜索を今も続けているという仮説にも、それなりの説得力が感じられる。

「クスキエリゼって、どっかで聞いた名前だな」

「ブルーエリジアムの出資者ですね。主に〝魔獣庭園〟の運営を担当しているはずです」

古城の疑問に雪菜が即答する。彼女たちは、ほんの数時間前に、その〝魔獣庭園〟を訪れたばかりなのだ。

「そうか、ブルエリのパンフに載ってたんだ……たしか産業用魔獣の輸出入や繁殖を手がける会社なんだっけか……」

そう言って、古城は表情を硬くした。結瞳の言葉が事実ならば、彼女が巻きこまれたのは、ただの誘拐事件ではない。企業ぐるみの組織犯罪ということになる。

「――ってことは、ブルエリの運営会社が、結瞳たちを誘拐した張本人ってことか？」

「それなら獅子王機関が紗矢華さんを派遣した理由もわかります。組織的な国際魔導犯罪への対応は、紗矢華さんたち外事部の仕事ですから」

そう告げる雪菜の表情も硬い。クスキエリゼは有名企業だ。獅子王機関といえども、確実な

証拠もなしには踏みこめない。だから紗矢華が秘密裏に捜査をしていたのだろう。暗殺技能を持つ舞威媛は、敵地への潜入工作にうってつけの人材だからだ。

「だけど……わかんねえな」

焼き網の上の野菜を裏返しながら、古城は思案顔で独りごちる。

「獅子王機関は、結瞳が俺たちと一緒にいることを知ってるんだよな？　それなのに、なんでなにも言ってこないんだ？　結瞳の両親だって心配してるはずだろ？」

「……もしかしたら、囮にするつもりなのかもしれません」

かろうじて古城に聞こえるくらいの小さな声で、雪菜がぼそりと呟いた。

「クスキエリゼの連中が、結瞳を取り返しに来るのを待ってるってことか？」

古城は険しい表情で雪菜を見る。雪菜は、自分の意見を打ち消すように首を振り、

「もちろん、そうだと決まったわけではないですけど」

「いや……そう考えると、筋は通るよな」

苦々しい表情で古城は認めた。

たしかに獅子王機関がクスキエリゼの施設内に入りこむのは難しい。だが、クスキエリゼの関係者が、自ら外に出てくれば話は変わってくる。ましてや彼らの目的が小学生の拉致ならば、逮捕するのになんの障害もないだろう。

奪われた結瞳を取り返すためにクスキエリゼが動くのを、獅子王機関は待っているのかもし

れない。それはクスキエリゼを潰す有力な手がかりとなるからだ。しかも囮である結瞳を保護しているのは、獅子王機関の剣巫である雪菜だ。この偶然を利用しない手はないだろう。

「ですが、その作戦には問題があります。クスキエリゼ社と比べたら、圧倒的に先輩のほうが危険で、傍迷惑で、脅威度が高いはずなのに、その先輩を巻きこむなんて……！」

真面目な口調で、無自覚に古城を罵倒する雪菜。ぐぐ、と古城は低く唸った。

ずいぶん失礼なことを言われてる気がするが反論できない。なにしろ古城は第四真祖の力を暴走させて、絃神島に甚大な損害を与えた前科がある。ここで再び似たようなことが起きれば、ブルーエリジアムは跡形も無く海に沈むことになるだろう。雪菜が心配するのも当然だ。

もっとも結瞳が囮というのはただの仮説。古城たちの想像に過ぎない。獅子王機関やクスキエリゼの目的が、まったく違うところにある可能性も完全には否定できなかった。

「なあ、結瞳……クスキエリゼは、おまえたちを監禁してなにをするつもりだったんだ？」

バーベキュー用の菜箸を握ったまま、古城は結瞳に向き直って訊いた。

「ああ、もちろん答えたくなかったら無理に言わなくていい。だけど、おまえの姉貴が危ない目に遭ってるんだったら、早く助けに行かなきゃまずいだろ。危険かどうかだけでも教えてくれないか？」

「――莉琉のことは心配しなくても大丈夫だと思います」

結瞳がきっぱりと断言する。虚勢や強がりではなく、確信に満ちた口振りだ。

「クスキエリゼの人たちは、もともと私ではなくて莉琉が必要だったんです。危害を加えたりするはずがありません。それに、莉琉は、あの人たちの実験に最初から協力的でしたから」

「実験？」

「それは……今は言いたくありません……ごめんなさい」

「いや、こっちこそ悪かった。無理には訊かない約束だったよな」

古城は慌てて頭を下げた。いくら大人びているとはいえ、小学生の女の子が、わけのわからない連中に監禁されていたのだ。思い出したくないような不愉快な体験があったとしても不思議ではない。それを無理やり聞き出そうとしてはいけないことくらい、古城にもわかる。

「あー……なんか柄にもなく頭使ったら腹減っちまった。ちょっとメシ喰わせてくれ」

結瞳を落ちこませないようにと、古城は強引に話題を変えた。それに実際、腹も減っていた。他人のぶんの肉を焼くのに精いっぱいで、古城はいまだに肉を一切れも口にしていないのだ。

だがすでに焼き網の上に肉の姿はなく、焦げたキャベツの切れ端だけが、ぶすぶすと燻っているだけだ。

「――っと、あれ？　肉は？　なあ、矢瀬、まだ焼いてない肉ってなかったっけ？」

ベンチでデザートのアイスを食べていた矢瀬に、古城が訊く。

矢瀬は、今さらなに言ってんだ、と言わんばかりの表情で肩をすくめて、

「おう、それならこっちで全部焼いて喰っちまった……浅葱が」

「ぜ、全部!?」

ふと見れば、矢瀬が買ってきた肉のトレイは、すべて空になってゴミ袋の中に突っこまれていた。肉だけでなく、野菜やエリンギなどのキノコ類もすべて全滅だ。それに気づいて古城は絶句する。なにしろ矢瀬が買ってきた生肉は、余裕で十人前以上あったのだ。

「ふん」

放心している古城を横目に睨んで、浅葱が満足げに鼻を鳴らす。スレンダーな見た目に反して彼女は大喰いキャラなのだった。それを忘れて油断していた自分を古城は呪った。

空きっ腹を押さえて苦悩する古城と、ようやく機嫌を直す浅葱。そんな二人の顔を見比べて、結瞳がクスクスと笑い出す。

そして黙々とアイスを食べ終えた凪沙が、勢いよく立ち上がり、

「ふいーっ……お腹いっぱいだよ。ねえ、矢瀬っち、花火やろ、花火。さっき買ってきたって言ってたよね。凪沙はスパークするやつが好きなんだよね。派手なやつ」

「え……花火があるんですか。本当に?」

凪沙の言葉を聞きつけた結瞳が、キラキラと目を輝かせて顔を上げた。

そんな結瞳を振り返って、凪沙が、おいで、と手を伸ばす。

「結瞳ちゃんも一緒にやろ」

「はい!」

眩い花火の輝きが、結瞳の横顔を照らし出す。古城はそれをぼんやりと見つめる。

無邪気にはしゃいでいる結瞳の姿は、ごく普通の少女のものだ。

だがその微笑みは、どこかひどく儚く、寂しげに感じられた。

ブルーエリジアム——人工の〝青の楽園〟の夜が更けていく。

6

広大な面積を誇る〝魔獣庭園〟だが、一般来場者に公開されているのは、施設全体の四割に満たない。残る六割は魔獣たちの飼育と繁殖、そして彼らの能力の解析を行う研究区画だ。

最先端の研究を行う部署だけに、立ち入りが許可されているのは、〝魔獣庭園〟の運営母体であるクスキエリゼでも、ごく一握りの関係者だけ。

そんな研究区画の最深部を、その日、予約もなく訪れた人物がいた。

引き締まった身体つきの中年男性だった。白髪と鋭い眼光、高価げなスーツ——年齢は三十代の後半だろうか。知的だが、人間味に欠けた印象を与える男である。

「お待ちしていました。久須木会長」

執務室で彼を出迎えたのは、高校の制服を着た黒髪の少女だった。

場違いな服装の少女を見ても、久須木と呼ばれた男は表情を変えない。
「驚かないのだな、妃崎攻魔官」
「ご到着の報告は受けていましたから」
「有能な協力者を得られて嬉しいよ。〝蛇〟の様子はどうかな？」
事務的に答えてくる少女を見返して、久須木は愉快そうに微笑んだ。
クスキエリゼの創業者である久須木和臣は、苛烈な能力主義者で知られていた。数多くの社員を使い捨てにしていると批判される一方で、有能な部下には、年齢や経歴を問わずに重要なポストを惜しみなく与える。そんな久須木にしてみれば、取り引き相手の年齢や性別など気にする理由もないのだろう。
黒髪の少女は手元のパネルを操作して、執務室のモニタに地図を表示した。絃神島を中心にした、周囲の海底地形の立体地図である。
地図の右下に浮かんでいるのは、赤く点滅する矢印だ。それは気づかないほどのゆっくりとした動きで、絃神島のほうへと近づいている。
「沈没した〝イスルス〟の標識によれば、現在も龍脈に沿って東南東方向へと移動しています。絃神島付近の通過予想時刻は、明日の午後から明後日の未明にかけて」
「そうか。ほぼ計画どおりだな」
少女の言葉に久須木がうなずく。満足げな彼の表情は、しかしすぐに陰りを見せた。

久須木の双眸が見つめていたのは、執務室の棚に置かれていた古い石像だった。フクロウに翼を持つ女神像だ。
「〝彼女〟の器は、まだ戻らないのか？」
かすかな苛立ちを含んだ声で、久須木が訊いた。
「ご心配には及びません――彼女は必ず戻ってきます。自らの意思で」
黒髪の少女は淡々と答える。
しかし久須木は不機嫌そうに首を振り、
「きみの言葉を疑うわけではないが、不安ではある。この機会を逃してしまえば、次に〝蛇〟が絃神島を訪れるのは四年半後になるのだろう？　万全の準備をして臨みたいものだね」
「――承知しました。それでは、私のほうからも少し働きかけてみましょう」
「期待させてもらうよ」
少女の機敏な判断に、久須木はようやく頬を緩めた。
「そういえば、器の逃走を手引きした者がいると聞いたが？」
「問題ありません。クスキエリゼを内偵中だった獅子王機関の舞威媛は拘束しました。彼女を取り引きの材料に使って、政府の干渉を排除します」
舞威媛、という言葉を口にした一瞬だけ、黒髪の少女の口元に笑みが浮く。
「なるほど、怪我の功名というわけか」

無関心な口調で呟きながら、久須木は再びモニタ上の地図に目を向けた。
彼の表情に変化はない。だが少女は、そんな久須木を興味深げに眺めて言う。
「愉しそうですね、会長。違いまして？」
「当然だろう……幼いころから求め続けていた夢に、ようやく手が届くところまで来たんだ」
そう言って久須木は唇の端を吊り上げた。彼の手は、まるで世界をつかもうとするかのように、モニタ上の地図に向かって伸ばされている。
どこか残酷さをたたえた彼の笑顔を、無表情に眺めて少女は呟く。
「そう……夢、ですか」

執務室を出た少女は、階段を下りて地下へと向かった。
コンクリート剝き出しの殺風景な通路。その両脇に、厚い金属のドアで仕切られた小部屋が並んでいる。負傷した魔獣を隔離するための治療部屋である。
しかしその部屋に監禁されていたのは、魔獣ではなく、背の高いポニーテールの少女だった。両手に手錠をかけられたまま、安っぽい簡易ベッドの上で、煌坂紗矢華がふて腐れたようにあぐらをかいて座っている。手脚に小さな擦り傷があるが、それ以外に目立った外傷はない。ただひたすら不機嫌なだけである。

「――目は覚めて？」
電子パネルを操作して扉の鍵を開け、黒髪の少女は部屋に入る。そして彼女は眉をひそめて、床の上に視線を向けた。紗矢華が座っているベッドの足元に、白衣を着た男が二人倒れている。
「……彼らは？」
困惑気味の表情で少女が訊いた。
紗矢華は軽蔑したように唇を歪めて、
「知らないわ。どうせ私が気絶している間に、いやらしいことでもしようと思った連中でしょ。これだから男は嫌いなんだけど！」
なるほど、と少女が溜息をつく。クスキエリゼの研究者が、気絶している紗矢華を見つけて、無断でこの部屋に入ったらしい。監視を怠った少女の落ち度である。
煌坂紗矢華の存在は、研究者たちに知られてはならなかったのだ。紗矢華ではなく、研究者たちの安全のために。
「……殺したの？」
倒れている男たちの傍に屈みこんで、少女が訊く。紗矢華は冷たく肩をすくめて、
「まさか。ただ、早めに解呪してあげないと精神に後遺症が残るかも」
「邪な動機だったかどうかはともかく、迂闊ではあるわね。意識のないあなたに触ろうとするなんて。呪詛と暗殺の専門家である、獅子王機関の舞威媛に　――」

少女は溜息混じりに呟いた。

獅子王機関の舞威媛は、優れた巫女であると同時に呪術師、そして暗殺者だ。

それは彼女たちが眠っている状態でも例外ではない。

睡眠中の舞威媛は、無意識に強力な呪詛をまとっている。悪意をもって彼女たちに触れようものなら、その悪意は何倍にも増幅されて自分自身に返ってくるのだ。紗矢華の身体に触れることができるのは、彼女と同等以上の呪術使いだけ。あるいは紗矢華が心を許している特別な相手だけである。

「さすがによく知ってるわね。太史局の六刃神官さん。おかげですっかり騙されたわ」

ふふん、と悪意のこもった冷ややかな目つきで、紗矢華が少女を睨みつける。

「あなたは陰陽寮の流れを引く、魔導災害担当の攻魔師ね。道理で八雷神法を使えたわけだわ。太史局の六刃と、獅子王機関の剣巫の源流は同じだものね」

「……ええ、そうね」

紗矢華の指摘を、少女は否定しなかった。

太史局は獅子王機関と同様の特務機関。そして六刃と呼ばれる彼女もまた、剣巫や舞威媛と同じ国家攻魔官だ。

ただし人為的な魔導災害や魔導テロの阻止を目的とする獅子王機関に対して、太史局の任務は自然発生的な魔導災害の阻止である。大雑把に括るなら、対魔族戦闘のエキスパートである

剣巫に対して、六刃は対魔術戦闘のエキスパートということになる　彼女たちが、里の剣巫と呼ばれる所以だ。

「妃崎霧葉よ」

黒髪の少女が静かに名乗る。そして彼女は小さなリモコンを取り出して、紗矢華にかけられた手錠のロックを解除した。

「騙すつもりではなかったのだけれど、いちおう謝っておくべきかしらね、煌坂紗矢華」

「……どういうつもり？」

自由になった手首をさすりながら、紗矢華が訊ねる。

霧葉はそんな紗矢華の前に、銀色の長剣を差し出した。煌華麟だ。

「私はあなたの敵じゃない。あなたも気づいているのではなくて？」

「そっちも政府の命令で動いてるってわけ？」

引ったくるように剣を受け取りながら、紗矢華は顔をしかめてみせる。

紗矢華が受けた命令は、クスキエリゼに監禁されていた結瞳の保護。だが、霧葉はクスキエリゼに協力し、紗矢華の任務を妨害したのだ。それが太史局の命令に基づく行動だとしたら、獅子王機関と太史局は、真っ向から対立していることになる。

「政府の意見も一枚岩ではないということよ。立場が変われば、目的も変わるでしょう？」

そう言って霧葉は、肩に担いでいた黒いケースからなにかを取り出した。

それは金属製の細長い武器だった。穂先が回転し、スライド式の柄も変形して、長さ二メートルほどの長槍へと姿を変える。二叉に分かれた穂先を持つ双叉槍――

その美しいシルエットは、調律用の音叉によく似ている。

突然武器を抜いた霧葉を睨んで、紗矢華も剣を構えようとした。が、

「太史局の上層部が、獅子王機関とは話をつけたわ。この任務が終わったら、あなたの身柄は解放する。でも、その前に少しだけ、〝彼女〟の器になってもらうわ」

「彼女……？」

キン、と響く激しい耳鳴りに、紗矢華が表情を凍らせる。霧葉の武器は、ただの槍ではない。呪術を収束させて撃ち出すための増幅器だ。

だが、そんなはずはない――と、紗矢華は狼狽する。双叉槍を経由して放たれているのは、霧葉の呪力ではなかった。もっと遥かに強大な魔力だ。

おそらくは吸血鬼の真祖にも匹敵するほどの、古の力――

「この力……まさか……夜の魔女!?　江口結瞳は〝彼女〟の器だというの……!?」

霧葉の真の目的に気づいて、紗矢華は〝煌華麟〟を振り上げた。

だがそこで紗矢華の動きは止まる。双叉槍から放たれる膨大な魔力が、舞威媛の精神防壁を破って紗矢華の精神を支配している。〝彼女〟が紗矢華の肉体を乗っ取ろうとしているのだ。

「どうして、そんな……ことを……!?」

薄れゆく意識の中で、紗矢華は必死に言葉を紡ぐ。霧葉は微笑んで首を振り、

「愚問ね、煌坂紗矢華。太史局が動く理由はひとつよ。この国を……いえ、世界を護るの」

そして霧葉は静かに目を伏せて、口の中だけで声もなく呟いた。

「たとえ絃神島を沈めてでも――」

1

背中の痛みで目が覚めた。時刻は午前四時少し前。最後に時計を見たときには、すでに深夜一時を過ぎていた記憶があるので、最大でも三時間しか寝ていないことになる。

新月の時期なのか、窓の外の空は暗かった。

見慣れない吹き抜けの天井は、小洒落たコテージのリビングの風景――

自分がブルーエリジアムを訪れていたことを、古城はようやく思い出す。

「そうか……寝オチしてたのか……」

固まった関節を軋ませながら、古城はむくりと上体を起こした。身体のあちこちが痛むのは、リビングの床で眠りこけていたせいらしい。

二人掛けのソファの上では、雪菜を挟んで浅葱と凪沙が肩を寄せ合うようにして眠っていた。テーブルの上に散らばっていたのはトランプだ。昨晩、花火を終えたあと、罰ゲームつきのポーカーが異様な盛り上がりを見せて、全員が疲れと眠気でぶっ倒れるまで遊びつづけたのだ。

異様にカードのヒキが強い雪菜と、確率計算と記憶力にものをいわせる浅葱がトップを争い、矢瀬がのらりくらりと要所要所で勝負強さを見せつける。途中でおねむになって脱落した結瞳を除いて、ポーカーフェイスとは無縁な凪沙と、抜群の運の悪さを誇る古城が、交互に罰ゲー

ムを繰り返すという悲惨の展開であった。

「……ったく、姫柊までなにやってんだか。風邪引くぞ」

ソファで熟睡する女子組を眺めて、呆れたように息を吐く古城。先に寝た凪沙たちに挟まれて身動きが取れずにいるうちに、雪菜も眠ってしまったらしい。こんなふうに無防備な雪菜の寝顔を見るのは、実は初めてかもしれない。

すっぴんの浅葱は、いつもより少しだけ幼く感じられた。眠っている凪沙は逆に少し大人びて見える。三人ともそれなりに露出度の高い服装をしているが、仲睦まじげな姿で眠っているせいか、妙にほのぼのとした雰囲気がある。古城は三人の父親にでもなった気分でエアコンの設定温度を少し上げて、誰かがリビングに持ちこんだブランケットをかけてやった。

もう一度ベッドで寝直すか、とあくびを洩らしながら古城は男子部屋に向かう。

廊下に立っていた人影に気づいたのは、その直後のことだった。

「……矢瀬？　おまえ起きてたのか？」

リビングの照明が消えていたのもこいつの仕業だろうか、と古城は短パン姿の友人を眺める。しかし矢瀬は返事をしない。代わりに彼は、ぎこちなく唇を震わせて、

「……いな……さん」

「え？」

矢瀬が洩らした奇妙なひと言に、古城は思わず眉を寄せた。

そんな古城に向かって、矢瀬は一歩足を踏み出し、そのまま両腕を大きく広げると、
「緋稲さあああああああん！」
「どわあああああっ！」
いきなり絶叫しながら抱きついてきた矢瀬に、古城は度肝を抜かれて硬直する。
明らかに寝ぼけているわりに、矢瀬の動作は機敏だった。身動きできない古城の背後に回りこみ、そのまま力強く抱き寄せてくる。
古城の記憶が確かなら、緋稲というのは、矢瀬が以前から口説いていた年上の彼女の名前のはずだ。どうやら矢瀬は古城のことを、その彼女だと勘違いしているらしい。
このまま押し倒されてはたまらん、と古城は必死に逃れようとするが、
「はは っ、相変わらずつれないねえ……だけど今日の俺は諦めない！」
「寝ぼけんな、この馬鹿！　起きろ！　ってか、離れろ！」
全身に鳥肌を立てながら、古城は力任せに矢瀬を振りほどいた。
矢瀬の身体は勢い余って派手に吹き飛び、ゴン、と鈍い音を立てて壁に激突する。そのままずるずると倒れこむ矢瀬。さすがにダメージがでかかったらしい。
「だ、大丈夫か、矢瀬？　すまん。だけど今のはおまえも悪いだろ」
やりすぎたか、と不安になって、古城は矢瀬の隣に屈みこむ。しかし矢瀬は古城の存在に気づかずに、唇を歪めながら独り言のように呟いた。

「やられたぜ、畜生……精神、支配か……」
「え？」
驚く古城の目の前で、矢瀬は前のめりに倒れて意識を失う。力尽きたように眠るその顔には、苦悶の表情が浮かんでいる。
「お、おい、矢瀬？」
どうなってんだ、と困惑して古城は頭を抱えた。薄暗いリビングに、再び静寂が戻ってくる。
眠気は完全に消えていた。自分自身の心臓の音だけが、耳元でバクバクと鳴っている。
その耳障りな鼓動に混じって聞こえてきたのは、誰かの苦しげな呼吸音だった。コテージの二階へと続く吹き抜けの階段から、かすかな吐息が響き続けている。
「ハア……ハア……」
「結瞳？」
いつからそこにいたのだ、と疑問に思いながら、古城は驚いて結瞳を見上げた。
サマードレス姿の小学生が、階段の踊り場にぺたんと座りこみ、荒い呼吸を続けている。
汗に濡れた彼女の横顔は、身体の奥からこみ上げてくる異変に、必死で抗っているようにも見えた。その姿は、吸血衝動に襲われたときの古城によく似ている。
「駄目……です。古城さん……来ないで！」
「いや、でも……」

明らかに不調を訴えている結瞳をほっとくわけにもいかず、古城は階段に足をかける。
その瞬間、抑えきれない羞恥と恐怖に少女の頬が歪んだ。
「いやあああっ――！」
「結瞳……!?」
「見ないで……見ないでください……！」
古城の接近に怯えたように後ずさる結瞳。彼女の脚に挟まれていた、細い蛇に似たなにかが、自らの意思を持つように痙攣する。
「……いや……あ……」
古城にそれを見られたと知って、結瞳の顔が青ざめる。その直後、彼女は信じられないほどの素早さで身を翻して、コテージの二階へと駆け出していった。
取り残された古城は、呆然と階段の下で立ち尽くす。
二階からかすかに聞こえてきたのは、この世のすべてを嘲笑うかのような笑い声だ。それは結瞳の声でありながら、まるで見知らぬ人間のものに聞こえる。そのことに古城は動揺する。
彼女の身に、なにが起きているのかわからない。だが、明らかに今の結瞳は普通の状態ではなかった。矢瀬が最後に呟いた、精神支配という言葉も気にかかる。と、
「――先輩」
階段を駆け上がろうとした古城の背中を、唐突に誰かが呼び止めた。

振り返った古城が見たのは、そこに気配もなく立っていた雪菜の姿だ。
「姫柊、起きてたのか……！」
古城が安堵の息を吐く。もし結瞳がなんらかの怪奇現象に襲われているのなら、古城一人の手に余る。相手は微妙なお年頃の少女ということもあって、雪菜の存在は断然心強い。
「ちょうどよかった。来てくれ、結瞳の様子がおかしいんだ……！」
「結瞳ちゃんが……ですか？」
雪菜が、なぜか不思議そうに古城を見上げて訊いた。
ああ、と古城は顔をしかめてうなずき、
「生えてたんだ、なにかが……あいつの太腿の間から……！」
「あの、先輩……」
古城を責めるように睨みつけて、雪菜が怒気の混じった溜息をつく。無知な小学生男子を注意する、年上のお姉さんのような表情だ。
「いくら小学生でも、結瞳ちゃんくらいの歳なら、身体にそういう変化があってもおかしくないんですよ……その、たぶん、ですけど……」
「なんの話だ!?　そうじゃなくて尻尾だよ！　尻尾！」
「尻尾？」
「ああ」

古城は、瞬に焼きついた一瞬の記憶を辿って、唇を噛む。結瞳のスカートの裾からのぞいていたのは、間違いなく尻尾だ。黒く、細く、先端の尖った獣の尻尾――

「たぶん普通の獣人化じゃなかった。よくわからないけど、なにかが違うんだ」

あの尻尾は、完全な実体ではなかったのかもしれない。そんなことを思いながら、古城は階段を上ろうとする。

だが、その前に強く背中を引かれた。古城の服の裾をつかんでいたのは雪菜だ。

「どこに行くんですか、先輩」

雪菜が古城を階段から引きずり下ろして、通せんぼするように前に回りこむ。逆光になった彼女の表情は見えない。だが、普段の物静かな雪菜とは、少し雰囲気が違っていた。

「……姫柊？」

「結瞳ちゃん、結瞳ちゃんって……そんなに小さい子が好きなんですか？」

雪菜が、無造作に古城に近づいてくる。見上げてくる彼女の瞳までの距離は、二十センチも離れていない。古城は声を上擦らせて狼狽しながら、

「は!?　なに言ってんだ、姫柊。ふざけてる場合じゃないだろ！」

「誤魔化さないでください！」

「え、ええっ!?」

雪菜に真顔で叱りつけられて、俺が悪いのか、と古城は一瞬本気で悩んでしまう。

そんな古城に、雪菜はぴったりと身体を密着させて、

「先輩の監視役はわたしなんですよ。それなのに先輩は紗矢華さんや結瞳ちゃんのことばかり気にしてて、昼間は藍羽先輩とずっと二人きりでいちゃいちゃ……」

「……は？」

寝起きの雪菜から漂ってくるのは、かすかな甘い芳香だった。薄いシャツ越しに伝わってくる彼女の柔らかな弾力に、古城は思わず唾を飲む。

「やっぱり、わたしでは駄目なんですか……？　満足できませんか……？」

「いや、べつに満足がどうとか、そういう問題じゃなくて……」

なけなしの自制心を必死にかき集めて、古城は雪菜の身体を引き剝がす。

その瞬間、雪菜は、大きな瞳に絶望の色を浮かべて、

「不満ですか……そうですか。それなら監視役として先輩を殺してわたしも死ぬしか……」

「は……!?」

雪菜がすっと右手を伸ばした。

その先の壁に立てかけられていたのは、雪菜が持ってきた黒いケース。海辺のリゾートで見かけても違和感のない、ボディボード用の収納ケースだ。

しかしケースの中身はボディボードではなく、見慣れた銀色の槍だった。

七式降魔突撃機槍。吸血鬼の真祖をも滅ぼすといわれる、獅子王機関の秘奥兵器である。

「ば、馬鹿！　こんなところで　雪霞狼　なんか持ち出したら……！」

見慣れた槍の切っ先を向けられて、古城はビビりながら後ずさる。さすがにここまで来れば、古城も気づいていた。今の雪菜は普通ではない。さっきの矢瀬とまったく同じだ。

どういう理由かは知らないが、無意識の欲望が暴走している。雪菜が普段から心の奥底で、こんな破滅的なことを考えていたのなら、それはそれで問題だが――

「なにしてるの、古城？」

そして後ずさる古城の背中を、誰かが突然抱き留めてくる。振り向いた古城が目にしたのは、薄明かりの中で弱々しく微笑む、華やかな髪型の少女だった。

「え!?　あ、浅葱!?」

古城のこめかみを冷や汗が伝う。

もちろん深夜のリビングでこれだけ騒いでいれば、彼女が目を覚ましても不思議はない。古城が驚いたのは、浅葱が浮かべていた今にも泣き出しそうな表情のせいだった。

「あたしに黙って、こんな時間に二人でなにをしてるわけ？」

途切れ途切れのかすれた声で浅葱が訊く。涙で盛り上がった瞳から、透明な滴が流れ落ちる。古城は、わけのわからない罪悪感に打ちのめされて頼りなく首を振り、

「いや、これは……なんというか、その」

「またあたしに内緒で姫柊さんといちゃつくの？　やっぱりその子のほうがいいんだ……」

「……え!?」

「あたしだって、頑張ったんだけどな……恥ずかしいことも、いっぱいしたし」

そう言って古城の背中にしがみついてくる浅葱。その全身が嗚咽するように震えている。

またこのパターンかよ、と古城は天井を振り仰ぎ、

「おまえまでおかしくなってるのかよ!?」

「おかしくってなによ、馬鹿古城！　あたしだって不安なんだよ……あんたがなにも言わずにあたしを置いてどこか遠いところに行っちゃうんじゃないかって。あたしは、あんたが第四真祖とかわけのわからないものになる前からずっと……」

「あ、浅葱……」

浅葱が弱々しく古城の背中を叩いている。どちらも不器用なことには変わりないが、どこか破滅的なストーカー体質の雪菜に対して、暴走した浅葱の無意識は気弱で幼い印象がある。

これが彼女たちの本音ではない、とは頭では理解しながらも、むげに突き放すこともできずに古城は硬直。そんな古城の耳元に、浅葱がなにかを囁こうとして、

「――そこまでです、藍羽先輩」

そういう大切な告白は正気のときにどうぞ、と言わんばかりのタイミングで、雪菜が浅葱の首筋へと銀色の槍を押し当てた。

薄皮一枚切れるかどうかの優しい斬撃。だが、その瞬間、浅葱の全身は青白い火花に包ま

れて引き攣った。そのままぐったりと倒れこむ浅葱を、雪菜が横から抱き留める。
「ひ、姫柊……!?」
「藍羽先輩の精神支配を解除しました。たぶんこれで正気に戻ると思います」
生真面目な口調で雪菜が言う。いつもどおりの冷静な彼女の雰囲気に、古城は泣きたくなるくらいの安心感を覚えた。一人で思い詰めて心中すらほのめかしていた雪菜が、いつの間にかまともな状態に戻っていたのだ。
「やっぱり誰かに操られてたのか。姫柊の様子がおかしかったのもそのせいか？」
「も、もちろんです。〝雪霞狼〟のおかげで解放されましたけど」
雪菜は不自然に表情を強張らせながら、妙に力強く主張する。槍を握る手に力が入りすぎて、三つ叉に分かれた刃の先端が小刻みに揺れる。
「ですから、さっきの言葉は決してわたしの本心とかではないですから。違いますから」
「お、おう」
脅迫めいた表情で詰め寄られて、古城は慌ててうなずいた。それ以外に、どう答えればいいのかわからない。とりあえず雪菜に手を貸して、気絶した浅葱をソファに横たえる。
すると薄闇の中で誰かがもぞもぞと動き、むくり、と起き上がる気配がした。
次になにが起きようとしているのか、もういい加減、古城にも薄々想像がついている。
「古城……君……」

うんざりと目元を覆う古城に抱きついて来たのは、凪沙だった。
普段の彼女とは雰囲気が違う気もするが、ほとんど変わっていないような印象でもある。
ともあれ古城は、おまえもか、と気怠く嘆息し、
「あのね、古城君……凪沙も本当は……」
「姫柊、頼む」
「……はい」
凪沙の言葉を途中で遮って、古城はひょいと彼女を押しのけた。
雪菜が、凪沙の鼻先に右手を伸ばす。一種の催眠術なのか、雪菜が無造作に指を鳴らすと、凪沙の全身から力が抜けた。ぐったりとソファに倒れこんだ凪沙が、再び寝息を立て始める。
浅葱のときのように〝雪霞狼〟を使わなかったのは、緊急性がないと判断したのか、あるいは体力のない凪沙に気を遣ったのか、そのどちらか——あるいは両方だろう。
凪沙が大人しくなったところで、どうにか古城は混乱から立ち直る。
彼女たちの暴走の原因はわからないままだが、しばらく放置しておいても問題ないだろう。
それよりも先に片付けなければならないのは、結瞳のことだ。
そう思って古城はもう一度、階段を見上げた。
愉しげな笑い声が頭上から降りそそいできたのは、その直後のことだった。

2

吹き抜けの階段の手すりから、幼い少女が顔を出している。
肩のあたりで切り揃えた柔らかそうなクセっ毛と大きな瞳は、古城たちが知っている結瞳の特徴だ。しかし彼女が浮かべている笑みは、普段の結瞳とはずいぶん印象が違う。
驚く古城たちを嘲笑うような、悪意に満ちた表情だ。
「なーんだ、つまんない。せっかく素直にホントの気持ちを言えるようにしてあげたのに」
舌足らずな声でそう言って、結瞳が不満そうに肩をすくめた。
拗ねたように唇を尖らせながら、彼女は雪菜と古城を見比べる。
「そっちのお姉さんが元に戻ったのは、その変な槍の力みたいですけど、あたしの支配が効かないお兄さんは何者なんです？　ただの魔族じゃないですよね。あたしならレヴィアたんだって支配できるって、キリハは言ってたのにな」
「……レヴィア？」
雪菜が眉をひそめて呟いた。
古城は唖然として少女を見上げている。
階段の上に立っている少女は、表情だけでなく口調や言葉の内容も、結瞳とはまるで別人だった。古城や雪菜の名前すら、忘れてしまったように見える
「おまえ……結瞳じゃないのか。誰だ？」
「あたしも結瞳ですよ。結瞳はあたしのことを莉琉って呼んでるみたいですけど」
「……莉琉!?」
古城が小さく息を呑む。莉琉という響きには聞き覚えがあった。それは結瞳と一緒にクスキエリゼに捕まっていたという、もう一人の少女の名前だ。〝莉琉〟は、結瞳の姉の名だ。
だが、その莉琉は、古城たちの目の前で、結瞳の身体を借りて笑っている。
「まさか……解離性同一性障害……？」
雪菜が、莉琉と名乗った少女を見上げて呟いた。結瞳の突然の変貌の理由に、思い当たることがあったらしい。しかし莉琉は愉快そうに目を細め、
「ふふっ、多重人格ってやつですかぁ？　つらい体験をした結瞳が、自分の精神を守るために生み出した、もうひとつの人格ってやつですね。そうですねえ、当たらずといえども遠からず、ですかねえ」
他人事のようにそう言って莉琉が嘲笑する。古城は、そんな莉琉の言葉に苛立ちを覚えて、
「つらい体験って……誘拐のことか？」
「誘拐？　やだ、違いますよ」
なにそれウケル、と莉琉は腹を抱えて笑った。

「結瞳はずっといじめられてたんです。同じ学校の生徒にも、実の両親にも。クスキエリゼは孤立していた結瞳を引き取ってくれた恩人なんですけどぉ？」

「いじめって……どうして？」

「えー……だって当然じゃないですかー……結瞳は夢魔なんですよ」

古城の疑問に、莉琉があっさり答えてくる。

なんの気負いもない彼女の告白に、古城は、その言葉の意味を理解することができなかった。

「夢魔……だと？」

「はい。サキュバス、ってやつです。滅多にいない魔族なんですけど、知ってます？　精神支配が特技で、他人の心に入りこんで好き勝手に操ったり、欲望を刺激したり。そんなエッチな小学生なんて、恥ずかしいですよねえ。それはみんなに嫌われちゃいますよー……なんて、他人事みたいに言っちゃいますけどぉ」

莉琉が自嘲するように唇の端を吊り上げる。その表情は、なぜか泣いているようにも見える。

「そういう自分を認めたくなかった結瞳が、夢魔の能力や欲望を切り離して作ったのが、あたしなんです。ずるいですよね。イヤなところだけ他人に押しつけて、一人で清純ぶっちゃって。もー、結瞳のむっつりさん！　こんな立派なモノを生やしちゃってるくせにー」

彼女が着ているサマードレスの裾から、黒く細い尻尾がゆらゆらと揺れている。魔力によって実体化した獣の尻尾。それが結瞳の正体を、なによりも雄弁に表している。

「結瞳も未登録魔族だったのか……」

古城は、圧し殺した低い声で呟いた。

夢魔というのが、どれくらい稀少な魔族なのかはわからない。だが、結瞳が普通の小学生ではないのなら、クスキエリゼが彼女を監禁していたことにも説明がつく。

「そうなんです。ふふっ、お兄さんも結瞳のこと嫌いになっちゃいました？」

小学生とは思えない、奇妙な色気を振りまきながら莉琉が訊いた。

そんな莉琉を睨め上げて、古城は呆れたように舌打ちし、

「そんなわけねえだろ」

「……あら？」

「結瞳が夢魔なら、こっちは吸血鬼だぜ。散々いやらしいだのなんだのと言われながら、姫柊たちの血まで吸わせてもらってんだ。尻尾が生えてるくらい可愛いものじゃねーかよ」

古城の言葉を聞いていた莉琉が笑みを消した。

彼女は幼い唇を不愉快そうに歪めて、

「ふーん、いい人なんだ。お兄さん。なんか、ヤだな、そういうの。偽善者ぶってるっていうか、同病相憐れむっていうかぁ……それとも、ロリコン？」

「誰がだ！」

「なんか、むかついちゃったから、やっぱりキリハのお願いを聞いてあげちゃおうかなって」

凶悪そうに眉を吊り上げて、莉琉が階段の手すりを乗り越える。サマードレスの背中を破って、彼女の背中から生えたのは翼だった。魔力によって紡がれた半実体の翼だ。

その翼をはためかせ、莉琉は、音もなく古城たちの背後に着地する。そしてガラス窓を開け放ち、彼女はそのままコテージの外へと飛び出していった。

止める間もない一瞬の出来事だ。

「待て、結瞳……！」

古城は彼女を追って外に出る。莉琉は裸足のまま芝生の中庭に立っている。

だが、彼女のほうへと駆け寄ろうとした瞬間、古城の視界の片隅を銀色の閃光が駆け抜けた。

それは金属の翼を持つフクロウだった。咄嗟に立ち止まった古城の眼前をかすめて、着ていたシャツの胸元を大きく引き裂く。

「先輩！　伏せて！」

空中を旋回して再び古城を襲おうとしたフクロウを、雪菜が槍で迎撃した。

激しい火花とともに片翼を失って、フクロウはそのまま地上へと落ちた。一枚の薄い金属板へと姿を変えて、それは二度と動かなくなる。

「なんだ、こいつは……!?」

「式神です。でも、この術式は……」

足元の金属板を見下ろして、雪菜は硬い表情を浮かべた。

古城は周囲を見回して警戒する。

あの式神は、莉琉を止めようとした古城を狙っていた。

襲撃のタイミングも、異様なまでに正確だ。この状況で考えられるのは、結瞳を連れ戻しに現れたクスキエリゼの関係者としか思えない。

そんな古城の推理を裏付けるように、闇の中に立っていた莉琉が歓声を上げた。

「迎えに来てくれたんだ、キリハ。ただいま！」

駆け寄ってくる莉琉を出迎えたのは、制服を着た黒髪の女子高生だった。

コテージ前の道路に堂々と車を停めて、彼女は莉琉を待っている。

整った顔立ちと、華奢だが、しなやかな強靭さを感じさせる体つき。彼女の肩にかけられているのは、カメラの三脚を持ち運ぶための黒いケースだ。

どことなく雪菜に似た少女だと、古城は思う。

「お帰りなさい、莉琉。少しは気は晴れて？」

「まぁねー」

黒髪の少女にまとわりつきながら、莉琉がけたたましく笑う。

古城と雪菜は足を止め、戸惑いながら黒髪の少女と対峙した。クスキエリゼが派遣してきたとおぼしき人物が、高校生の少女だったことが意外だったのだ。

「……おまえが、キリハか？」

「ええ、妃崎霧葉よ。初めまして、第四真祖。太史局の六刃といえば、後ろの彼女にはわかってもらえると思うけれど」

悠然と古城を見つめ返して、霧葉と名乗った少女が答える。

霧葉が自分の正体を知っていたことに、古城は軽く動揺した。しかしそれ以上に驚いていたのは雪菜だった。信じられないというふうに目を見開いて、雪菜は凍りついたように動かない。

「……太史局が、どうして紗矢華さんの任務の妨害を……!?」

「ちょっとした政策の違いがあっただけ。あなたたちと争うつもりはなくてよ。わたしにはね」

「――っ!?」

霧葉の言葉が終わる前に、横殴りの衝撃を受けて古城は地面に転がった。

ぼんやりと立ち尽くしていた古城を突き飛ばしたのは、雪菜だった。

直前まで古城が立っていた場所をかすめて、洋弓の矢が地面に突き刺さる。あのまま古城がそこにいたら、完全に胴体を射貫かれていたはずだ。

古城は地面に倒れたまま頭を上げ、矢が飛来した方角へと視線を向けた。

そして、低くうめいたきり絶句する。

霧葉と莉琉を護衛するかのように、銀色の洋弓を構えていたのは、すらりと背の高い一人の少女だった。ポニーテールにまとめた長い髪が、夜明け前の闇の中に舞っている。

「煌坂……なんで、おまえか……!」

愕然とうめく古城を見据えたまま、煌坂紗矢華が洋弓に新たな矢をつがえた。

紗矢華には、これまで何度となく殺意を向けられたことがある。だが、雪菜を溺愛している彼女が、その雪菜を巻きこむような形で古城を攻撃してきたのは初めてだった。

それだけでも今の紗矢華が、普通の状態ではないと判断するには十分だ。

「紗矢華さん!?」

槍を構えることも忘れて、雪菜が叫ぶ。しかし弓を持った少女は表情を変えない。

機械に似た冷徹な眼差しで、古城たちのことを無表情に睥睨するだけだった。

3

「――行きましょう、莉琉。久須木会長がお待ちかねよ」

動けない古城たちに背中を向けて、妃崎霧葉が歩き出す。彼女たちの前に停まっているのはクスキエリゼの社用車だ。古城はただそれを呆然と見つめている。

霧葉が莉琉を無理やり連れ去ろうとしたのなら、妨害することもできただろう。しかし霧葉はなにもしていない。莉琉は自らの意思で望んで、霧葉についていこうとしている。

そして古城たちの行く手を阻んでいるのは、獅子王機関の舞威姫である紗矢華なのだ。

このまま莉琉――否、江口結瞳を連れ去られてしまったら、古城たちには、彼女を連れ戻す大義名分がない。完全に霧葉たちの思うつぼだ。

「姫柊、結瞳のことを任せていいか？　煌坂は俺がどうにかする」

「先輩？」

小声で呼びかける古城を見て、雪菜が不安そうに瞳を揺らす。

「でも、先輩。今の紗矢華さんは――」

「わかってる。精神支配ってやつだろ。さっきの姫柊たちよりも酷い状況みたいだな。ったく、莉琉とは離れていたはずなのにどうしてだ？」

「はい。やはり、ここはわたしが……」

「駄目だ、姫柊」

古城は強い口調で雪菜を制止した。たしかに紗矢華を倒すのが目的ならば、雪菜の力を借りたほうが確実だ。雪菜の〝雪霞狼〟は、紗矢華の〝煌華麟〟の凶悪な能力――疑似空間切断を無効化できるし、舞威媛である紗矢華の手の内も知っているからだ。だが、

「いいから、行けって！　自分がおまえを殺そうとしたなんて知ったら、正気に戻ったときに煌坂が落ちこむだろうが！」

「――わかりました。先輩、どうかお気をつけて。本気の紗矢華さんと戦ったら、わたしでも五回に一回勝てるかどうかなんです」

「え……!?」

とんでもないことを言い残して走り去る雪菜を見送って、古城は顔を引き攣らせた。その情報は正直あまり聞きたくなかったかもしれない。特にこのタイミングでは。

考えてみれば、本来の雪菜はまだ見習いで、それに対して紗矢華は正式な舞威媛。実戦経験でも圧倒的に紗矢華が上だ。おまけに呪術の苦手な雪菜と違って、紗矢華は多彩な呪術を器用に使いこなす。古城の魔力を無効化する〝雪霞狼〟を持たないのが、救いといえば救いだが、

「だけど、こいつの弓は、たしか相当ヤバいやつじゃなかったっけか――！」

まるで古城の心情を読み取ったかのように、紗矢華が呪矢を射放った。

上空へと向かって飛んだ鳴り鏑矢は、その大音響によって高密度の呪文を生成する。展開した巨大魔法陣に生み出された雷撃が、古城を目がけてピンポイントに降りそそいだ。

「ああ、くそ！　疾く在れ、〝獅子の黄金〟！」

古城はたまらず眷獣を召喚した。膨大な魔力をまとう雷光の獅子が、降りそそぐ雷と激突し、紗矢華の凄まじい攻撃を消滅させる。

巨大な魔力の激突の余波で、増設人工島全体が不気味に震動した。帯電した大気が古城たちの肌を刺し、眩く発光した街灯が焼き切れる。

「――手加減なしかよ、おい!?」

紗矢華の攻撃のデタラメな威力に、古城は圧倒されて立ち竦む。〝獅子の黄金〟だからこそ、

精神支配されている紗矢華が、実はほんの少しだけ正気を残していて全力減、こ…れる、という都合のいい展開も、どうやら期待できないようだった。

「くそ……やっぱ早まったか」

雪菜を先に行かせてしまったことを、さすがに少し後悔する。最初からわかっていたことはいえ、古城一人で今の紗矢華を止めるのは無理がありすぎる。

もっとも紗矢華が相手では、たとえ雪菜でも容易く彼女を無力化できたとは思えない。浅葱や凪沙を気絶させたときとは状況が違うのだ。

今の紗矢華を衝き動かしているのは、秘めた欲望を暴走させるだけの、不完全な精神支配ではない。彼女は完全に操られて、本気で古城を殺そうとしている。

どうやれば莉琉の力を借りずに、そんな強力な精神支配が実行できるのかはわからない。だが、打つ手が残されていないわけではない。理屈はわからないまでも、紗矢華の精神支配を解除する方法なら、古城にもひとつだけ思いついたことがある。

吸血鬼である古城だけに可能な方法が――

「要は、あいつを支配しているものよりも、強い魔力で上書きしてやればいいんだろ！」

問題は、それを実現できるかどうかだな、と古城は唇を噛んだ。

古城の作戦を実行するには、いくつか越えなければならないハードルがあるのだ。絶え間なく攻撃を受け続けているこの状況では、その最初の関門を突破するのが難しい。

どうにか受け止めることができたが、並の吸血鬼の眷獣なら今の一撃で間違いなく吹き飛んでいたはずだ。ただの人間が、単独で扱う呪術としては破格の規模である。

考えてみれば、紗矢華はかつて、ディミトリエ・ヴァトラーの監視役を任されていたのだ。つまり、あの戦闘狂の吸血鬼でさえ、彼女の実力を認めていたということになる。もしかしたら本気の紗矢華は、古城が想像していた以上に、敵に回すと厄介な相手だったのかもしれない。

そして呪矢が防がれたと気づいた紗矢華の、次の行動は早かった。

〝煌華麟〟を洋弓から剣に変形させて、古城に接近戦を挑んできたのだ。

「暁古城っ！」

「――うおっ！」

鼻先をかすめて振り下ろされた長剣を、古城は紙一重で回避する。吸血鬼化した古城の反応速度をもってしても、よけられたのが奇跡と思えるほどの凄まじい斬撃だ。

「鬼かおまえは!?　素人が相手なんだから少しは加減しろよ！」

古城は眷獣の召喚を解除して全力で逃げ惑う。どのみち古城の眷獣は強力すぎて、紗矢華が相手では使えない。こんな接近した状態で下手に紗矢華を攻撃しようものなら、彼女を跡形もなく消し飛ばした上に、古城自身も巻きこまれて死ぬ羽目になるからだ。

とはいえ眷獣を使えない吸血鬼は、魔族としては脆弱な部類である。超一流の攻魔師である紗矢華が相手では、逃げ続ける以外になにも対策を思いつかない。

凄まじい速さで突き出された紗矢華の剣が、古城の頬をかすめていく。
空間切断効果をまとったその刃は、道具を使って防ぐことも、受け止めることも不可能だ。
それを封じつつ、なおかつ紗矢華の精神支配を解除する方法――
「少々荒っぽいけど、やってみるか……」
開き直ったように呟いて、古城は不敵に微笑んだ。
古城の脳裏をよぎったのは、プール掃除のときに雪菜と交わした何気ない会話だ。
曰く、紗矢華は水に弱いはず――
「――疾く在れ、〝甲殻の銀霧〟！」
古城が新たな眷獣を召喚する。吸血鬼が自らの血の中に従えているという眷属の獣。第四真祖アヴローラ・フロレスティーナの四番目の眷獣は、霧をまとう巨大な甲殻獣だ。
「っ!?」
地面の感触が失われたことに気づいて、紗矢華が表情を凍らせる。
〝甲殻の銀霧〟は、吸血鬼の持つ〝霧化〟能力を可る眷獣だ。ただしその効果範囲は、宿主である古城だけではない。物質の持つ結合力を奪い去り、ありとあらゆる物体を霧へと変える。第四真祖の眷獣を名乗るに相応しい、災厄と破壊の化身なのだ。
もちろんそんな危険な力を、紗矢華に対して使うわけにはいかない。
古城が狙ったのは紗矢華ではなく、彼女の足元の地面だった。

紗矢華が立っているのは、樹脂と金属によって造られた増設人工島。そして人工の大地が浸透すれば、その下にあるのは――海だ。
「あああああああっ！」
銀色の霧に包まれながら、重力に引かれて紗矢華は落ちていく。
海面までの高さはおそらく六、七メートルほど。意外に可愛らしい紗矢華の悲鳴とともに、派手な水柱が噴き上がる。
「――って、やばいか!?」
いちおう目的は果たしたものの、強力すぎる眷獣の攻撃は、当然それだけでは済まなかった。
銀色の霧が凄まじい勢いで広がって、人工の大地に半径数十メートルの巨大な穴を穿つ。
増設人工島を支える構造材も、敷き詰められた表土も、その上の樹木や街灯も完全に消滅。
支えを失った道路が陥没して、次々に海面へと落下する。
「くそ……やり過ぎだ……ゴホッ！」
傾いた地面にしがみつく古城が、頭から海水を浴びて咳きこんだ。眷獣がもたらした圧倒的な破壊は、宿主である古城すらお構いなしに巻きこんだのだ。
かつてコテージの庭だった場所は見事に抉れて、すり鉢型の巨大な入り江が出現している。
付近の建物が海に沈まなかっただけでも、運が良かったと思うべきなのかもしれない。
「――煌坂は!?」

眷獣の召喚を解除して、古城は周囲を見回した。

その直後、背中に殺気を感じて振り返る。ちょうど海中から這い出してきた紗矢華が、古城をめがけて剣を振り下ろそうとしているところだった。

しかし紗矢華の攻撃に、先程までの速さはない。濡れた衣服がまとわりついて、彼女の動きから鋭さを奪っているのだ。いちおう古城の目論見は成功したことになる。そして、

「おお……これは……！」

上段に剣を構えた紗矢華を見上げて、古城は思わず息を呑む。

動くのに邪魔だと判断したのか、紗矢華は、水を吸って重くなった制服のベストを脱ぎ捨てていた。その下に着ていた白いスクールシャツもずぶ濡れだ。肌に張りついた布地を透かして、夜目にも鮮やかな白い素肌と、可愛らしいデザインのブラがくっきりと浮かび上がっている。ただでさえスタイルのいい紗矢華だけに、それはなかなか破壊力のある光景だった。彼女が剣を振り回すたびに弾む胸元と、濡れ透けなシャツのコントラストに古城は目を奪われる。

古城は紗矢華との間合いを測りながら、じりじりと海の深いほうへと移動した。

それを追って紗矢華も再び海へと入ってくる。

すでに海面は古城たちの腰の高さにまで達していた。この状態では、紗矢華は剣を振れない。〝煌華麟〟が生み出す空間の亀裂が周囲の海水を巻きこんで、使い手である紗矢華も無事では済まないからだ。必定、彼女が選ぶ攻撃は突きだけということになる。

それがわかっていれば、古城にも打つ手がある。

「煌坂……悪く思うなよ！」

吸血鬼の持つ筋力を全開にして、古城は水底を蹴りつけた。四、五メートルほどの距離を一気に詰めて、真正面から紗矢華に迫る。

「暁古城……！」

紗矢華の反応は速かった。あっさりと古城の動きを見切って、構えた長剣を突き出してくる。古城はそれを回避しなかった。さらに足を踏み出して加速し、あえて自分から剣の切っ先へと突っこんでいく。

予期せぬ古城の行動に、紗矢華の狙いがわずかにそれた。

心臓を貫くはずだった彼女の剣は、古城の脇腹を突き抜いて背中に貫通する。

「ぐおおおっ！」

古城の口から悲鳴が洩れた。死ぬほど痛い。だが、それは最初から覚悟していたことだった。根元まで古城に突き刺さった紗矢華の剣は抜けない。そして古城はまだ動ける。

目の前には、驚愕に固まる紗矢華の姿。伸ばした古城の手が、彼女の襟元に届く。

海水と汗に濡れた白い首筋。濡れたシャツの下に浮き上がる細い鎖骨。思わず見とれるほどの優美な額立ちと、華奢な体つきに似合わぬ深い胸の谷間――

たとえ命懸けの戦闘中であっても、古城の欲望を刺激するには十分だ。

そして吸血鬼が持つ吸血衝動の源は、その性欲なのである。

「なっ!?」

古城が強引に引き寄せたことで、紗矢華のシャツの襟元がはだけた。あらわになった彼女の素肌へと、古城が牙を突き立てる。

「っ!?」

紗矢華が苦痛に表情を歪めた。古城は構わず彼女の血をすする。

吸血鬼は、血を吸った人間を操ることができるという伝説がある。あいにく古城にはそんな器用な真似はできないが、少なくとも、第四真祖の強大な魔力を流しこむことで、紗矢華にかけられた精神支配を消滅させることは可能なはずだった。

だが精神支配が完全に解ける前に、紗矢華がスカートの下から取り出したのは銀色のダーツ。呪力のこもった獅子王機関の暗殺装備だ。

紗矢華はくるりと手首を回して、その切っ先を古城の後頭部へと向ける。

そんなものを延髄に突き立てられたら、いかな吸血鬼といえども、ひとたまりもない。

しかし紗矢華は、凶器を振り下ろす手を途中で止めた。ほんの一瞬、彼女自身の意思で精神支配に逆らうかのように、ダーツを手放し、古城に体重を預けてくる。

「あ……」

紗矢華の唇から甘い吐息が洩れ出した。

彼女の柔らかな体温を感じながら、古城はとまどい揺れる紗矢華の身体を抱き支える。

空はいつの間にか仄かに白みはじめていた。

血まみれで抱き合う二人の姿を、朝焼けの空が静かに照らし出している。

4

夜明け前の大気に、魔力の残滓が充満していた。

紗矢華が放った雷撃呪術を、古城が眷獣を喚び出して防いだ名残である。

クスキエリゼの社用車は、コテージから少し離れた海辺の道路に停まっている。搭載された無人運転装置が、落雷の影響を感知して緊急停止したのだ。妃崎霧葉が、莉琉を連れて車から降りてくる。車での移動を諦めて、徒歩でクスキエリゼに向かうことにしたのだろう。

だが、莉琉の手を引いて歩き出す前に、霧葉は立ち止まって顔を上げる。

彼女が視線を向けた先には、銀色の槍を構えた雪菜の姿が合った。

「――結瞳ちゃんを、返してもらいます」

霧葉を睨んで、雪菜が告げる。

わお、と愉しそうに呟いて、霧葉を見上げたのは莉琉だった。

霧葉は嘆息混じりに首を振り、肩に背負っていたケースから槍を引き抜いた。音叉のように

二叉にわかれた、鉛色の双叉槍である。

「わからないわね、姫柊雪菜。あなたには、莉琉を連れ戻す理由はないのではなくて？」

静かな声で霧葉が訊いた。

剣巫である雪菜の任務は、第四真祖――暁古城の監視だ。たとえ江口結瞳が何者であったとしても、雪菜には彼女を連れ戻す権利がない。が、

「洗脳した紗矢華さんに暁先輩を襲わせただけでも、私があなたを敵と見なすのには、十分な理由だと思いますけど？」

雪菜は穏やかに反論する。彼女の監視対象である古城を、霧葉は間接的に傷つけようとした。詭弁だが、それは雪菜が霧葉と戦ういちおうの根拠にはなるはずだ。

「莉琉と第四真祖を接触させたくなかったの。彼はあまりにも危険すぎる不確定要素だから」

やれやれと首を振りながら霧葉が答えた。

彼女たちの後方から、巨大な破壊音が聞こえてきたのはその直後だ。未明の空へと立ち上っていくのは、爆煙にも似た銀色の霧。古城が、第四真祖の眷獣を使ったのだ。

「彼らの様子、見に行かなくてもいいの？」

揶揄するような口調で、霧葉が訊く。しかし雪菜は、表情を動かさずに首を振り、

「紗矢華さんなら大丈夫です。先輩も、たぶん」

「……第四真祖のことを信頼してるのね。少し意外」

霧葉が訝しげに眉を上げた。そして彼女は、失言した、というふうに首を振り、

「ああ、勘違いしないで欲しいのだけど、第四真祖には興味はないの。あなたが彼を監視していることは知ってるけれど、それを邪魔するつもりはないわ。この件に第四真祖を巻きこんだのは、私ではなく煌坂紗矢華よ」

「結瞳ちゃんを連れ戻して、クスキエリゼは彼女になにをするつもりですか。どうして太史局が彼らの手伝いを？」

霧葉の言い訳を無視して、雪菜が訊く。

太史局は、獅子王機関と同じく内務省傘下の特務機関だ。今回の事件に彼らが絡んでいたということならば、獅子王機関が、表だって結瞳の保護に動けなかった理由もわかる。

太史局が政治的に圧力をかけて、獅子王機関を抑えていたのだろう。

ふふ、と勝ち誇ったような表情で、霧葉が笑う。

「クスキエリゼは法的に承認された江口結瞳の保護者よ。そして彼女は、自らの意思でそこに戻ろうとしている。獅子王機関といえども、それを止める権利はないはずよ」

雪菜は、そんな霧葉に屈服するように小さくうなずいて、

「そうですね。結瞳ちゃんが、本当にそれを望んでいるのなら、ですけど――！」

「うっ!?」

雪菜が前触れもなく地面を蹴って、銀色の槍を霧葉へと叩きつけた。

それを咄嗟に双叉槍で受け止めて、霧葉は乱暴に舌打ちする。
雪菜の目的が霧葉ではなく、彼女の持っている槍だということに気づいたのだ。
霧葉の双叉槍に激突して、雪菜の槍が純白の輝きを放つ。
それは神格振動波――魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く破魔の輝きだ。キン、と耳障りな騒音を撒き散らし、双叉槍が帯びていた魔力が消滅する。
「さすがに厄介な装備ね、獅子王機関の七式突撃降魔機槍――」
強引に雪菜を押し返して、霧葉が獰猛に微笑んだ。
「……いつから、この槍の正体に気づいていたの？」
「最初からです。莉琉の人格が目覚めた直後にあなたたちが現れたのは、あまりにもタイミングが良すぎましたから」
着地した雪菜が、再び槍を構えて霧葉を見る。
結瞳の中に眠っていた莉琉の人格は、深夜に突然覚醒した。
別人格が目覚めるきっかけとなる、刺激や体験がなかったにもかかわらず、だ。
だとすれば考えられる可能性はひとつだけ――
誰かが外部から結瞳の精神を支配して、強制的に莉琉を目覚めさせたのだ。
「太史局の乙型呪装双叉槍……莉琉の人格を覚醒させたのも、紗矢華さんに暗示をかけたのも、その槍の能力だったんですね」

雪菜はそう言って、霧葉の槍を冷たく睨む　乙型呪装双叉槍　それは獅子王機関とは異なる技術体系によって生み出された調伏兵器だ。
その能力は、蓄積した魔力を増幅し、そして使い手の意思に応じて放出すること――
それによって双叉槍の使い手は、人間には使えないはずの特殊な能力や、膨大な魔力を操ることができるようになる。乙型呪装双叉槍は、いわば魔力を模倣する武器なのだ。
「あなたは莉琉の――いえ、結瞳ちゃんの夢魔としての魔力をあらかじめその槍に蓄えていた。その能力を使って逆に結瞳ちゃんを、莉琉として覚醒させたんですね」
「正解よ。まさか、こんな形で、せっかく蓄えた魔力を消滅させられるとは思わなかったけど」
悪びれない口調で、霧葉が言った。
魔力を操る乙型呪装双叉槍にとって、その魔力を無効化する雪菜の〝雪霞狼〟は天敵ともいえる存在だ。蓄積した魔力が消失したことで、霧葉の術はすでに破れている。
「雪菜お姉さん――!?」
本来の人格に戻った結瞳が、助けを求めるように雪菜を呼んだ。
槍を構えている雪菜を見ても、それほど驚いていないのは、莉琉として過ごしていた間の記憶が残っているからなのかもしれない。
ともあれ状況は変化した。今の結瞳は、もうクスキエリゼへの帰還を望んでいない。
それでも強引に結瞳を連れ去ろうとするのなら、霧葉は単なる誘拐犯だ。獅子王機関の任務

とは無関係に、雪菜は結瞳を助けることができる。
「これであなたを止める理由ができました。それともこのまま立ち去りますか、六刃？」
雪菜が霧葉に警告する。立場が逆転してしまったことは、すでに霧葉も理解しているはずだ。
霧葉がこれ以上ここに留まり続ければ、太史局の面目をも潰すことになる。
それでも霧葉は、ヒュン、と槍を無造作に旋回させて、
「できれば仲良くしたいというのは、本音だったのだけど、仕方ないわね……獅子王機関との協定違反だけど、現場の判断ということで大目に見てもらいましょう――！」
「っ！」
颶風と化して繰り出されてきた双叉槍を、雪菜が銀色の槍で受け止める。
霧葉の槍に充填されていた魔力は残っていないが、武器としての機能までもが失われてしまったわけではない。そして雪菜の〝雪霞狼〟は、魔力を伴わない攻撃に対しては特別な効果を発揮しない。二人の装備は互角なのだ。
「乙型呪装双叉槍の能力を封じただけで勝ったと思っていたのなら、甘くてよ！」
「……く！」
霧葉の凄まじい連続攻撃に、雪菜は防戦を余儀なくされる。獅子王機関の剣巫と、太史局の六刃の源流は同じ。二人が使う技はよく似ていた。
それだけに使い手の技量の差が、戦況の優劣となってくっきりと現れる。

才能はあっても、雪菜には圧倒的に実戦経験が足りない。体格面の不利も否めない。対魔獣戦闘のエキスパートである六刃の攻撃は、一撃一撃が重く、速い。雪菜の小柄な身体では、容易くガードごと吹き飛ばされてしまうのだ。

だが、焦りの表情を浮かべていたのは、雪菜ではなく、攻めている霧葉のほうだった。

霧葉の必殺の攻撃が、雪菜には当たらない。

獅子王機関の剣巫は、一瞬先の未来を視る。それは太史局の六刃も同じだ。しかし、先読みで雪菜はことごとく霧葉の上を行く。

雪菜の霊視能力が、霧葉のそれを圧倒しているのだ。

「さすがは、獅子王機関が、第四真祖の監視役に選んだ人材ということね……見た目の良さだけが取り柄の乳臭いお子様だと思ってたけど、ふふ……そうでなくてはねぇ――！」

あははははは、と霧葉が猛々しく笑い出す。上品ぶっていたメッキが剝がれて、嗜虐的で好戦的な彼女の本性が洩れ出しているのだ。

「鳴雷――！」

霧葉は、力任せの一撃で雪菜の姿勢を崩し、そこに強烈な膝蹴りを叩きこんだ。呪力のこもった対魔獣用の打撃技だ。普通の人間がまともにくらえば、内臓破裂は免れない。

だが雪菜は、その容赦ない一撃をかわして、逆に霧葉の懐へと潜りこむ。

「響よ！」

雪菜が放ったのは、零距離からの内臓破壊攻撃だった。霧葉は自ら背後へと吹き飛んで、唸にその衝撃を受け流す。

「霧豹・双月々！」

霧葉が突き出した乙型呪装双叉槍の二本の刃が、互いに共鳴して、破壊的な音波を撒き散らした。魔力を増幅する槍が霧葉の呪力を増幅し、強力な攻撃呪法として撃ち出したのだ。

「っ!?」

「雪菜お姉さん――!?」

破壊音波に巻きこまれた雪菜を見て、結瞳がたまらず悲鳴を上げた。

しかし雪菜は倒れない。彼女が構えた銀色の槍が輝きを放ち、呪力によって生み出された破壊音波を斬り裂いている。そして、

「雪霞狼々！」

螺旋を描いて突き出された雪菜の槍が、霧葉の双叉槍を弾き飛ばした。

呪力をごっそりと削り取られて、霧葉は苛立たしげに後退する。咳きこむ彼女の唇からこぼれたのは鮮血だ。雪菜の寸勁の威力を、完全には殺しきれていなかったのだ。

「血……私の、血……！」

濡れた唇を掌で乱暴に拭って、霧葉が興奮したように息を吐く。

紅く染まった掌を見る彼女の瞳には、陶酔したような表情すら浮かんでいる。

「さすがに、対人戦闘では分が悪いわね。獅子王機関の剣巫とやり合うのがこんなに刺激的だとは思わなかった。時間切れが勿体ないわ。そう思わなくて？」

「時間切れ……？」

霧葉が突然口にした言葉に、雪菜はかすかな戸惑いを覚えた。

その雪菜の横顔を、眩い輝きが照らし出す。

道路の先に広がる水平線を、朝陽が白く染めていた。夜が明けようとしているのだ。

霧葉が戦意をなくしたように、槍を下ろした。

その直後、増設人工島ブルーエリジアムを襲ってきたのは、大地を震わすほどの爆発的な魔力の波動だった。

「――っ!?」

あまりの衝撃に耐えかねて、雪菜が膝を突く。昨日〝魔獣庭園〟で雪菜たちが感じたものと同じだ。だが、それと比較しても、魔力の密度が上がっている。

「この波動……いったい、なにが……!?」

雪菜は驚いて海を眺める。魔力波動の発信源は海底だ。ブルーエリジアムからも遠く離れた海の底から、膨大な魔力が無目的に放出されている。

もしも雪菜に軍事の知識があったなら、その魔力波動が、軍用潜水艦の放つ探信音に似ていたことに気づいただろう。水底に潜む何物かが、敵の位置を知るために探査用の魔力波動を放っているのだと――

「我が影は、霧にして霧に非ず、刃にして刃に非ず――！　斬れば夢幻の如く、啼哭は災禍を奏でん！」

雪菜が魔力波動に気を取られた一瞬の隙を衝いて、霧葉が祝詞を詠唱した。

流しこまれた膨大な呪力を、乙型呪装双叉槍が増幅し、衝撃波の刃を形成する。

雪菜もすぐに〝雪霞狼〟を構える。だが遅い。その前に霧葉の攻撃が、雪菜を横薙ぎに襲ってくる。衝撃の刃が大気を抉る。

防御が間に合うタイミングではなかった。

しかし驚きに低くうめいたのは、雪菜ではなく、攻撃を仕掛けた霧葉のほうだった。

「結瞳……ちゃん……？」

「莉琉？」

雪菜たちが、同時に違う少女の名前を呼ぶ。

霧葉の攻撃を受け止めていたのは、雪菜を庇うように展開した黒い翼だった。

魔力で紡がれた幻影の翼。それを広げていたのは結瞳だ。莉琉ではなく、自ら夢魔の力を引き出した結瞳が、自分自身の意思で雪菜を守ったのだ。

「やめて、ください。霧葉さんも、雪菜お姉さんも」

引き裂かれたサマードレスの襟元を押さえて、結瞳は寂しげに微笑んだ。

そして彼女は雪菜たちに背を向け、夜明けのブルーエリジアムへと目を向ける。
運河の向こう側に見えるのは〝魔獣庭園〟――クスキエリゼの研究所だ。
「もういいんです……わたしが、全部終わらせますから……」
そう言って、結瞳が黒い翼を羽ばたかせる。彼女の小柄な身体は音もなく空へと舞い上がり、そのまま滑るように飛び去っていった。
「……結瞳ちゃん……どうして⁉」
一瞬で取り残された雪菜には、なにが起きているのかわからない。
クスキエリゼから逃げ出してきたはずの結瞳が、なぜ急に心変わりをしたのか。
海底から放たれた、あの魔力波動はなんなのか――
その答えを知っているはずの霧葉も、なぜか少し不満げな表情を浮かべて、結瞳が飛び去っていった空を見上げている。
雪菜も霧葉も、互いに油断なく身構えてはいたが、すでに戦う理由は失われていた。
結瞳はもういないのだ。
「藍羽……浅葱……」
双叉槍を下ろした霧葉が、雪菜の背後へと視線を向けて、ぽつりと呟いた。
近づいてくる足音に気づいて、雪菜も振り返る。サンダル履きの浅葱が息を弾ませながら、雪菜たちのほうへと駆け寄ってくるところだった。コテージで意識を取り戻した浅葱が、古

城たちの不在に気づいて探しに来たのだ。
「――姫柊さん。なにがあったの？　結瞳ちゃんは？」
「藍羽先輩、駄目です！　来ないでください！」
霧葉の動きを警戒して、雪菜が叫んだ。その声に驚いて、浅葱が足を止める。
しかし霧葉は、浅葱をつまらなそうに一瞥しただけだった。
彼女の瞳に浮かんでいたのは、浅葱に対する哀れみと侮蔑の感情だけだ。
「そう……あなたが、カインの巫女……」
「誰よ、あなた……？」
憎悪にも似た視線を向けてくる霧葉を、浅葱が不愉快そうに睨み返す。
霧葉は、殺意に駆られたように強く槍を握ったが、すぐに思い直したように首を振り、
「あなたを責めるのは、筋違いだったわね。でも、ごめんなさい。悪く思わないで――」
さよなら、と言い残して、霧葉は雪菜たちに背を向けた。
そのまま無言で立ち去る彼女を、雪菜は為すすべもなく見つめていた。

5

コテージの庭があったはずの場所は、悲惨な姿に変わっていた。

巨大なスコップで掘り返したように地面がごっそりと陥没し、剝き出しになった人工島の構造材が、海水の中に沈んでいる。街灯も、ラバーチップを敷き詰めた道路も、ガードレールも、すべて跡形もなく消え去って、斜めに傾いた緑の芝生を、打ち寄せる波が洗っていた。

誰の仕業かは、考えるまでもなくわかっていた。古城が眷獣を使ってやったのだ。

紗矢華一人の精神支配を解くために、どうしてこんな凄まじい破壊を撒き散らさなければならないのだろう、と雪菜は思わず目眩を覚える。

「先輩!?」

海に沈みかけた芝生の先端。波打ち際のようになっている場所に、互いにもつれ合うような形で一組の男女が倒れていた。一人はポニーテールの少女。そしてもう一人は裸足にTシャツ姿の少年だ。死んだように眠り続ける二人の全身は血まみれである。

「ちょっ……なによこれ……!? 心中未遂!?」

事情を知らない浅葱が、青ざめた顔で二人に駆け寄る。

言われてみれば、紗矢華の右手には血に濡れた長剣が握られて、古城の腹には刺されたような跡が残っていた。痴話喧嘩の末に女が男を刺して、そのまま心中を図ったとしか思えない光景だ。

「古城、しっかりしなさいよ！ 煌坂さんも……いったいなにがどうなってるわけ!?」

紗矢華と重なりあっている古城の身体を、浅葱が無理やり引っぺがす。そのまま引きずるようにして、海に沈みかけていた二人を地上に運んでいると、

「痛ェな……くそ。あんまり揺らすなよ、こっちは腹に穴が空いて死にかけてたんだから」

どうにか意識を取り戻した古城が、かすれた声で抗議した。

浅葱は思わず紅く染まった古城のTシャツを覗きこんで、

「……は!? 腹に穴って……え!?」

「紗矢華さん、気分はどうですか？ 怪我は？」

一方、雪菜は倒れていた紗矢華に呼びかける。彼女に目立つ怪我はなかった。ただスクールシャツの襟元だけが不自然に大きくはだけている。

紗矢華の細い首筋に残るキスマークに似た出血の跡に気づいて、雪菜はムッと眉を寄せた。

「雪菜……？」

ぼんやりとした表情で紗矢華が目を開ける。

視界に映る雪菜を見上げ、紗矢華は、自分が夢を見ているのかと疑うように小首を傾げた。

「気がつきましたか、紗矢華さん」

「ここ、どこ？ 私は、クスキエリゼであのいけ好かない六刃の女に会って、それから――」

頼りない声でそう呟いて、紗矢華はハッと真顔に戻った。

「暁古城は!? 無事なの!? 〝煌華麟〟で思いっきり胴体をぶち抜いちゃったんだけど！」

「胴体を、ぶち抜い……!?」

紗矢華の壮絶な告白に、さすがの雪菜も絶句した。腹に穴が空いて死にかけたという古城の言葉に、誇張や脚色はなかったらしい。

戦闘の素人である古城が、紗矢華の動きを止めるには、それくらいの代償は必要なのだと理屈ではわかる。だが、どうして自分が目を離したときに限って、そんな無茶をするのだ――と、憤りすら感じてしまう雪菜である。

「……なんだ、操られてた間の記憶もちゃんと残ってるんだな」

雪菜の内心の葛藤も知らず、起き上がった古城が、呑気な声で紗矢華に呼びかける。

喋るたびに痛みに顔をしかめているものの、負傷の影響はそれほどでもなさそうだ。吸血鬼の真祖が持つ、超回復力の賜物だろう。

紗矢華は涙目になりながら、血で汚れた自分の右手と、古城の顔を交互に見比べて、

「あ、暁古城。私……その……」

「あー……いいから、心配すんな。俺が自分からやったことだし、もう傷はだいたい塞がってるから。それに流したぶんの血は、おまえに返してもらったしな」

「う、うん……」

悄然とうなだれながら、自分の首筋を押さえる紗矢華。

彼女の頬が照れたように赤らんでいるのは、朝陽を浴びているせいだけではないだろう。

古城を傷つけた罪悪感のせいか、妙にしおらしい紗矢華の態度に、古城も少し照れたように

目を逸らし、

「ていうか、煌坂。その服、どうにかしてくれ。目のやり場に困る……」

「……へ!?」

指摘されて初めて、紗矢華はシャツの襟元がはだけていたことに気づいたらしい。下着まであらわになった胸元を慌てて隠して、ぎゃあああ、と絞め殺されたような絶叫を上げる。

浅葱はしばし無言で、そんな古城と紗矢華の甘ったるいやりとりを眺めていたが、

「なるほどね……どうしてこういう状況になってたのか、だいたいの事情はわかったわ」

「わたしたちが目を離した、あの一瞬に紗矢華さんの血を吸うなんて、さすがですね、先輩。もしかして、わたしに結瞳ちゃんのあとを追わせたのは、それが目当てだったんですか？」

雪菜も同じように寒々しい視線を古城に向けてくる。

その間、紗矢華はその場に膝を抱えて座りこみ、

「見られた……よりによって雪菜の前で……もう死にたい。いっそ殺して……」

どんよりと暗いオーラを撒き散らしながら、ぶつぶつと独り言を繰り返していた。

全員に非難されているような気配を察して、古城はうろたえながら周囲を見回し、

「え？　あれ？　なんで俺が悪いみたいな話になってんだ？　煌坂を助けてやったんだろ？」

「それよりも、先輩……結瞳ちゃんのことですけど」

緊張感のない古城の態度に落胆したような表情を浮かべて、雪菜が一方的に話題を変えた。

「……連れ戻すことができませんでした。すみません」
「そうか……やっぱり、あの莉琉って人格をどうにかしないとな……」
古城は悔しげに頭をかく。莉琉は自らの意思でクスキエリゼに戻ろうとしていた。連れ戻せなかったからといって、雪菜を責めるわけにはいかない。
しかし雪菜は、唇を強く噛んで首を振り、
「結瞳ちゃんの意識を取り戻すことはできたんです。でも、そのあとに海の底から強い魔力の干渉があって、結瞳ちゃんは急に、自分が全部終わらせるから、って――」
「……魔力の干渉？」
古城は困惑して訊き返す。
結瞳が稀少な魔族だという理由で、クスキエリゼが彼女を欲しがるのはわかる。
しかし海から伝わってきた魔力とやらが、どう関係しているのかよくわからない。それに、全部終わらせるとは、どういう意味なのか――
「もうそんな段階まで来ていたの……なんてこと……!?」
沈黙する古城たちの前で、紗矢華が焦ったようにそう呟いた。古城たちは驚いて振り返り、
「紗矢華さん？」
「あの霧葉って女の目的を知ってるのか、煌坂？　だったら説明してくれ。こっちはさっぱり事情がわかってないんだよ。クスキエリゼは結瞳をどうするつもりなんだ？」

「え……と、それは……」
雪菜と古城に勢いよく詰め寄られ、紗矢華は一瞬、困ったような表情を浮かべた。舞威媛の任務に関わる内容だけに、古城たちに教えていいものかどうか迷ったのだろう。
だがしかし、ここまで巻きこんでしまった以上は仕方ないと開き直ったのか、紗矢華は諦観したように息を吐き、
「江口結瞳の役目は、生贄よ」
「……生贄？」
「クスキエリゼの久須木会長は、夢魔種族の精神支配能力を使って、海底に沈んでいる生体兵器を操るつもりなのよ。そのために選ばれた生贄が、江口結瞳。彼女は〝夜の魔女〟リリスの後継者――つまり、世界最強の夢魔だから」
「世界最強の……夢魔？」
現実感のない紗矢華の言葉に、古城が間の抜けた声を出す。雪菜や浅葱も絶句している。
しかし紗矢華の言葉を否定する者はいなかった。
いくら馬鹿馬鹿しく思えても、世界最強の吸血鬼などと呼ばれている非常識な事例が目の前に存在しているのだ。ならば世界最強の夢魔がいてもおかしくはない。
「海底に沈んでる生体兵器って、こないだの古代兵器みたいなやつのこと？」
ふと思い出したように浅葱が訊いた。彼女は数カ月前のテロ事件で、絃神島に上陸した

古代兵器を目撃している。どうにか最小限の被害で抑えたものの、古代兵器の戦闘能力は驚異的だった。危うく絃神島全域が焦土と化す寸前だったのだ。

もしもその古代兵器に匹敵する生体兵器が、海底に眠っているのなら、それを手に入れたいと願う者が出てきてもおかしくはない。ましてやそれが、魔獣の生態を研究している企業の親玉ともなれば、尚更だ。

だが、紗矢華は、瞳に隠しきれない恐怖の色を浮かべて首を振る。

「違うわ。古代兵器を作ったのは、〝天部〟よ。いわゆる古代超人類ってやつ。現代の科学力を凌ぐ文明を誇っていたのかもしれないけど、しょせんは人間だわ」

そして紗矢華は、夜明け直後の海を睨んで声を震わせた。

「だけど、あの生体兵器は違う。あれは神話の時代の怪物よ。人類が制御できる代物じゃない」

「だから、結瞳ちゃんを生贄に……？」

雪菜が自問するように呟いた。浅葱も、皮肉っぽく肩をすくめて嘆息し、

「昔から、怪物の怒りを鎮めるのは生贄の乙女って相場が決まってるものね」

「いったい何物だよ、その怪物ってのは――？」

古城が紗矢華を睨んで訊く。

いじけたようにそんな古城を見返して、紗矢華は、どこか投げやりに告げた。

「名前くらいは、あなただって知ってるかもね」

「え？」

「聖書にも記された海の怪物。〝嫉妬〟の蛇。神々が造り出した最強の生物――」

「――レヴィアタン、よ」

1

〝魔獣庭園〟の中央部。海に面した岬の突端に、クスキエリゼの研究施設が建っている。銀色の巻き貝を地面に埋めこんだような、未来的なシルエットの建物だ。

海側には船を接岸するためのバース設備が整備されており、クスキエリゼ所有の船舶が四隻泊まっていた。そのうちの二隻は、魔獣や魔獣用の飼料を運ぶための輸送船。一隻は紘神島本島との連絡に使用する高速船だ。そして最後の一隻は、純白に塗られた奇妙な潜水艇だった。イトマキエイを膨らませたような奇妙なシルエット。船体は分厚い金属で覆われ、船尾には巨大な推進スクリューが二基搭載されている。本来は軍用として試作された小型潜水艇を、クスキエリゼが買い取ったものだ。

偵察用として開発された船体は全長十五メートル足らず。三人乗りのコックピットは狭い。その窮屈な操縦席の奥には、棺桶に似た形の透明な水槽が、垂直に設置されている。

青色の液体を満たした水槽の中では、水着に似た服を着た江口結瞳が目を閉じていた。

「これが〝LYL〟か。意外に小さいものだな」

水槽の周囲を埋め尽くす機械を眺めて、久須木和臣が呟いた。その中に埋めこまれた結瞳の姿に気づいても、彼は無関心に目を細めただけだ。

『正確には〝LYL〟の一部　制御モジュールて候』

整備用クレーンの上に立つ久須木の背後から、スピーカー越しの声が聞こえてくる。

電子的に合成された野太い男性の声だ。時代がかった言い回しの端々に、外国人風の訛りが少し残っている。

ゆっくりと振り返る久須木の視界に映ったのは、全身を赤い装甲で覆った奇妙な乗り物だった。リクガメに似たずんぐりとした金属の塊に、太くて短い四本の脚が生えている。対魔族戦闘用の試作兵器。市街戦用の超小型有脚戦車である。

『〝蛇〟の制御に必要な演算は、この研究所のメインフレームで行いまする。潜水艇の貧弱な電源では、必要な規模のシステムを運用できませぬし、不慮の事態にも対応できませぬ故』

「妥当な判断だな。システムの改良が進めば〝蛇〟の単独運用も出来ようが」

有脚戦車の操縦者の言葉に、久須木は表情も変えずにうなずいた。

この戦車の中に引き籠もっているのは、通称〝戦車乗り〟と呼ばれる凄腕のハッカーだ。クスキエリゼが〝LYL〟と名づけた、特殊なシステムを構築したのも、彼女だった。

姿は奇怪だが、彼女のプログラマーとしての実力は本物だ。そして部下として有能であるのなら、久須木は彼女の見た目になど興味はない。

「江口結瞳はどうなっている？　眠らせたのか？」

ようやく水槽の中の結瞳について、久須木が訊く。〝戦車乗り〟は無数のケーブルを潜水艇

に接続したまま、ゆっくりとカメラを旋回させて、
『半覚醒状態でありますな。リリス殿が意識をなくしては魔力の供給が失われてしまいます故。すなわち今の彼女は夢を見ておられるのでござる』
「……なるほど、夢魔だけに、か」
そう呟いて、久須木はつまらなそうに鼻を鳴らした。
「世界最強の夢魔が、こんな子どもというのも皮肉な話だな。このような娘を生贄にするのを、心苦しく思わないわけでもないが――」
『ですが、これはリリス殿が自ら望んだことでありましょう。そのために〝LYL〟は生み出されたものでありますので』
〝戦車乗り〟が仰々しい口調で告げる。
「そうだったな。ではせめて、彼女の犠牲を無駄にしないよう心がけようか」
久須木は、そう言って不敵に唇を吊り上げた。
その直後、久須木たちの傍に、クスキエリゼの若いスタッフが駆け寄ってくる。タブレット型の端末を抱えた彼の表情は、どことなく恐怖に引き攣っているようにも見えた。
「会長 ― 〝蛇〟の位置、補足できました。紘神島本島の南西、四十海里付近。深度約四百メートルだそうです」
『計画どおりでござりますな』

役目を終えたケーブルを引き抜きながら、〝戦車乗り〟が豪快に笑ってみせる。
久須木もうっすらと微笑みながら、水槽の中の結瞳を見下ろして、
「やはりリリスに誘惑されたか。神々の時代の生体兵器などと呼ばれていても、しょせん魔獣だな。もっともそうでなくては困るが」
「へ、〝蛇〟の推定移動速度は毎時十六ノット。このままでは、三十分以内に沿岸警備隊の警戒網に捕捉される恐れがありますが――」
「問題ない。〝ヨタカ〟の出港準備は済んでいるな？」
不安げなスタッフの忠告を一蹴して、久須木は純白の潜水艇へと飛び移った。〝ヨタカ〟とは久須木が名づけたその潜水艇の名前である。
『モジュールの起動が終わり次第、何時でも』
〝戦車乗り〟はそう言って、最後のケーブルを引き抜いた。
潜水艇の整備ハッチが閉ざされ、コックピット内に照明が灯る。水槽の中に気泡が浮いて、水着に似たぴったりとしたスーツを着た結瞳が苦しそうに身じろぎした。彼女を包みこむように配置された機械が、低い唸りを上げて動き出す。
「本当に自ら搭乗されるおつもりですか、会長？　十分な安全確認が、まだ――」
「それは研究所に残るきみたちも同じことだろう？　四十海里の距離など、やつにしてみれば目と鼻の先だ」

呼びかけてくるスタッフに、久須木は穏やかに笑いかけた。
「それに、王には王に相応しい乗騎というものがある。城の中に引き籠もっている支配者に、民衆を熱狂させることはできんよ」
『相違ありませぬな』
芝居がかった久須木の言葉に、〝戦車乗り〟が機嫌よく応じる。
久須木は、そんな有脚戦車を一瞥し、それから接岸バースの奥へと視線を向けた。潜水艇に乗りこむ久須木を見守るように、若い女が立っている。
長い黒髪に黒い制服。妃崎霧葉だ。
「――きみたちの協力には感謝している。無事に〝蛇〟を手懐けることができれば、恩に報いることもできよう」
演説する独裁者のような口調で、久須木が告げた。
呵々、と〝戦車乗り〟が機体を揺する。
『気遣いは無用でござるよ、会長殿――拙者には拙者の思惑がありますゆえ』
「正直だな。そう言ってくれれば、むしろ信用もできるが」
満足そうにうなずいて、久須木は潜水艇の中へと入った。分厚い二重ハッチが閉ざされて、狭いコックピットを静寂が満たす。操縦席正面のメインモニタに映し出されたのは、海中の状態を再現した立体映像だ。その中心部を悠然と泳ぐ巨大な影がある。

純白の潜水艇が潜行を始めた。久須木の視界が青く染まる。
海中の美しい光景を眺めながら、久須木は獰猛に笑って独りごちる。
「では、行こうか、魔獣の王よ。かつての〝忘却の戦王〟に倣って、力を示せ。思い上がった人類に鉄槌を――」

2

カーテンを閉め切ったコテージの女子部屋。二台並んだベッドの真ん中で、藍羽浅葱がモバイルPCを開いている。彼女の肩越しに画面を覗いているのは古城だった。その両脇を雪菜と紗矢華が固めている。
同世代の少女たちに囲まれているにもかかわらず、まったくトキメキが感じられないのは、沿岸警備隊の管制室をハッキング中という、殺伐としたシチュエーションのせいだろう。
「いたわ……たぶんこれよ。レヴィアタン」
対潜哨戒機からの通信を傍受して、浅葱が言う。映し出されているのは、魚群探知機の映像に似たオレンジや緑の斑模様である。
古城は、首を捻りながらそれをしばらく眺めて、
「わかりにくいな、この映像。どこにいるんだ？」

「だから、これだってば。ここからここまで全部レヴィアタン」
「は？」
浅葱が指で示した部分を眺めて、古城はぽかんと目を丸くした。周囲の地形とそれを見比べ、映像に示された数字を何度も確認する。
「いや、だってそんな……デカ過ぎだろ!?　何メートルあるんだ!?」
「大雑把な予想で、全長四キロちょいってとこね。これでも伝説の〝海の怪物〟としては意外に小さいのかもしれないけど」
浅葱がドライに割り切った口調で告げてくる。デジタル人間の浅葱にしてみれば、どんなに無茶な数字でも、データとして示されている以上は受け容れざるを得ないのだろう。
さすがの雪菜も、困惑の表情で浅葱を見つめて、
「本当にこれが生き物なんですか？」
「世界最強の魔獣ってのも伊達じゃないわね。空母だろうが原潜だろうが目じゃないわ」
浅葱が投げやりに肩をすくめてみせた。
その言葉を補足するように、紗矢華が渋々と口を開く。
「レヴィアタンは、超古代――神々の時代の生体兵器よ。前から存在だけは確認されてたんだけど、幸い今までは休眠状態で、龍脈に沿って深海の底を漂ってるだけだったの。たまに運の悪い船が沈没させられるくらいで、自分から人類を襲うようなことはなかったんだけど」

「クスキエリゼの会長ってのは、そいつを飼い馴らそうとしてるのか　？」
「そうよ。江口結瞳の中に眠っていたリリスの力を使ってね」
占城の質問に、紗矢華がうなずく。その表情はどこか苦々しげだ。結瞳の保護という任務を果たせなかったことに、責任を感じているのだろう。
「リリス……世界最強の夢魔、って言ったよな？」
古城が硬い表情で訊き返した。
夢魔という魔族が存在することは知っていたが、〝魔族特区〟に済む古城ですら、実際に出会ったのは初めてのことだ。世界最強の夢魔といわれても、具体的なイメージがほとんど湧かない。それは浅葱や雪菜も同じだろう。
「夢魔というのは、それほど強力な魔族ではないの。彼らの精神支配が及ぶのは睡眠中などの無防備な相手だけだから。それに人間との交雑が進んで、純血の夢魔なんて、ほとんど残っていないしね」
なんだかんだで人の好い紗矢華が、懇切丁寧に説明してくれる。
純血の夢魔が残っていない、ということは、結瞳も人間との混血種なのだろう。彼女が魔族だということに、古城たちが気づかなかったのも無理はない。
「ただ、力が弱いといっても例外があって、凄まじく強力な精神支配力を持った夢魔が、ごくたまに現れるの。その代表的な存在が――」

「リリス、か」

ええ、と紗矢華は重々しくうなずいた。

「夢魔という種族は、吸血鬼みたいに不老不死ではないから、転生という形で力を引き継ぐの。先代のリリスが死んだあと、次の世代のリリスが世界のどこかで誕生する。リリスの器の適性を持っていた江口結瞳は、偶然、それを引き当ててしまったってわけ」

「普通の人間として暮らしてたのに、ある日突然、世界最強の夢魔として覚醒したってわけか」

他人事とは思えんな、と古城が唇を噛む。いきなり世界最強の吸血鬼などという体質を押しつけられた古城にしてみれば、結瞳に親近感を抱かずにはいられない。

ましてや結瞳はまだ小学生だ。本人の動揺は古城よりも遥かに深刻だったはずだ。

「当然ショックだっただろうし、両親との軋轢もあったみたいね。ちょっとした虐待があったことも報告されてるわ」

「そうか……それでクスキエリゼが結瞳を引き取ることになったんだな」

ようやく納得の表情を浮かべて古城は呟いた。

昨日、古城たちと出会って依頼、結瞳は一度も両親のもとに帰りたいと言わなかったのだ。だが、今なら彼女のその態度も腑に落ちる。

「結瞳ちゃんの能力が、レヴィアタンを制御するのに有効だってことを、クスキエリゼは最初

から知ってたわけ？」

不興げに眉を寄せて浅葱が訊く。もしもクスキエリゼがそれを知っていたのなら、彼らは、最初からレヴィアタンの生贄にするために結瞳を引き取ったことになる。が、

「それはどうかしらね」

紗矢華は、意外にも冷静に首を振った。

「夢魔は迫害されやすい魔族だから、クスキエリゼは彼らの保護活動に出資してるの。夢魔の能力は魔獣を飼い馴らすのにも有効だから、将来的にはクスキエリゼの社員や〝魔獣庭園〟の職員として雇うこともできるし」

「実益を兼ねた社会貢献ってところか……わりとまともな話に聞こえるな」

古城は軽く戸惑いながら呟いた。

夢魔を保護することでクスキエリゼの企業イメージは向上し、しかも有能な職員を確保することができるようになる。夢魔にとっても、大企業による援助は歓迎すべきことだろう。

おそらく両者は、これまで良い共存関係を築いていたのだ。

レヴィアタンなどという存在さえ絡んでこなければ――

「クスキエリゼは結瞳ちゃんがリリスだったから保護したわけじゃない、ってこと？　それどころかリリスだってことに途中まで気づいてなかった可能性もある……？」

浅葱が真剣な表情で考えこむ。紗矢華の説明が真実なら、結瞳がクスキエリゼに保護された

のは単なる偶然だ。今回の事件とはつながらない。

「考えてみれば、魔獣の調教に夢魔の力が有効だからといって、その力を使ってレヴィアタンを制御しようとは普通は考えないわよね。さすがに飛躍し過ぎてる……つまり誰かがクスキエリゼの偉い人に吹きこんだわけね。リリスとレヴィアタンの関係を――」

「結瞳を使ってレヴィアタンを飼い馴らせと、そそのかしたやつがいるってことか」

古城が驚いて浅葱を見る。ハッと息を呑んだのは雪菜だった。

「もしかして、太史局が――」

太史局の六刃――妃崎霧葉。クスキエリゼを扇動し、この状況を仕組んだのが、ほかならぬ彼女たちだった。そう考えれば、霧葉が、結瞳を連れ戻そうとした理由もわかる。

「……リリスとレヴィアタンは、ともに七つの大罪の象徴よ。そして両者はいずれも〝蛇〟と関係が深い。楽園で女を誘惑した〝蛇〟は、リリスであるともレヴィアタンであるともいわれている――真実はどうあれ、彼らが相性のいい存在であることは間違いないわ」

紗矢華が唐突に説明を始めたのは、歴史の知識を持たない古城のためだろう。海底に棲む怪物と、結瞳との間の思いがけないつながりに、古城は表情を硬くする。

「だから、強力な精神支配能力を与えられた〝夢魔〟こそが、かつて〝生体兵器〟の制御装置として神々に生み出された存在だ、と推論するのは、多少でも魔術を嚙ったことのある人間なら、そう難しいことじゃない。クスキエリゼの会長はともかく、太史局なら当然気づいていたでしょうね」

「――太史局ってのは、たしか魔獣による災害を未然に防ぐのが仕事なんだよな？　だったら連中がレヴィアタンを制御したいと思うのは、それほどおかしな話でもない気がするんだが」

古城は、ふと素朴な疑問を覚えて呟いた。

雪菜と紗矢華が、そんな古城を、左右から挟みこむように睨みつけ、

「いえ、それはおかしいです」

「危険があればそうするだろうけど、ほっとけば海の底をぐるぐる回ってるだけの人畜無害な化け物を、なんでわざわざ叩き起こす必要があるのよ？」

「そんなこと俺が知るか！　あの霧葉って女に直接訊けよ！」

二人の勢いに圧倒されながら、古城が必死に言い返す。

紗矢華も、子どものようにムキになりながら唇を尖らせて、

「今度会ったら当然そうするつもりなんだけど！」

「でも、太子局の思惑はともかく、クスキエリゼはどうして協力してるんでしょうか？」

いがみ合う古城と紗矢華を無視して、雪菜が比較的冷静に疑問を口にした。

浅葱はマイペースにキーボードを叩いて、

「それならだいたい予想できるわよ。クスキエリゼ会長の久須木って男は、トゥルーアークの出資者なのよ」

「トゥルーアーク？」

聞き覚えのない組織名に、雪菜がちょこんと首を傾ける。

浅葱はモバイルＰＣの画面に、その組織のウェブサイトを表示した。

「――自称・環境保護団体。実体は、環境保護活動を名目に破壊工作を行うエコテロリスト集団ね。魔獣を保護するって名目で学術調査船を襲撃したり、魔獣対策用の防護柵を破壊したり、人里を襲う魔獣の駆除を邪魔したり　――まあ、普通に全部犯罪なんだけど」

「魔獣を売り買いしてる会社の会長が、そんな連中に金を渡してるのか？」

古城が顔をしかめて言った。浅葱もうんざりしたように溜息をついて、

「ああいう連中は、自分たちの主張の矛盾をいちいち気にしたりしないわよ。自分が正義だと思いこんで、そこで思考停止しちゃってるんだから」

そういうものか、と古城は苛立ちを募らせる。

絶滅寸前の魔獣の保護は、もちろん意味のある活動だが、その目的のためならなにをしても許されるわけではない。魔獣を護るために人間を襲うなど論外だ。ましてやクスキエリゼは、その魔獣を捕獲して売り捌いたり、研究に使っている企業である。

彼らがテロ活動を支援するのは、恐ろしく身勝手だし、論理も破綻しているように思えた。

「だけど、そういう過激な魔獣保護主義者が、世界最強の生体兵器なんてものを手に入れたとしたら、ちょっと厄介よね。魔獣を傷つける者は皆殺しにする、とか言い出しかねないわ」

「……ふざけやがって！　そんな手前勝手な正義のために、結瞳を生贄にするつもりなら、かえ、その久須木って野郎は！」

古城が荒々しく息を吐く。

握り締めた指の隙間から、抑えきれない魔力が洩れ出して青白い火花を散らす。

久須木という男は、おそらくレヴィアタンをテロに使うつもりなのだろう。レヴィアタンの力が本物なら、国家が相手でも戦いを挑むことができる。魔獣の捕獲や駆除を行っている人々を武力で脅し、無理やり自分たちの主張を押しつけようとしているのだ。

「本当にふざけんなって感じよね。さすがの温厚なあたしも頭にきたわ！」

腹を立てているのは、古城一人ではなかったらしい。浅葱の指先が怒濤の勢いでキーボードを叩き、モバイルＰＣの液晶画面を、無数の英数字の羅列が埋め尽くしていく。

「あ、藍羽さん……？　え、と……あなた……なにを？」

浅葱の剣幕に不安を覚えたのか、紗矢華が怖ず怖ずと質問した。

しかし浅葱は振り返りもせずに、ただ謎めいたデータを画面に映し、

「……〝ＬＹＬ〟？　レヴィアタンの制御モジュールに……〝ヨタカ〟ね……なるほど、演算自体は研究所でやってるわけか。宇宙船の制御と同じ要領ね」

「もしかしてクスキエリゼのコンピューターに侵入したの？　ど、どうやって……!?」

紗矢華が衝撃を受けたように、瞬きも忘れて硬直している。

浅葱が行っているのは、クスキエリゼの企業内ネットワークへの侵入だ。れっきとした不正アクセス——犯罪である。もっとも浅葱にしてみれば、こんなものは赤信号の横断歩道を渡る程度の手間である。証拠を残すようなヘマをするはずもない。

「古城！」

「おう」

「結瞳ちゃんは、潜水艇に乗せられてレヴィアタンに向かってるわ。久須木も一緒よ」

「潜水艇？　レヴィアタンに取りつくつもりなのか!?」

まずいな、と古城は喉の奥でうめいた。さすがに海の底に潜られてしまったら、結瞳を取り戻したくても古城たちには手が出せなくなってしまう。

「レヴィアタンの制御システムの本体は、クスキエリゼの研究所にある〝LYL〟ってシステムね。そっちを乗っ取ってしまえば、とりあえず久須木の計画は潰せるけど」

「〝LYL〟……だと？」

聞き覚えのある言葉の響きに、古城が表情を硬くする。

莉琉の存在を知らない浅葱は、そんな古城の反応を訝しげに見返して、

「夢魔の能力を安定して引き出すために、結瞳ちゃんの人格の一部をコンピューターに移植した人工知能みたい。人工的に造り出した、仮想第一人格って感じかしらね。この〝LYL〟が結瞳ちゃんを乗っ取って、リリスの能力を引き出してるってわけ」

「クスキエリゼに協力的な〝莉琉〟という人格……か。なるほどな」

古城は、自分の正体について語っていた莉琉の言葉を思い出す。

莉琉は、結瞳の肉体を操りながらも、結瞳から切り離された別の存在だった。

彼女に乗っ取られていたときの結瞳が、夢魔の力を完全に使いこなしていた理由もわかる。

〝LYL〟とは、そのために造り出されたシステムだからだ。

そのシステムが稼働している限り、古城たちが結瞳を救い出すことはできない。無理に連れ戻しても、再び莉琉の人格が現れて、久須木に協力しようとするだろう。

レヴィアタンに向かった結瞳を救出するだけでなく、クスキエリゼの研究所内にあるシステムもどうにかしなければならない、というわけだ。

忌々しいことだが、古城一人の手に負える問題ではなさそうだった。

「——浅葱、〝LYL〟のほうは任せていいか？　俺は結瞳を連れ戻す」

おもむろに立ち上がりながら、古城が訊いた。人工知能の取り扱いは、古城はもちろん、獅子王機関の二人にとっても専門外である。任せられるのは浅葱しかいない。

「ちょ……二人でなに勝手に話を進めてるのよ!?　これは私の任務なんだけど！」

古城たちのやりとりを聞いていた紗矢華が、焦ったように会話に割りこんでくる。しかし浅葱は、それを無視して古城を見上げ、

「あたしは最初からそのつもりだったけど、古城はどうするのよ。連れ戻すって、どうやって

潜水艇を追いかけるつもり？」
「それは煌坂がなんとかしてくれるだろ」
「へ？　私？」
突然話を振られた紗矢華が、自分の鼻先を指さして硬直した。
古城は期待のこもった視線を彼女に向けて、
「だっておまえの任務なんだろ」
「そ、そんなこと急に言われても困るんだけど……！」
「あの、クスキエリゼに予備の潜水艇はありませんか？」
脂汗を流す紗矢華を見かねたように、雪菜が遠慮がちに質問する。
そうか、と古城は指を鳴らして、
「それを奪って結瞳を追いかければいいのか」
「はい。もし、あれば、ですけど――」
「……潜水艇はないけど、高速船が残ってるわね。自動操船装置があれば、こっちで操縦できると思うわ。結瞳ちゃんたちに追いつけるかどうかはギリギリだけど、レヴィアタンが海上に浮上している間ならチャンスはあるかも」
旅行バッグからタブレットPCを取り出した浅葱が、研究所内の見取り図を表示して古城に手渡してくる。こいつはいったい何台パソコンを持ってきたんだ、と呆れながら、古城はそれ

を受け取った。船の格納庫があるのは〝魔獣庭園〟のいちばん奥らしい　辿り着くのにも少々手こずりそうだった。
「それでは、なるべく早く出発したほうがいいですね」
「……姫柊も一緒に来てくれるのか？」
普通に槍を握って立ち上がる雪菜を、古城が驚いて見返した。
雪菜は、こほん、とわざとらしい咳をして、
「わたしは先輩の監視役ですから、先輩と一緒に行くのは当然です。それに……結瞳ちゃんを連れ戻せなかったのは、わたしの責任ですし」
「あ、あの……私の任務……なんだけど……」
銀色の長剣を抱いた紗矢華が、弱々しい声で自分の存在をアピールする。
だがそんな紗矢華の懸命の自己主張は、突然勢いよく開いたドアの音でかき消された。
「おーす……あれ、おまえら、どこに行くんだ。こんな朝っぱらから連れ立って……」
ノックもせずに女子部屋に入って来たのは、部屋着姿の矢瀬だった。廊下に寝かせたまま放置していたのだが、今ごろになって目を覚ましたらしい。
「なんでもねえ！　眠ってろ！」
いちいち説明するのも面倒だったので、古城は矢瀬の胸元に乱暴に枕を投げつける。
時刻は午前七時を過ぎたあたり。昨晩、夜更かししたことを思えば、それほど的外れな命令

でもないはずだが――

「いや、そう言われても、こう騒がしくちゃな。それに早起きは健康の秘訣だぜ？」

なぜかこんなときに限って矢瀬が正論を振りかざす。

その小賢しい発言を聞いていた浅葱が、イラッとしたように振り返り、

「いいからあんたはあたしの朝ご飯の支度でもしてなさい。コンビニ行って買ってきて！」

「お、おお……!?　コンビニって、おまえここ、出来たばかりのリゾート……」

「うっさい！　早く！」

幼なじみの横暴な命令に、不満を洩らしながらもコテージを出ていく矢瀬。

古城たちはホッと息を吐きながらそれを見送って、それから慌てて結瞳救出の支度を始めた。

3

無人運転の電動カートに乗って、古城たちは〝魔獣庭園〟へと向かった。

船の上での戦闘になることも想定して、古城は海パンにTシャツというラフな服装だ。

雪菜は水着を大きめのナイロンパーカーで隠して、黒いボディボード用のケースを背負っている。ケースの中身はもちろん〝雪霞狼〟だ。そして、

「あれ、煌坂？　水着なんか持ってたのか？」

いつの間にか着替えていた紗矢華を見て、古城が訊く。

紗矢華が身に着けていたのは、リボンの縁取りが入った桜色のビキニだった。いちおう上にシャツも着ているのだが、胸回りがぱっつんぱっつんになっているせいで、むしろ余計に水着が目立つ結果になってしまっている。

「あ、藍羽さんに借りたのよ。さすがに血まみれのままうろつくわけにはいかないし。サイズの合う服がほかになくて……や、やっぱりおかしい……？」

「え？　いえ、特にサイズ的な問題はお見受けできませんが……」

ちらちらと横目で反応をうかがってくる紗矢華に、古城は事務的な口調で答えた。

紗矢華はムッと眉を逆立てて、

「なんで急に敬語になるのよ!?」

「迂闊なコメントをしたら、おまえはいきなり斬りかかってくるじゃねーかよ……ていうか、おまえはスタイルいいんだからもっと堂々としてろよ。前屈みになってると、いろいろ強調されてえらいことになるから」

「は？　前屈み？」

自分の胸元を見下ろして、紗矢華がサッと頬を紅潮させた。

本人に自覚はなかったようだが、ワンサイズ小さな浅葱の水着を着ているせいで、紗矢華の胸の谷間はかなりすごいことになっている。彼女が前屈みになっていると、どうしてもそれ

が古城の視界に入ってきてしまうのだ。
そして、そのことに気づいた紗矢華は、無言のまま背中に手を回すと、カモフラージュ用の新聞紙を引きちぎって長剣を抜き放ち、
「こ、殺す！　やっぱりあなたはここで殺すわ！」
「やっぱりこうなるんじゃねーか！　人が親切に忠告してやったのに！」
「うるさい、このエロ真祖――！」
一発狙いのアッパースイングで、古城に長剣を叩きつけようとする紗矢華。そんな二人の目の前にいきなり突き出されてきたのは、冷たい銀色に輝く槍だった。
「お二人とも、ふざけてる場合ですか？」
静かな殺気のこもった声で雪菜に訊かれて、古城たちの表情が凍りつく。
「ひ、姫柊……!?」
「違うの、雪菜。こ、これはそこの第四性犯罪者が――」
「ていうか、俺はべつにふざけてないだろ！　この女が勝手に怒り出しただけで――」
「――なんですか？　なにかご不満でも？」
言い訳を続ける古城と紗矢華に、雪菜は冷え冷えとした視線を向ける。いつになくご立腹な雪菜の態度に、古城たちは震え上がって頭を下げた。
「す、すまん」

「ごめんなさい」

もういいです、と雪菜は頬を膨らませ、自分のパーカーの胸元を見下ろして薄く溜息をつく。

雪菜がこんなふうに怒るのはめずらしいな、と古城は少し不思議に思いつつ、ようやく辿り着いた〝魔獣庭園〟の門を見上げた。

庭園の周囲は高圧電線入りの鉄柵と深い運河で囲まれて、入り口のゲートにはシャッターが降りている。魔獣たちの脱走を防ぐための設備なのだろうが、外から侵入する人間にとっても、それらの存在はけっこう厄介だ。

「そりゃ、この時間はまだ閉園してるよな……どうやって中に入ればいいんだ？」

時計を確認して古城がぼやいた。

不完全な吸血鬼である古城には、吸血鬼らしい能力がほとんどない。霧になっての移動や、空を飛ぶことはできないのだ。

鉄柵をぶち破るのは簡単だが、本来の目的とは無関係の破壊活動にはさすがに抵抗がある。無駄に騒ぎを起こして、一般の職員を巻きこむのも避けたかった。

「私が江口結瞳を連れ出したときは、地下の排水溝から入ったんだけど――」

紗矢華も困ったように鉄柵を睨んでうめく。

「でも、もうそこは使えないのよね」

「クスキエリゼに警戒されてるってことか？」

「そうじゃなくて、脱出するときに私が潰しちゃったから……」

うっかり告白してしまった紗矢華を、雪菜と古城が呆れ顔で見つめた。暗殺の専門家を名乗っているわりには、やたら杜撰な脱出ぶりである。

「紗矢華さん……」

「おまえって優等生ぶってるわりに、やることが雑だよな」

「違うの！　あの六刃の女に襲われて仕方なく……違うのよ！」

無実を主張する紗矢華の言葉を聞き流しながら、古城は気怠く頭を掻いた。

「まあ、冷静に考えたら、煌坂じゃなくても普通に犯罪だよな……企業の研究所に押し入って、船をかっぱらうってのは。通報されたらヤバいんじゃないか？」

「私じゃなくてもって、どういう意味……!?」

犯罪者確定という扱いを受けた紗矢華が、膨れっ面で抗議をする。

こんなところで古城たちが立ち止まっている間にも、結瞳はレヴィアタンへと近づいているのだ。古城はそのことに焦りを覚えながら、

「いや、勢いで飛び出してきたものの、船を強奪するにしても、なんかきっかけがないと心の準備的なものがな――」

「まったく、みみっちい男ね。血も涙もない冷酷非情な吸血鬼の真祖じゃなかったの？」

「悪かったな！　俺はそういう夜の帝国の親王的なキャラじゃなくて、小市民的な平穏な暮ら

しを望んでるんだよ！」

理不尽に貶してくる紗矢華に向かって、古城は声を荒らげた。古城のものではない絶叫が、どこか遠くから聞こえてきたのは、その直後だ。

「待ってください、先輩……〝魔獣庭園〟の様子が……」

雪菜が、庭園の鉄柵のほうへと走り寄る。

異変が起きていたのは、〝魔獣庭園〟の内側だった。

荒々しい地響きや唸り声。重量のあるなにかが激突する音。そして逃げ惑う人々の悲鳴。

「魔獣たちが暴れてるのか……!?」

異変の正体に気づいて、古城は動揺する。広大な〝魔獣庭園〟のそこかしこで、魔獣たちが一斉に暴れ出していた。屋外で放し飼いにされていた群れはもちろん、檻や建物の中で飼育されている種族や、屋外プールにいる海棲の魔獣たちまでもが、完全にパニックを起こしている。

庭園の外にいる古城たちにも、はっきりわかるほどの異常事態だ。

「レヴィアタンの接近に気づいて怯えてるんだわ――」

紗矢華が青ざめた表情で呟いた。レヴィアタンが気まぐれに放つ強大な魔力の波動――敏感にそれを察知した魔獣たちが、死の恐怖を覚えて怯えているのだ。

「ここって……何匹くらい魔獣を飼ってたんだっけか？」

「三百種、二千二百匹です」

古城の疑問に、雪菜が硬い声で即答した。その絶望的な数字に古城は目眩を覚えた。

「まずいぜ……そいつらがこのまま〝魔獣庭園〟の外に逃げ出したら手に負えない……」

自分自身の呟きで、古城は事態の深刻さを痛感する。

たしかに〝魔獣庭園〟には、魔獣たちの脱走を防ぐ設計がなされているのだろう。

しかし、それらは基本的に、獰猛な魔獣たちを対象にしたものである。

人間に危害を加える恐れのない穏和な魔獣たちまでもが恐慌状態になって、自滅することも厭わず一斉に暴走を始めたら、完全に防ぎきれるものではない。

すでに庭園内や研究所のあちこちで、魔獣が檻を破って暴走を開始。複数の場所で火の手が上がり始めていた。ひとたび檻が破られてしまうと、先に脱走した魔獣たちによって園内の警備システムが破壊され、暴走の連鎖が広がっていく。

三百種のすべてとはいわないまでも、その半数近くは、いずれ確実に庭園の外へと逃走することになるだろう。観光客でごった返す遊園地やプールで彼らが暴れたら、どれだけの被害が出るか想像もつかない。〝魔獣庭園〟のスタッフだけで、それを止めるのは不可能だ。

「紗矢華さん、〝煌華麟〟は使えますか？」

獅子王機関の舞威媛が持つ銀色の長剣を見つめて、雪菜が訊いた。

紗矢華の〝煌華麟〟――六式重装降魔弓は制圧兵器だ。鳴り鏑矢によって紡がれる高密度の呪文が、人間には詠唱不可能な高度な呪術を発動する。その呪矢の力をもってすれば、数千

匹の魔獣を一斉に無力化することもできるはずだった。

しかし、紗矢華は追い詰められたような表情で首を振り、

「鎮圧系の呪矢は残ってるから、眠らせることはできると思うけど、だけどさすがにこの範囲を全部カバーするのは無理だわ。せめて、一箇所にまとまってくれれば――」

「要するに一箇所にかき集めればいいんだな……」

紗矢華の言葉を反芻して、古城が開き直ったように低く唸った。もはや手段を選んでいる余裕はない。頭上へと向けて突き上げた指先から、深紅の血霧とともに膨大な魔力が迸る。

「暁古城!?」

「疾く在れ、〝双角の深緋〟！」

驚く紗矢華に構わず古城が召喚したのは、陽炎のように揺らめく巨大な眷獣だった。緋色の鬣を持つ双角獣。全長十メートルを超えるその巨体は、荒れ狂う振動の塊だ。

頭部に突き出した二本の角が、音叉のように共鳴して凶悪な振動波を撒き散らす。そして、その咆吼は衝撃波の弾丸となって、〝魔獣庭園〟の入り口ゲートを跡形もなく粉砕した。

「くそ、結局こうなるのかよ――！」

自らの眷獣がもたらした破壊の爪痕に苦悩しながら、古城は〝魔獣庭園〟の園内に向かう。レヴィアタンをも凌ぐ凶悪な魔力の出現によって、庭園内の魔獣たちは、新たなパニックに襲われ始めていた。

4

「はいはい、管理者権限、掌握完了、と」

鼻歌交じりにパソコンのキーボードを鳴らして、浅葱は、クスキエリゼ研究所のネットワークを乗っ取った。所要時間は一分足らず――だが、浅葱の表情は不満げだ。

「思ったより時間かかっちゃったわね。こんな面倒臭いことになるんだったら、モバイルノートなんかじゃなくて、もっとパワーのあるPC持ってくればよかったわ。回線の太さも全然足りてないし……モグワイ、そっちはどう？」

『見つけたぜ、〝LYL〟ってやつ……だけど、こいつが第二人格だと……!?』

浅葱の相方である補助人工知能が、妙に人間臭い口調で応えてくる。皮肉屋な彼の合成音声が、めずらしく興味を示したように甲高くなっていた。〝LYL〟の正体に気づいて、少し興奮しているらしい。

パソコンの液晶画面に映し出されたのは、モグワイが解析した〝LYL〟の人工知能としての性能診断結果だ。〝LYL〟のAI強度の数字は極めて高く、彼女がほぼ完全に人間の人格をシミュレートできることを示している。

彼女はシステム内に組みこまれた魔術装置によって江口結瞳の意識と連結されており、結瞳

の肉体を乗っ取ることで、夢魔としての能力を安定して引き出す機能を持っていた。そこまでは浅葱たちの予想どおりだ。

だから浅葱とモグワイを困惑させていたのは、〝LYL〟の性能そのものではなかった。人工知能である〝LYL〟を構成するデータの性質――いわば彼女の記憶と人格そのものに対して驚いていたのだ。

「なによ、これ……人類に対する悪意の塊じゃない……！」

浅葱が渇いた喉を鳴らす。

憤怒、憎悪、嫉妬、怨嗟、破壊衝動と自滅願望――〝LYL〟を構成しているのは、人間の持つ邪悪な意思そのものだった。それらはどんな人間の心にも、多かれ少なかれ含まれているものだ。それはまだ幼い結瞳といえども、おそらく例外ではないのだろう。

その結瞳の中の邪悪な部分だけを抽出して、人工知能に埋めこんだ者がいるのだ。

『ケケッ……こいつはすげえな。こんなものを世界最強の生体兵器の制御システムに使おうとしてるやつがいるのか？　とんでもない度胸だな、オイ？』

モグワイがそう言って愉快そうに笑い出す。浅葱は睫毛にかかる前髪を乱暴に払いのけ、

「そうか……リリスとしての魂を受け継ぐたびに濃縮されてきた負の感情……その部分だけを取り出して電子的に濃縮したんだわ」

浅葱が小声でそう呟いた直後、突然、パソコンのスピーカーから奇妙な声が流れ出す。電子的に合成された野太い男の声。時代劇風の不自然な日本語だ。

『呵々……ご名答でござるよ、女帝殿。モグワイ殿も息災でござったか？』

「あんた……！」

モグワイとの音声通話に勝手に割りこんできたIDを睨んで、浅葱はイライラと奥歯を噛んだ。

「このふざけた喋り方……！　あんたなの、リディアーヌ・ディディエ……!?　なんであんたがこんなところにいるのよ、〝戦車乗り〟!?」

『ふむ、これは異なことを。その言葉、そっくりお返し致そう。拙者は太史局の依頼で、このシステムの管理を任されております故』

〝戦車乗り〟と呼ばれた声の主が、挑発するように言い返す。リディアーヌ・ディディエは、浅葱とも交流のあるフリーランスのプログラマーだ。特に侵入者の撃退を得意とする凄腕の迎撃屋として、人工島管理公社に非常勤で雇われている。

常に専用の超小型有脚戦車の中に引き籠もって生活しており、その素顔を知る者は少ない。しかし彼女の正体は、わずか十二歳の外国人の少女。それも西欧ネウストリアに本社を置く大企業、ディディエ重工に育てられたエリートなのだった。

「あんたが〝LYL〟の管理者ですって……!?　まさかこのシステムを構築したのも、あんたの仕業なの？」

浅葱が敵意の籠もった声で訊く。夢魔の悪意だけを濃縮して生み出した人工知能。そんなものを管理しているのが、結瞳と同世代の少女ハッカーだったという事実に、浅葱は怒りを覚えていた。

『然様――とはいうものの、拙者が用意したのは、人格を入れる器だけでござるが』

「あんた、こいつがどんなヤバいものかわかってやってるんでしょうね!?」

浅葱が声を低くして警告する。

悪意の塊である〝LYL〟がレヴィアタンを完全に支配したら、おそらく地上には凄まじい破壊の嵐が吹き荒れることになるだろう。子どもの遊びでは済まされない問題だ。

しかし〝戦車乗り〟は平然と笑い、

『もちろん承知。然れど拙者には拙者の目的があり申す故』

「はあ？　あんたの目的？」

『いかにも。たとえば、このように女帝殿と本気で矛を交えるというのは、なかなか得難い体験ではござらぬか――？』

挑戦的な〝戦車乗り〟の言葉に、浅葱はうんざりと首を振った。

どちらかといえば不愉快な事実なのだが、浅葱は、一部の業界で伝説的なハッカーとして知られ、〝電子の女帝〟などという世にも恥ずかしいあだ名で呼ばれていたりもする。

そんな浅葱を撃退することができれば、〝戦車乗り〟の名は一躍有名になるだろう。むしろ

〝戦車乗り〟の性格からして、こうやって浅葱と本気で戦う機会を、これまでも待ちわびていたのかもしれない。

「ああ、もう！　当然そういう話になるわよね……むっかつく……！」

浅葱は乱暴にキーボードを叩いて、自作のハッキングツールを起動する。

年下の小学生とはいえ、リディアーヌ・ディディエのハッカーとしての実力は本物だ。浅葱として彼女に確実に勝てるという保証はない。

「どう、モグワイ？　行けそう？」

『正直、逃げられるもんなら逃げたいところだな。PCのスペックがしょぼすぎだぜ』

「仕方ないでしょうが。こんなところで〝戦車乗り〟のアホが出てくるなんて思ってなかったんだから――！」

いつになく気弱な相方に浅葱が怒鳴る。しかしモグワイの評価は適切だ。

今の浅葱の手元にあるのは性能の低いモバイルPCだけ。本来の彼女の装備にはほど遠い。遠隔操作で人工島管理公社のメインコンピューターを操ってはいるものの、通信によって生じる遅延は致命的なものがある。

『安心するでござるよ、女帝殿。武士の情けで、警察への通報は見合わせる故。女帝殿のパソコンに残っている恥ずかしいポエムをバラまくだけで勘弁してやるでござる』

追い詰められた浅葱を哀れむように、上から目線で慰めてくる〝戦車乗り〟。浅葱は、キィ、

と甲高くうめいて、

「ないわよ、そんなボエムなんか！　勝手に他人の趣味を捏造すんな！　ていうか、そういう台詞はあたしに勝ってからほざきなさいよね！」

『ふむ、その言葉――拙者との勝負を受けたと見なして良いでござるな。そうこなくては！』

「うぐっ……！」

〝戦車乗り〟に言質を取られて、浅葱は反論できなくなる。完全に逃げ道を塞がれた恰好だ。

やれやれ、とモグワイが呆れたように画面の中で首を振り、

『小学生の挑発に乗せられてどうすんだよ、嬢ちゃん……』

「うるさいっ！　どのみち〝ＬＹＬ〟を止めるには、こいつをどうにかしなきゃでしょうが――最後にひとつ聞かせなさいよ、〝戦車乗り〟」

『なんでござろう？』

〝戦車乗り〟が笑いを含んだ声で訊いてくる。浅葱は乱れた息を整えながら、ヘッドセットのマイクに向かい、

「あんたの仕事、クスキエリゼじゃなくて、太史局に依頼されたって言ったわね。太史局ってのは、そのふざけたシステムを使って、いったいなにをするつもりなの？」

『――太史局の目的は、絃神島の破壊でござる。もちろんこのブルーエリジアムも含めて』

「は？」

予想の斜め上を行く〝戦車乗り〟の答えに、浅葱は一瞬、言葉をなくした。

「ちょっと待ってよ。太史局は魔導災害を防ぐための日本政府の機関なんでしょうが!?　どうしてそいつらが、絃神島を沈めることになってんのよ!?」

『それは知らないほうが幸せでござろう』

〝戦車乗り〟の声音に、ふざけているような響きはない。彼女たちは本気で絃神島を滅ぼそうとしているのだ。

浅葱のパソコンの液晶画面が、警告表示で赤く染まる。〝ＬＹＬ〟の管理者である〝戦車乗り〟が、侵入者の浅葱を排除するために動き出したらしい。

「な!?　ま、待ちなさい、リディアーヌ！」

『問答無用でござる、女帝殿――いざ尋常に、勝負！』

〝戦車乗り〟が冷たく言い放つ。舌打ちしながら、浅葱が防戦を開始。

絃神島の存亡を賭けた戦いは、こうして誰にも知られることなく、ひっそりと幕を開けたのだった。

5

純白の潜水艇が、海面スレスレを滑るように進んでいた。ナビゲーションマップに表示され

た現在位置は、ブルーエリジアムの沖合十二海里付近。すでに周囲に島影はなく、見渡す限りの青い海面だけが広がっている。

潜水艇の推進スクリューがゆっくりと停止した。狭いコックピットの中が静寂に満たされ、泡立つ水槽の音だけが残される。

水槽の中では江口結瞳が、焦点の定まらない瞳をぼんやりと虚空に向けていた。〝LYL〟に人格を乗っ取られた彼女は、世界最強の夢魔の力を無制限に引き出して、海底を漂うレヴィアタンに呼びかけているのだ。

「こちら〝ヨタカ〟だ……〝蛇〟との接触地点に到着した」

操縦席に座る久須木が、通信機に向かって呼びかける。スピーカーから聞こえてきたのは、妃崎霧葉の冷静な声だった。

「すべて想定どおりです、会長。そのまま結合フェイズへの移行を』

「了解した」

シートに深々ともたれながら、久須木が満足げに呟いた。

結合フェイズなどと呼ばれてはいても、久須木にやるべきことはない。潜水艇〝ヨタカ〟は、このままレヴィアタンの体内へと侵入し、そのまま世界最強の魔獣を制御するための操縦ユニットになることになっている。

神々の時代の生体兵器が、久須木の意のままに動くのだ。

少なくとも海の上にいる限り、久須木に逆らえる存在はなくなる。島国である日本にとっては、すべてのライフラインを久須木に押さえられたに等しい。

もちろん久須木も、無用な殺戮や破壊を望んではいない。

久須木はただ、現在の間違った世界を正そうと思っているだけだ。

戦争、暴力、人種差別、環境汚染――今の世界には問題があまりにも多すぎる。その中でも特に久須木が許せないのは、魔獣に対する扱いだ。

世界で絶滅の危機に瀕している魔獣は、一万種とも二万種ともいわれている。にもかかわらず、人々は魔獣の棲息地や食料を奪い、駆除という名の虐殺を続けている。そのような非道が許されるはずがない。

傲り高ぶった人類の目を覚まさせて、魔獣との平和的な共存を図るのだ。その崇高な目的のためならば、人類の十億や二十億が死んでも、たいした問題ではないだろう。

人類と魔族の共存を実現した聖域条約――だがその条約を実現するために、〝忘却の戦王〟は世界中に凄まじい戦乱を巻き起こした。無数の屍を積み上げることで、彼は魔族の権利を人類に認めさせたのだ。久須木がやろうとしていることも、結局のところは彼と同じだ。

魔獣の権利を認めさせるために、世界最強の魔獣の力を見せつける。

それを実現できるのは、神々の時代の生体兵器を支配する久須木だけだ。久須木は、世界を正すために神に選ばれた王なのだ。

そして王である久須木の眼前に、巨大な影が現れる――

「おお……」

久須木の喉から、感嘆の声が洩れ出した。

海面を割って浮上したのは、群青色の巨大な怪物だった。

世界最強の魔獣、レヴィアタン――巨大過ぎて正確な全貌はつかめない。

だが、その姿はたしかに蛇に似ていた。

あるいは太古の地球に生息していた魚竜や、伝説の龍そのものだった。

同時に、その姿は兵器に似ていた。滑らかな流線型を描く胴体は、最新鋭の原子力潜水艦のようでもあり、半透明の鱗は装甲と見分けがつかない。

何万年もの時を経てきたせいか、レヴィアタンの全身はフジツボで覆われ、いくつもの古傷が残っている。その姿は恐ろしく、そしてやはり神々しかった。

「なるほど……これがレヴィアタンか。まさに神々が生み出した最強の獣だな。実に猛々しく、美しい。そうは思わないかね、江口結瞳？」

抑えきれぬ興奮に声を上擦らせながら、久須木が水槽の中の少女に呼びかける。

レヴィアタンの巨体を目の当たりにしたことで、それを支配するリリスの力の凄まじさを、ようやく実感できたのだろう。結瞳を眺める久須木の瞳には、賛嘆の光が浮かんでいる。

「きみはレヴィアタンの生贄などではない。私とともに、これを支配する権利を手に入れた、

だ。それを誇りに思いたまえ！」

久須木の身勝手な呼びかけにも、水槽の中の結瞳はなにも答えない。

代わりに聞こえてきたのは、推進スクリューの始動音だった。純白の潜水艇が再び動き出し、レヴィアタンの巨体へと近づいていく。

レヴィアタンの浮上の余波で周囲の海面は荒れていたが、潜水艇は構わず速度を上げた。

そして、近づいてくる潜水艇を受け入れるように、海面を漂うレヴィアタンの胴体に裂け目が生じる。その奥には深い空洞が続いていた。航空母艦の艦載機格納庫に似た空間だ。

「妃崎攻魔官が言っていたとおりだな。レヴィアタンの体内には人間が生息できるスペースがある……か。兵器ならば当然の仕様ではあるが……」

レヴィアタンの体内へと侵入した久須木が、感嘆しながら周囲を見回す。

やがて純白の潜水艇は、空洞の途中で停止した。周囲を満たしていた海水が引いていき、人間が呼吸できるスペースが出現する。

潜水艇の投光器に照らし出された空洞の直径は十五メートルほど。長さは二百メートル以上あるだろう。この空洞を格納庫として使えば、多数の兵器を積みこんで、世界中の戦場へと兵士を送りこむことができるはずだ。

しかし今、レヴィアタンの中にいるのは久須木だけだ。

たった一人で、世界最強の魔獣の力を独占している――

そんな子どもじみた万能感に浸っていた久須木を、無理やり現実に引き戻したのは、コックピットに響き渡った耳障りな電子音だった。

『――結合の完了を確認しました。これより〝莉琉〟を起動します』

電子音の発信源は、コックピットの最後部に据え付けられた〝LYL〟の制御モジュールだ。水槽の中を満たしていた液体が流れ出し、その中を漂っていたはずの江口結瞳が、ニヤリと唇を吊り上げる。

「モジュールが勝手に動き出した、だと!?」

驚愕する久須木の前で水槽の蓋がゆっくりと開き、少女の細い指先が、その隙間から這い出してくる。水滴に濡れた前髪の下で、江口結瞳の顔をした少女は笑っていた。

世界最強の夢魔と呼ばれた少女が、邪悪な表情で笑っている。

「――妃崎攻魔官、どうなっている!? リリスが目を覚ましたぞ!」

本能的な恐怖に駆られて、久須木は通信機へと呼びかけた。

ノイズ混じりの電波の向こう側で、妃崎霧葉が苦笑する気配がある。

『すべて想定どおりでしてよ、久須木会長。お伝えしたはずです。〝莉琉〟を起動する、と』

「なにっ!?」

『――自分がこれからなにをするべきか、わかっていて、莉琉?』

霧葉が、狼狽する久須木ではなく、彼の背後に立つ少女に向かって呼びかけた

濡れた髪を振って、莉琉が笑う。彼女の背中に浮かび上がったのは、魔力で編まれた巨大な翼だ。

「もちろんよ、キリハ。壊してしまえばいいんでしょ、そのくそったれな人工の島を」

「――馬鹿な! 〝LYL〟を停止しろ、妃崎攻魔官! 約束が違うぞ! 自分たちがなにをやってるのかわかっているのか!?」

久須木が唾を撒き散らしながら怒声を上げた。しかし霧葉の口調に変化はない。

『もちろんですわ、会長。これが私ども太史局の目的ですから』

「なんだと……!?」

『あなたが、レヴィアタンを使ったテロ活動を計画していることは、最初からわかっていましてよ。本来ならば、それを未然に防ぐのが私たちの任務なのですけれども、わけあって今回はそれを利用させていただきました』

「私を騙していたのか、最初から……女狐め!」

淡々と言葉を続ける霧葉を、久須木が口汚く罵った。

それを聞いて、キャハッ、と嘲るように笑ったのは莉琉だった。

「自分の目的のために、結瞳を生贄にしようとしたあんたに、キリハを責める資格があるとは思えないんですけどお? ね、ホントの生贄が自分だったって知らされて、どんな気持ち?」

「ぐ……!」

全身を紅潮させた久須木が、血走った目で憎々しげに莉琉を睨んだ。しかし相手は世界最強の夢魔。たとえ小学生の姿をしていても、久須木ごときの手に負える相手ではない。

「やだ、なに、その顔。泣いちゃうの、おじさん？」

為すすべもなく屈辱に震える久須木の顔を、莉琉が愉しげに覗きこむ。

そして彼女は、久須木の手から通信機のマイクを奪い取り、

「キリハも、結瞳の願いを叶えてくれてありがとね。冷静なふりして良心の呵責に苦しんでるキリハのこと、好きだったよ」

悪意に満ちた莉琉の言葉にも、霧葉は動揺を見せなかった。

ただ少しだけ莉琉を哀れんでいるような、寂しげな声で優しく告げる。

『さよなら、莉琉……会長もどうかよい夢を――』

6

「――獅子の舞女たる高神の真射姫が讃え奉る」

絶叫と悲鳴に満ちた〝魔獣庭園〟の大気を裂いて、紗矢華の澄んだ声が響き渡る。

彼女が構えていたのは、銀色の洋弓だ。つがえた呪矢に膨大な呪力を流しこみながら、紗矢華が弦を引き絞る。

「極光の炎駒、煌華の麒麟、其は天楽と轟雷を統べ、憤怒をまといて妖雲冥鬼を射貫く者なり――！」

轟、と激しく渦を巻きながら、射放たれた呪矢が空へと舞い上がった。

荒々しく鳴り響く鏑矢の音色が描き出したのは、空を覆い尽くす不可視の魔法陣だ。そこから噴き出した濃密な瘴気が、黒い霧となって地上へと降りそそぐ。

〝魔獣庭園〟の広場の一角には、数百匹の魔獣たちが集められていた。檻から逃げ出した彼らをそこに追いこんだのは、緋色の鬣を持つ古城の眷獣だ。

強大な破壊力を誇る第四真祖の眷獣が、羊の群れを追い立てる牧羊犬のように、魔獣たちを呪矢の効果範囲に誘導したのである。

「つ、疲れた……！」

立て続けに数本の呪矢を撃ち放った紗矢華が、力尽きたようにぐったりと座りこむ。

彼女が使ったのは、沈静系の呪術。暴れ回っていた魔獣たちを麻痺させて、そのまま深い眠りにつかせたのだ。魔獣の種類によって個体差はあるが、早くても半日は目を覚まさないはずである。事態を収拾するには十分な時間だろう。

「なんとかなったか……」

ふう、と荒い息を吐きながら、古城も眷獣の召喚を解除する。

雪菜は、なぜか現実から目を逸らすように、虚ろな眼差しでうなずいて、

「さすがにこれだけ強力な呪詛を浴びると衰弱する魔獣も出てくると思いますけど……そこは、人命優先ということで割り切るしかないですね」

「そうだよな……被害を最小限に抑えるために、俺たちは努力したよな。なあ、煌坂」

「あ……あなたと一緒にしないで欲しいんだけど！」

一方的に同意を求められた紗矢華が、古城を睨んで勢いよく立ち上がった。

「これのどこが最小限の被害!?　魔獣を追い立てるために、なんでいちいち建物を壊さなきゃならないのよ!?」

そう言って紗矢華が指さした〝魔獣庭園〟の園内は、爆撃を受けたかのような惨状を晒している。緑の美しかった広場は抉られ、水族館の建物は半壊。運河は上砂で埋め尽くされ、入り口のゲートに至ってはほぼ原形を留めていない。

このような災禍を引き起こしたのは、もちろん古城の眷獣だった。暴走した魔獣たちを追い立てる途中で、つい勢い余ってやってしまったのだ。

「眷獣の威力が強すぎるんだから仕方ねえだろ！　俺だって精いっぱい努力したんだよ！」

非難の眼差しを向けてくる紗矢華に、古城も必死で反論する。

結果的に庭園が壊れたのは遺憾だが、古城が眷獣を使わなければ、魔獣たちの暴走によってもっと大きな被害が出たかもしれないのだ。

「そうですね。先輩がいて、この程度の被害で済んだのはむしろ幸運だったのではないかと」

どちらかと言えば自分自身に言い聞かせるような口調で、雪菜が古城をフォローする。

そんな雪菜の両肩を、紗矢華が心配そうにがっちりとつかんで、

「雪菜、あなた、この男に騙されてるのよ！　慣れて感覚が麻痺してるだけだから！　普通にすごい被害が出てるから！」

「騙してるってなんだ!?　どう考えても緊急事態だっただろうが！」

俺は悪くないはずだろ、と無罪を主張する古城。

乱暴に言い争う古城たちとは対照的な、静かな声が聞こえてきたのは、その直後だった。

「本当に、聞きしに勝る恐ろしい吸血鬼ね、第四真祖……魔獣の暴走を止めるためとはいえ、躊躇なく〝魔獣庭園〟を破壊するなんて。それがあなたの本性というわけね」

「本性じゃねえ――！」

勝手に決めつけるな、と古城は声のした方角を振り返り、そこで表情を強張らせた。

二叉の槍を構えて立っていたのは、長い黒髪に黒い制服姿の少女だ。

「妃崎――！」

「それでも、礼を言っておくべきかしら。魔獣たちの暴走に対する対策を、私たちは用意することができなかったから。おかげで来島者を避難させる余裕ができたわ」

「避難だと……!?」

霧葉を睨んだまま、古城たちは困惑の表情を浮かべる。

魔獣たちの暴走は片付いた。もうブルーエリジアムの来島者を避難させる必要はないはずだ。少なくとも魔獣たちから逃げる必要は――

「そろそろ沿岸警備隊が、レヴィアタンの接近に気づくはずよ。根回しは済ませてあるから、すぐに避難勧告が出るわ。港が混み合う前に、あなたたちにも避難をお勧めしてよ」

「レヴィアタン……だと？」

霧葉の言葉に、古城はますます混乱する。

彼女は、レヴィアタンが来る前に逃げろ、と古城たちに警告しているのだ。まるでレヴィアタンがこの島を襲ってくることを、最初から知っているような態度である。

雪菜が銀色の槍を引き抜いて、いつでも戦えるように身構えていた。戦闘態勢を取っているのは紗矢華も同じだ。

しかし霧葉は動かない。彼女に戦闘の意思はないのだ。それどころか、むしろ本気で古城たちを気遣っているようにも見える。

「待てよ。どうしてブルエリにいる人間が避難しなくちゃならないんだ？　ここにはクスキエリゼの研究所があるんだろ？　レヴィアタンの制御もそこでやってるんじゃなかったのか？」

「そうね……だから、なに？」

片眉だけを軽く上げて霧葉が訊き返す。古城は、そんな彼女の落ち着きぶりに苛立ちながら、

「どうして久須木が、そのブルエリを危険に晒すような真似をするんだ？　おい、いったい――」

「それはあなたの思い違いよ、第四真祖」

「え……？」

「レヴィアタンを制御しているのは、久須木会長ではないわ。莉琉よ」

「莉琉？」

思いがけない霧葉の答えに、古城は一瞬の思考停止に陥った。

「待てよ……莉琉はコンピューターで再現した結瞳の第二人格じゃなかったのか？」

「あら、その理解は、あながち間違いではなくてよ」

ふふ、と霧葉は感心したように微笑んだ。

「江口結瞳の精神には、たしかにリリスとして受け継いだ邪悪な部分が含まれている。でも、それは独立した人格と呼べるほど完全なものではなかったの。〝ＬＹＬ〟というのは、結瞳の悪意の部分だけを抽出して、彼女の夢魔としての力を安定して引き出すための補助システムよ」

「不完全な人格をサポートしてる……って、結局、莉琉は、今でも結瞳の一部だってことか」

古城は、コテージで莉琉が口にした言葉を思い出す。結瞳がイヤなところだけを自分に押しつけたのだ、と莉琉は言っていた。人工的に造られた第二人格という莉琉の性質を考えれば、その表現は間違いではないのだろう。

結瞳の中の邪悪な部分だけで構成された、人工の不完全な魂。それが今や結瞳を乗っ取って、

レヴィアタンを支配しているのだという。

「クスキエリゼのコンピュータを破壊すれば、たしかに莉琉は消滅する。結瞳の一部に戻るだけ、というふうに考えることもできるけど、莉琉にしてみれば死と同じよ」

「そうなることがわかってて、どうして莉琉がブルエリを攻撃するんだ？」

古城は、噛み合わない会話にもどかしさを覚え始めていた。

レヴィアタンを制御しているのは、久須木ではなく莉琉なのだという。

それはまあいいだろう。そもそも莉琉はレヴィアタンを制御するために生み出された道具だ。

彼女が悪意を固めた人工知能という問題点に目を瞑れば、莉琉がレヴィアタンを動かすのは異常事態というほどのことではない。

だが、彼女がブルーエリジアムを攻撃するのは理屈に合わない。レヴィアタンの攻撃でクスキエリゼの研究所が破壊されたら、莉琉自身も消滅することになるからだ。

戸惑う古城を、霧葉は興味深げに眺めていたが、やがて見かねたように答えを口にする。

「それが莉琉の望みだからよ」

「え……？」

「世界から完全に消滅すること。それが莉琉の――いえ、江口結瞳の望みなのよ。世界最強の夢魔として覚醒してしまった江口結瞳は、そのせいでたくさんのつらい体験をしたから」

馬鹿な、と呟きかけて、古城は不意に思い出す。

それはみんなに嫌われちゃいますよ――と、莉琉はたしかにそう言っていた。まさにそれだ。

分身である結瞳が、実際に経験した出来事だったのだ。

「たとえば江口結瞳の両親やクラスメイトたちは、今も意識不明のまま病院で眠り続けているの。彼らの虐待から身を守るために、江口結瞳が夢魔の能力を暴走させてしまったせいで」

古城の沈黙を確認して、霧葉は満足そうに言葉を続けた。

「そのことで、江口結瞳は自分を強く責めたはずよ。何度も自殺したいと思ったでしょうね。でも彼女は死ぬわけにはいかなかった。なぜだかわかって？」

「……まさか……結瞳ちゃんが、リリスだから……！」

呟きを洩らしたのは、雪菜だった。その答えに霧葉は小さくうなずいて、

「正解よ。江口結瞳が死ねば、彼女が持つリリスの力は、世界のどこかにいる新たな適格者に受け継がれてしまう。その子に自分と同じ不幸を繰り返させないために、江口結瞳は死を選ぶことができなかったのよ。幼稚な自己犠牲だけど、感動的ではあるわね」

そう言って霧葉は目を伏せる。口調は冷ややかだが、結瞳の意志の強さに対して、霧葉なりに敬意を表してはいるのだろう。

「だけど、彼女がレヴィアタンの中で死ねば話はべつ。神々の生体兵器であるレヴィアタンは、強力な魔力障壁にすっぽりと覆われている。肉体を失ったリリスの魂は、障壁の外に出ることができずに、やがてレヴィアタンに取りこまれて消滅するわ」

「……結瞳は、レヴィアタンを自分の死に場所にするつもりだったってのか？　最初から死ぬつもりで、あんなものの中に――!?」

やり場のない怒りの衝動に襲われて、古城が声を震わせた。

自分が全部終わらせる、という結瞳の最後の言葉の意味を、古城もようやく理解する。

彼女は、たしかに終わらせようとしていたのだ。自分自身の命を。そしてリリスの魂が生み出す永遠の負の連鎖を――

「江口結瞳は、そのことを自覚していなかったはずよ。だから煌坂紗矢華に連れられて、クスキエリゼを脱走したりしたのでしょうね。だけど莉琉は知っていたわ。莉琉がクスキエリゼに協力していたのは、結瞳の無意識の願いを叶えるためだったの」

「そういうことかよ……だからおまえは、あのとき莉琉の人格を目覚めさせたんだな。コテージから結瞳を連れ戻すために」

「ええ、そうね。だからあのときも言ったのよ。あなたたちと争うつもりはない、って」

握っていた双叉槍の先端を雪菜に向けて、霧葉は苦笑した。

たしかに霧葉の言葉は正しい。彼女は結瞳の敵ではなかった。霧葉の行動は、結瞳の望みを叶えるためのものだったのだ。

ただし、その行動の結末を、古城たちが許せるかどうかは、また別の問題だ。

「すでに莉琉は、レヴィアタンを支配している。そして彼女自身を〝LYL〟も、江口結瞳が殺したがっている自分自身の一部なのだから」

霧葉がそう言って視線を海へと向ける。

レヴィアタンの姿はまだ見えない。だが、巨大な生体兵器の存在は、息苦しいような威圧感となって、水平線越しにもはっきり感じられる気がした。

「もしも〝LYL〟が破壊されたら、そのあと結瞳はどうなるんだ？」

「〝LYL〟のサポートなしでは、江口結瞳は夢魔の力を安定して引き出せない。レヴィアタンの支配を続けることは困難でしょうね。彼女の支配を離れたレヴィアタンは、再び海の底に戻って眠りにつくわ。絃神島本島に被害が出る前に、そうなってくれるといいのだけど」

「結瞳を腹の中に入れたまま、か……！　そんなことさせるかよ！」

目の前に立ちはだかる霧葉を睨んで、古城が叫ぶ。結瞳の目的がわかった以上、一刻も早く彼女を連れ戻さなければならない。ここで霧葉と話をしている時間すら惜しい。

「レヴィアタンを止めるつもり？　相手は神々の時代の生体兵器よ？」

霧葉が、逸り立つ古城を呆れ顔で見つめて訊いてくる。

古城は、ハッ、と吐き捨てるように獰猛に笑って、

「知ったことかよ。世界最強の吸血鬼なんて馬鹿げた肩書きを名乗っておいて、こんなときに役に立たなきゃ、いい笑いものだろうが！」

「そう……では、これをあなたに渡しておくわ」
霧葉が制服のポケットからキーホルダーを取り出して、それを古城に放ってきた。
古城は反射的にそれをつかみ取る。ありふれた形のキーホルダーに、ありふれた形の鍵が結びつけられている。
「これは……？」
「クスキエリゼが保有している高速船の鍵よ。格納庫の扉は開けてあるわ」
霧葉が無感動な口調で説明する。思いがけない人物からの贈り物に、古城は警戒することも忘れて唖然と霧葉を見返した。
「俺を止めないのか？」
「まともに戦って第四真祖を止められると思うほど、自惚れてはなくてよ」
冗談めかした口調で霧葉が言う。古城はチッと舌打ちし、
「いちおう礼を言っておいたほうがいいのか？」
「期待してないわ。第四真祖に恩を売るのは、それはそれで愉しそうだけど」
「つざけんな。俺たちが苦労してるのは、半分はおまえのせいだろうが！」
恨みがましく言いながら、古城は〝魔獣庭園〟の奥へと視線を向けた。浅葱が探してくれた地図によれば、船の格納庫があるのは、その先の岬の突端だ。
「待ってください、先輩――」

しかし走り出そうとした古城の背中を、雪菜が突然呼び止める。
霧葉と対峙する雪菜が浮かべていたのは、厳しい選択を突きつけられたような苦悩の表情だ。
「姫柊……？」
「聞いてください、先輩。妃崎霧葉が、その鍵を先輩に渡した目的は――」
なにかを告げようとする雪菜を見つめて、霧葉がかすかに頬を引き攣らせる。が、
「――行って、雪菜」
そう言って雪菜の声を遮ったのは、紗矢華だった。〝煌華麟〟を長剣の姿に戻した紗矢華が、その切っ先を霧葉へと向けている。
「でも、紗矢華さん……！」
「わかってる。こっちは私が引き受けるわ。江口結瞳をお願い。必ず助けてあげて――」
一瞬、紗矢華と目を合わせて、雪菜は言いかけた言葉を呑みこんだ。
わかりました、と無言で目を伏せた雪菜が、古城の傍へと駆け寄ってくる。
「行きましょう、先輩」
「お、おう」
わけがわからないままうなずいて、古城は走り出す雪菜の背中を追いかけた。
霧葉と紗矢華はそんな二人の後ろ姿を、しばらく無表情に眺めていたが、
「残念ね、煌坂紗矢華。あなたも彼らと一緒に行ってくれたら、手間が省けたのだけど――」

ふ、と先に苦笑したのは霧葉だった。

彼女が握る双叉槍の穂先が、音叉のように小刻みに震え出す。流しこまれた霧葉の呪力を、共振させて増幅しているのだ。

「あなたが暁古城に船の鍵を渡したのは、あの男がここで暴れて、〝ＬＹＬ〟を破壊されると困るからなんでしょ？」

半ば廃墟と化した〝魔獣庭園〟を見回して、溜息混じりに紗矢華が訊いた。

もしも古城が霧葉に戦いを挑んだ場合、彼が召喚した眷獣の暴走に、〝ＬＹＬ〟が巻きこまれる可能性があった。霧葉はそれを恐れたのだ。この〝魔獣庭園〟の惨状を見たあとでは、警戒したくなる霧葉の気持ちもよくわかる。

「江口結瞳は自分自身を憎んでいる。当然、自分の一部である莉琉のことも。だから彼女は、この島を襲ってくる。〝ＬＹＬ〟を消滅させるためにね。逆にいえば、ほかの誰かが先に〝ＬＹＬ〟を破壊してしまえば、彼女がブルーエリジアムを襲う理由はなくなるわけよね」

紗矢華は、そう言ってクスキエリゼの研究所を睨んだ。ブルーエリジアムを救うことだけが目的ならば、〝ＬＹＬ〟を破壊すれば用が足りるのだ。

ただし〝ＬＹＬ〟を破壊すると、レヴィアタンは海の底へと戻ってしまい、結瞳を救出する機会は永遠に失われてしまう――

だから雪菜は古城に言い出せなかったのだろう。眷獣で〝ＬＹＬ〟を破壊してくれ、とは。

霧葉が槍を構えて一歩前に出る。

「そうね。だから私はここに残ったの。〝ＬＹＬ〟を守るために」

「だったら話は簡単ね。あなたをぶっ倒して、〝ＬＹＬ〟を壊しに行くわ」

紗矢華も同じように間合いを詰めた。

最初に出会ったときには、霧葉の奇襲にやられたが、今回は相手の手の内もわかっている。条件は対等だ。二度も同じ相手に負けるわけにはいかない。

古城たちを結瞳の救助に向かわせたからには、〝ＬＹＬ〟の破壊は紗矢華の役目だ。そのためにも霧葉をここで倒さなければならないのだ。

「今度は手加減しなくてよ、舞威媛――」

「そういうことを言うと負けたときに恥ずかしいわよ、六刃神官――」

互いに皮肉をぶつけ合いながら、二人は間合いを詰めていく。

彼女たちの間を流れる時間が、一瞬、止まったかのような静寂が訪れた。

そして次の瞬間、廃墟と化した〝魔獣庭園〟に、二人の呪力が激突する轟音が鳴り響いた。

1

船はわかりやすい場所に泊まっていた。白と青に塗り分けられた、見るからに足の速そうな双胴船だ。想像していたよりも船体はでかい。全長二十メートル近くあるだろう。

魔獣の暴走騒ぎで避難したのか、付近にクスキエリゼの職員は見当たらない。

古城たちは誰にも邪魔されることなく、あっさりと船の操縦室に辿り着く。

「姫柊は島に残ってくれ。ここまで来ればあとは俺一人で十分だ」

後ろについてくる雪菜を振り返って、古城が言った。

このまま結瞳を追いかけたら、レヴィアタンとまともに出会ってしまう可能性が高い。相手は巨大な生体兵器だ。迂闊に近づけば、軍艦ですらない民間所有の高速船など、一瞬で沈められてしまうだろう。不死の属性を持つ古城はともかく、生身の雪菜を、そんな危険に晒すわけにはいかないのだ。

しかし雪菜は、頑なな表情で首を振り、

「一緒に行きます。先輩を一人で行かせるわけには行きませんから」

「だから駄目だって！　世界最強の魔獣に襲われるかもしれないんだぞ。危険すぎるだろ！」

「わたしは世界最強の吸血鬼の監視役なんですよ」

なぜか得意げに顎を上げて雪菜が言う。いやそんなこと俺に言われても、と戸惑う古城に、雪菜は急に真面目な口調で、

「それにわたしがいなかったら、船が沈んだときにどうするつもりですか。泳げないくせに」

「お、泳げないとは言ってねーだろ！　ただちょっと苦手なだけだ！」

「それに先輩が船酔いしたら、誰が面倒を見るんですか」

「姫柊――！」

冗談めかして微笑む雪菜を、古城が怒ったように睨みつける。

そんな古城の目を正面から見返して、雪菜が真剣な口調で言った。

「お願いです、先輩。一緒に行かせてください」

思い詰めたような雪菜の表情に、古城は一瞬気圧される。妙に真っ直ぐな彼女の瞳で、そんなふうに見つめられると弱い。

「――好きにしろよ、まったく」

「はい。そうします」

根負けしたように目を逸らす古城を見て、雪菜がホッとしたように微笑った。

古城は、防水ケースに入れた携帯電話を取りだして浅葱の番号をコールする。全長二十メートルもの高速船を、なんの知識も持たない古城が操縦するのはさすがに無理だ。ここはやはり彼女に頼るしかないだろう。

『はいはいもしもし』

少し遅れて、浅葱が応答した。なにやら取りこみ中なのか、妙に余裕のない口調だ。電話の向こう側では、休みなくキーボードを叩きまくっている気配がある。

「浅葱、船に着いたぞ。電源も入れた」

『悪いわね、古城。厄介なヤツに会っちゃって、こっちは手一杯なのよ。とりあえず案内係を送っとくから、あとはそっちで上手くやって』

「……あ、おい？」

どういう意味だ、と訊き返す間もなく、一方的に回線が切断された。

電話を握って立ち尽くす古城の耳元に、クックッと奇妙な笑い声が聞こえてくる。

高速船の操縦席――GPSナビの画面に映ったのは、どこか邪悪なぬいぐるみの形をした奇妙なアイコンだった。それは船に搭載された自動操縦装置を乗っ取って、勝手にエンジンを始動する。

「おまえ……たしか、浅葱の相方の……」

『モグワイだ。ワケあって、本来の姿じゃねえんだが。ま、よろしくな、お二人さん』

ぬいぐるみアイコンはそう言って、反応に困っている古城たちを嘲るようにケケッと笑った。桟橋を離れた高速船は、港内で滑らかに旋回し、白い波飛沫を立てながらグイグイと加速を始める。ふざけた口調とは裏腹に、モグワイの操縦の腕は意外に確からしい。

ただし燃費や乗り心地を一切無視した強引な運転だ。激しく揺れまくる船体に、古城はいきなり吐き気に襲われる。

どうにか目眩に耐えながら十五分ほど航行を続けていると、窓の外を見ていた雪菜が、あっ、と息を呑む気配がした。

「先輩、あれを――」

「島……か？　そんなものあったか、この方角に？」

雪菜が指さした方角に浮かび上がったのは、海面に浮かぶ群青色の塊だった。高速船が接近するにつれ、その姿は水平線を埋め尽くすほどに大きくなっていく。

見知らぬ島の姿を訝しむ古城を、雪菜は硬い表情で見つめて、

「いえ、たぶんあれがレヴィアタンです」

「……マジか、おい……!?　いくらなんでもでかすぎるだろ!?」

あまりの非現実感に、古城の口から虚ろな笑いが洩れた。

全長四キロという数字を、頭では理解していたものの、実際にそれを目にしたときの衝撃は予想以上だった。あんなものが自分たちと同じ生物だといわれても、まったく実感できない。比喩ではなく、クジラとアリくらいの差があるのだ。互いのスケールが違いすぎる。

そして結瞳たちを乗せた潜水艇らしき影は、レヴィアタン周辺のどこにも見当たらない――

「モグワイ、結瞳はどこだ？」

『クスキエリゼの潜水艇だったら、あのデカブツの中に入りこんだみたいだぜ』
「中に入った？　追いつけなかったのか――!?」
モグワイの素っ気ない返答に、古城は絶望的な気分でレヴィアタンの巨体を見上げた。
「せめて結瞳がどこにいるかわからないか？　居場所がわからなきゃ捜しようがないぞ、あんな化け物の腹の中なんか――！」
『ケケッ……俺にわかるわけねーだろ……と言いたいとこだが、〝ヨタカ〟って潜水艇の位置なら特定できなくもないぜ。例の〝LYL〟と繋がってるからな』
「そうか、研究所とデータのやりとりをしてるのか……結瞳もそこにいるんだな……!?」
『喰われて消化されてなければな』
「やめろ、縁起でもねえ！」
GPSナビ内のアイコンを睨んで、古城が怒鳴る。
おそらく〝ヨタカ〟には、LYL〟を構成する機器の一部が積みこまれているのだ。そのシステム間の通信を辿れば、潜水艇のおおまかな位置が判明する。結瞳もその近くにいるはずだ。
「なるべく結瞳ちゃんの近くに船を着けてください、モグワイさん」
古城の気持ちを代弁するように、雪菜が言った。
潜行機能を持たない高速船では、レヴィアタンの体内に入ることができない。結瞳を救出するためには、船を捨ててレヴィアタンに乗り移るしかないだろう。ブルーエリジアンニ号三

段を失ってしまうが、やむを得ない。今は結瞳のもとに辿り着くことを最優先に
『気楽に言ってくれるな、剣巫の嬢ちゃん。あのデカブツがちょこっと動くだけで、伝説級のビッグウェーブが味わえるんだがな……ま、やっては見るがな』
脅すような口調でそう言って、モグワイが船の舵を切る。
舳先が向けられたのは、海面を漂うレヴィアタンの正面だ。その巨体の胸元あたりと思える地点に、結瞳を乗せた潜水艇が入りこんでいるらしい。
そして古城たちの接近に気づいたように、レヴィアタンが頭部をゆっくりと動かした。
怪物にとってはかすかな身じろぎに過ぎないが、その動きによって攪拌された海面が激しく渦を巻いた。絶壁のような高波が、次々に高速船を襲ってくる。
「ぐお……っ」
波頭に乗り上げた高速船の船体が宙を舞い、古城たちを翻弄した。船の機関部が異音を放ち、船体が波打つように歪む。転覆せずに済んだのが、奇跡に思えるくらいの衝撃だ。
追い打ちをかけるようにレヴィアタンが放ったのは、大気を歪める濃密な魔力の波だった。至近距離からそれをまともに喰らって、古城はたまらず悲鳴を上げる。直接的な苦痛はないが、ガラスを爪でひっかくような騒音を頭の中で鳴らされている気分だ。
「ぐ……なんだよ、この気持ち悪いのは!?」
「魔力波動――！　たぶんレヴィアタンは、この反響を使って周囲の様子を調べてるんです！」

ちゃっかりと自分だけ〝雪霞狼〟で防御しながら、雪菜が言った。
古城は、耳元に残る魔力波動の余韻に顔をしかめながら、
「イルカが超音波でエサを探してるみたいなもんか……！」
『ケケッ……ってこては、奴さん、俺たちの接近に気づいたんじゃねーか？』
「――っ!?」
モグワイの素っ気ない忠告に、古城と雪菜が息を詰まらせる。
胸ビレと呼ぶには巨大すぎるレヴィアタンの肉体の一部が、海面を割って浮上した。
石油タンカーほどもありそうなそのヒレの表面には、クジラの噴気孔に似た深い穴がいくつも空いている。それを取り巻く群青色の鱗が、電子回路のように次々に発光した。眩い魔力の輝きが、穴の奥に蓄積されていく。巨大な砲弾を装填するかのように――
「ちょっと待て……あれって、まさか大砲か!?」
充塡された桁外れの魔力量を察知して、古城が声を上擦らせた。
あんなものを撃ち出されたら、古城たちの船などひとたまりもないだろう。下手すればブルーエリジアムすら一撃で沈む。最強の生体兵器の名に恥じない凶悪な武装である。
その無数の砲門のすべてが、ちっぽけな一隻の高速船に向けられている。
回避できる距離ではなかった。
爆音とともに放たれた閃光が、大量の海水を一瞬で蒸発させて、三十六メートルの水柱を噴き上げ

こしながら古城たちの船へと降りそそぐ。
その砲撃に立ち向かうように、操船室を飛び出したのは雪菜だった。
「――〝雪霞狼〟！」
高速戦の舳先に立った雪菜が、突きだした槍にありったけの呪力を注ぎこむ。
レヴィアタンの魔砲弾が襲ってきたのは、その直後だ。
槍が放つ神格振動波の輝きが、魔砲弾の爆発的な魔力を無効化し、砲撃の威力を斬り裂いていく。吸血鬼の真祖すら殺し得る破魔の槍は、神々の時代の生体兵器にも拮抗し得るのだ。
魔砲弾の閃光が消失し、衝撃波が高速船の船体をもみくちゃに揺らした。
だが、船そのものは無事だった。雪菜の咄嗟の判断が、船と古城を救ったことになる。
「姫柊！　無事か!?」
「はい。どうにか……どうやら魔力を収束してビームのように撃ち出したもののようですね。とてつもない威力でしたけど――」
甲板に片膝を突きながら、雪菜は荒い息をついている。たった一人でレヴィアタンの砲撃を防ぎきったのだ。消耗するのも無理はない。
だが、攻撃を凌いで息をつく間もなく、レヴィアタンが次の攻撃を仕掛けてくる。海面下に沈むレヴィアタンの巨体のどこからか、稚魚のような物体が射出されたのだ。
その数は全部で百体を超えているだろう。

稚魚たちは白い泡の軌跡を残しながら、凄まじい勢いで高速船へと殺到してくる。海面下を迷いなく進むその動きは、敵艦に襲いかかる魚雷の姿にそっくりだ。

稚魚といっても、レヴィアタンと比較した場合のサイズである。個々の大きさは古城たちの船と大差ない。そんなものに至近距離で爆発されて無事で済むはずがない。

「先輩！」

「今度は魚雷かよ――！」

雪菜が青ざめた顔で振り返り、古城が焦りに歯噛みする。〝雪霞狼〟が無効化できるのは魔力だけ。実体を持つ生体魚雷が相手では役に立たない。

「くそ――疾く在れ、〝水精の白銅〟！」

追い詰められた古城は仕方なく眷獣を召喚した。第四真祖の眷獣が撒き散らす膨大な魔力は、確実にレヴィアタンを刺激するだろう。それがわかっていてもほかに打つ手がない。

召喚したのは、水流のように透き通った姿を持つ水の精霊――水妖だ。美しい女性の上半身と、巨大な蛇の下半身。流れ落ちる髪も無数の蛇。

それは爆発的な激流と化して海中で加速し、生体魚雷の群れに突っこんだ。鉤爪を生やした繊手が生体魚雷を次々に薙ぎ払い、爆発することすら許さず消滅させる。

水妖の能力は、再生と回復だ。ありとあらゆる物体を、出現する前の状態にまで還元する。すべてを無に帰す破壊的な癒しの力なのだ。

その水妖に護られた高速船は、生体魚雷の群れを突破してレヴィアタンへと近づいていく。それに業を煮やしたように、レヴィアタンが新たな攻撃を放った。

生体兵器の巨体から、無数の青い影が空中に向かって打ち出される。

それらは鮮やかな放物線を描きながら、海面へと向かって加速した。クジラの背中に止まっていた海鳥たちが、一斉に飛び立つ姿を連想させる光景だ。

ただし、海面へと降りそそいでくるのは海鳥などではない。高速で飛来する生体ミサイルが、巨大な水柱を巻き起こしながら爆発する。

「対艦ミサイル!?　空からも来るのか！　神々の時代の生体兵器は至れり尽くせりだな！」

絶え間なく降りそそぐ生体ミサイルには、大量の液体爆薬が詰めこまれているようだった。下手に撃ち落とせば、その爆薬が撒き散らされて周囲に被害をもたらすことになる。

だからといって、このまま手をこまねいて眺めているわけにもいかない――

「く……疾く在れ、〝甲殻の銀霧〟――！」

古城は二体目の眷獣を召喚した。

銀色の霧に包まれた甲殻獣が、飛来する生体ミサイルを次々に霧化して消滅させていく。

それでもレヴィアタンの攻撃は止まらない。絶え間なく襲来する生体魚雷とミサイルに、さしもの第四真祖の眷獣も防戦一方に追いこまれていた。

このまま集中砲火を浴び続ければ、いずれ数で押し切られるのも時間の問題だ。

「仕方ないか、畜生！　獅子の黄金よ！」

古城がさらに新たな眷獣を喚び出す。

こちらから攻撃を仕掛けることで、レヴィアタンの注意を逸らすのが目的だ。いかに世界最強の魔獣といえども、第四真祖の眷獣の攻撃を喰らって、無視するわけにもいかないはずだ。

爆発的な電流をまとった雷光の獅子が、稲妻と化してレヴィアタンを襲った。

ギュバアアアッ――と、悲鳴のような轟音に大気が割れ、雷光が海面を黄金に染める。

かつて紘神島を構成する四基の人工島の一基を、うっかり焼き払いそうになった、いわくつきの眷獣である。しかしレヴィアタンが相手なら、多少暴走しても問題ない。手加減することを考えなくていいぶん、むしろ制御が楽なくらいだ。

青白い閃光がレヴィアタンの巨体を包みこみ、長大な尻尾の根元を焼いた。

群青色の分厚い鱗が、粉砕されてバラバラと海面に落下する。

だが、レヴィアタンの動きに変化はなかった。眷獣の攻撃を歯牙にもかけないというふうに、悠然と浮かび続けている。

「――効いてないのか!?」

「魔力障壁で防いだんです……！」

愕然と呟く古城の隣で、雪菜が冷静に呟いた。

「障壁？　バリアみたいなものか……？」

「はい。それも極めつけに強力なものです。第四真祖の眷獣だったから、いちおうは撃ち抜くことができましたけど――」

「魔力障壁に威力を喰われて、あの巨体を焼き払うとこまではいかないってわけか……」

古城は小さく舌打ちする。

眷獣の直撃を喰らったレヴィアタンの表面には、深さ十メートル近い破壊の爪痕が刻みこまれていた。普通の魔獣なら、それだけでも十分に致命傷だ。しかしレヴィアタンの巨体にとっては、ひっかき傷に毛が生えた程度のダメージでしかない。

「こいつは……外側からじゃ、ラチがあかないな」

古城が半ば呆れたような表情で分析する。ただでさえ規格外の巨体に加えて、頑丈な魔力の楯だ。核弾頭の直撃でも斃せるかどうか微妙な相手である。

「どのみち結瞳ちゃんを連れ戻すには、中に入るしかないですよね」

雪菜が開き直ったように同意する。

レヴィアタンまでの直線距離は、残り一キロを切っていた。だが、このまま平穏な形で船を着けることはどうやら無理そうだ。

「モグワイ、本当に結瞳はあの中にいるんだな!?」

GPSナビの画面に向かって古城が怒鳴った。

邪悪なぬいぐるみのアイコンは、やたら人間臭く無責任に笑って、

『ケケッ、悪いな。どのみち舵が利かねえんだ。このまま真っ直ぐ突っこむぜ――！」

そう言って船体を更に加速させる。体当たり前提の無茶な速度だが、そうでもしなければ、レヴィアタンの周囲の荒れた海面を乗り切れないのだ。

「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」

再び船の舳先に立った雪菜が、槍を構えてしなやかに舞った。

目を閉じた彼女が視ているのは、レヴィアタンの周囲に張り巡らされた分厚い魔力障壁だ。その障壁をどうにか突破しない限り、レヴィアタンに辿り着くことはできない。障壁に激突して、船は木っ端微塵に砕け散るだろう。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え――！」

カッと目を開いた雪菜が、銀色の槍を一閃した。

彼女の〝雪霞狼〟は魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く獅子王機関の秘奥兵器だ。レヴィアタンの無敵の魔力障壁をも易々と裂いて、高速船の進路を切り開く。

「――疾く在れ、〝龍蛇の水銀〟！」

迫り来るレヴィアタンの巨体に向けて、古城が四体目の眷獣を召喚した。

水銀色の双頭龍は、あらゆる次元ごと空間を喰らう〝次元喰い〟だ。その巨大な顎が、レヴィアタンの強靭な鱗を食い破り、体内へと続く空洞を穿つ。

そして古城たちを乗せた高速船は、海水を巻きこみながらレヴィアタンの体内へと突入した。

敵の姿を見失った巨大な魔獣が、猛り狂ったような咆吼を放つ。

それは、まるで海そのものが怒りに打ち震えているような、世にも恐ろしい光景だった。

2

そのころ藍羽浅葱はコテージの女子部屋に引き籠もり、キーボードを叩き続けていた。

めずらしく化粧っ気なしの艶やかな肌に、うっすらと汗が浮いている。強く引き結んだ唇の端は、不機嫌そうに引き攣っていた。戦況があまり思わしくないのだ。

むしろ敗色濃厚というべきか――

『中継サーバーの〝防壁〟を抜かれたぜ、嬢ちゃん。いちおうウィルスをばらまきつつ逆ハッキングを仕掛けてるが、せいぜいもって二十秒ってとこだな』

モグワイが他人事のような呑気な口調で解説してくる。浅葱はむっつりと頬を膨らませて、

「さすが〝戦車乗り〟、手際がいいわね。手持ちのプロキシはあと何台残ってる？」

『残り一万二千台。こちらからの攻撃は圧倒的に演算速度が足りねェな。〝戦車乗り〟の嬢ちゃんが、紋神島本島の交通管制システムに一斉アクセスを仕掛けてきてやがる」

「モグワイの処理容量を奪うつもり!?　えぐいことをしてくれるわね！」

〝戦車乗り〟の容赦ない攻撃に、浅葱が焦りの表情を浮かべた。

浅葱の相方であるモグワイの本体は、人工島管理公社が保有する五基のスーパーコンピューターである。その本来の機能は、絃神島の維持管理。電力、水道、交通管制、ゴミ処理から庁舎のエアコンの温度設定まで――人工島である絃神島は、モグワイがいなければ最低限の都市機能を維持することさえできないのだ。

浅葱は、人工島管理公社の非常勤職員の特権で、モグワイの余った処理能力の一部を、個人的にこっそり借りて使っている。逆に言うと、処理能力に余裕がなければ、モグワイの力を借りられないということだ。

〝戦車乗り〟はそれを知った上で、絃神島の交通管制システムに攻撃を仕掛けてきた。モグワイの注意をそちらに向けさせることで、浅葱の戦力を奪おうとしているのだ。

浅葱がそれでも無理にモグワイを使おうとすれば、絃神島の交通管制が麻痺して、最悪、無関係の住民が事故に巻きこまれることになってしまう。いわば浅葱は、絃神島を人質に取られたというわけだ。ただでさえ戦力不足な今の浅葱にとっては、大きすぎるハンデである。

『このままじゃ、嬢ちゃんの恥ずかしいポエムが流出するのも時間の問題だぜ。どうする？』

ほとんど役立たずな置物と化したモグワイが、無責任に訊いてくる。

浅葱は苛々と髪を振り乱し、

「だからポエムなんか書いてないってのよ……！」

『ケケッ、若いころのいけてない写真も見られちまうかもな』

「いけてない言うな！　たしかに今よりはちょっとアレだけど……！」

古城に出会う前の地味な黒髪眼鏡だった自分を思い出し、浅葱は、うがーっ、と頭を抱えて叫んだ。あれはあれでマニアックな需要があったと思うのだが、今となっては、ただひたすら恥ずかしい。

『そろそろ投了する気になったでござるか、女帝殿。潔く散るのも武士の誉れでござるぞ』

「あたしは武士じゃなくて、ただのバイト女子高生だってのー――！」

〝戦車乗り〟の忠告に、浅葱が気怠く反論する。

「それに勝てる勝負をわざわざ投げる理由がないでしょうが」

『この期に及んでの虚勢は滑稽でござるな。察するに女帝殿は、ろくに男性経験もないくせに見栄を張って経験豊富なふりをして、本当のことが言い出せなくなるタイプでござろう？』

「小学生のお子様が知ったふうな口を利くなああ――っ！」

浅葱は思わず顔を赤くして怒鳴り返した。あながち外れてもいないだけに余計に腹が立つ。

それに、まともなやり方では勝ち目がないのも事実だ。並のハッカーが相手ならともかく、今戦っている相手は、リディアーヌ・ディディエ。大企業ディディエ重工が育てた超エリートにして、有脚戦車の実証試験のために絃神島に派遣されてきた天才少女なのだから――

そうか、と浅葱は愉しげに唇の端を吊り上げる。

「モグワイ、残りのプロキシは全部囮に使っていいわ。一分三十秒だけもたせて」

『ケケッ……ようやくらしくなってきたじゃねえか、嬢ちゃん』

モグワイが浅葱の思考を読み取ったように笑い出した。ひたすら防御だけに専念するのなら、処理能力の大半を奪われた今のモグワイでもなんとかなる。

『今さら防御を固めても無駄でござるよ。このまま包囲して擂り潰させてもらうでござ――』

浅葱たちの往生際の悪さに失望したように息を吐き、〝戦車乗り〟は最後の攻撃を仕掛けようとした。が、そんな彼女の口から洩れたのは、あなや、という驚愕の声だった。

浅葱のパソコンの画面を埋め尽くしていた警告表示が、突然、波が引くように消えていく。〝戦車乗り〟の攻撃が止まったのだ。いや、攻撃力を奪われた、というべきか――

逆に浅葱が仕掛けた反撃が、〝戦車乗り〟側の防壁を破ってシステムを陥としていく。

すべてのセキュリティを失った〝戦車乗り〟に、もはや戦闘継続能力は残されていない。今の彼女は丸裸も同然だ。

『――こ、この女帝殿の攻撃!? ネウストリアから?』

浅葱のハッキング経路にようやく気づいて、〝戦車乗り〟がくぐもった声を出す。

ネウストリアとは北海帝国の属州。ヨーロッパ大陸の西端に位置する都市国家だった。精密機器と兵器開発を主産業とする小国で、〝戦車乗り〟ことリディアーヌ・ディディエの出身地でもある。

そして浅葱は、〝戦車乗り〟が管理するクスキエリゼの研究所でよく、あと一歩で騙れた

ネウストリアを経由して彼女を攻撃した

それがなにを意味しているのか、〝戦車乗り〟はまだ気づいていない。

「あー……さすがに今回はちょっと焦ったわ。迎撃屋を名乗るだけあって、たいした防御力だったわよ、〝戦車乗り〟。あんたのセキュリティに穴がなかったらあたしでもヤバかったかも」

ベッドの上で背伸びをしながら、浅葱が言う。その言葉に〝戦車乗り〟がうろたえる。大人ぶっていても、彼女はまだ小学生だ。圧倒的に有利だったはずの自分の敗北が、いまだに受け容れられないのだろう。

『馬鹿な……拙者のシステムに脆弱性などあるはずが……』

「そう?」

浅葱が微笑んで首を振った。

「あんたって、ディディエ重工ご自慢のエリート・チャイルドだったわよね。あんたが着てるごっつい有脚戦車も、ディディエの試作品じゃなかったっけ?」

『……まさか、ディディエ重工のコンピューターを乗っ取って、踏み台にしたのでござるか? 相手は軍事機器メーカーでござるぞ!?』

「あんたがガチガチに護ってるクスキエリゼのサーバーを直接攻撃するよりは楽でしょうよ」

驚愕している〝戦車乗り〟に、浅葱は事も無げに言い放つ。

〝戦車乗り〟が着こんでいる有脚戦車は、ディディエ重工製の試作品だ。実証試験によって得られたデータを、定期的にディディエ重工に送信することになっている。

浅葱が狙ったのは、そのための専用通信回線だった。

ディディエ重工本社のコンピューターを乗っ取ってしまえば、有脚戦車に侵入するのは簡単だ。もちろんそのためには、軍事企業であるディディエ重工のセキュリティを突破しなければならないのだが、その程度、浅葱にとっては、どれほどの障害でもない。

『女帝殿……最初から〝LYL〟ではなく、拙者の〝膝丸〟を狙って……！』

打ちのめされたような口調で〝戦車乗り〟が言う。〝膝丸〟というのが、彼女の戦車の名前なのだろう。そして、その〝膝丸〟は今や完全に浅葱の制圧下にある。もはや〝戦車乗り〟は、ハッキングどころか、自力で戦車から降りることもできないのだ。

「喧嘩をふっかけてきたのはそっちなんだから、悪く思わないでよね。おかげで〝LYL〟には正面から堂々と入れるわ。武士の情けで、あんたのポエムをばらまくのは勘弁してあげる」

じゃあね、と言い残して浅葱は〝戦車乗り〟との会話を打ち切った。

思わぬ邪魔が入って時間を取られたが、浅葱にはまだ〝LYL〟の乗っ取りという、本来の仕事が残っているのだ。

『ケケッ……ところで、嬢ちゃん。なんだ、このプログラム？』

ようやく本来の性能を取り戻したモグワイが、いつもの人間臭い声で訊いてくる。

モグワイが興味を示しているのは、浅葱が〝戦車乗り〟の攻撃に使った防壁突破用の新しいアプリケーションだ。

しかし浅葱は、そのアプリケーションを邪魔くさそうにあっさり削除して、

「ああ、それね。既存の攻撃用アルゴリズムじゃ、ハッキングが間に合わないと思ったから、即興で作ったのさ。もうちょっと改良すれば汎用性が上がると思うんだけどね」

『他人に地味な防御を任せて、こんな面白ェことやってたのかよ』

「なに文句たれてんのよ。あんたはそのための補助人工知能でしょうが」

浅葱とモグワイが、平然と軽口を叩き合っている。それは彼女たちにとっての、日常の光景なのだろう。しかし〝戦車乗り〟――リディアーヌ・ディディエは、動けなくなった戦車の中で、その会話を聞きながら戦慄していた。

藍羽浅葱という少女は、自覚していないのだ。自分がどれほどデタラメな能力を持っているのかということを。彼女が即興で作ったというアプリケーションには、世界各国の諜報機関が、死人を出して奪い合うほどの価値があったはずだ。そのことにすら彼女は気づいていない。

『間違いではなかったのでござるな、女帝殿……貴殿は、やはり……』

リディアーヌ・ディディエが、膝を抱えて哀しげに呟く。

だが、その声は、浅葱にはもう届いていなかった。

3

「〝霧豹・双月〟――」

音叉を思わせる二股の槍が、大気を抉るようにして突き出されてくる。

槍がまとっているのは、疑似空間切断の呪術。本当に空間を斬り裂いた際に生じる結果を、呪術的に再現するという極めて高度な術式だ。それは本来、紗矢華の〝煌華麟〟が持つ能力である。妃崎霧葉の乙型呪装双叉槍が、その術式をコピーしたのだ。

「〝煌華麟〟！」

しかし紗矢華は焦ることなく、銀色の長剣を一閃する。

長剣の軌跡は虚空に擬似的な空間の裂け目を生み出して、絶対無敵の防御障壁を生み出した。空間切断の効果は一瞬だが、霧葉の攻撃を防ぐにはそれで十分だ。

「呪力を増幅する乙型呪装双叉槍――たしかに厄介な武器だけど、ネタがわかってれば防ぐのは難しくないわね」

「……それはあなたの六式重装降魔弓も同じことよ、煌坂紗矢華」

槍を構え直しながら、霧葉が冷ややかに告げてくる。

「なのに、その程度で勝ち誇るようでは、あなたの器の大きさも知れるわね。式神も呪矢も、

もう残ってないのでしょう？　第四真祖や魔獣相手に呪力を使って消耗したあなたに、六刃である私が後れを取ることはあり得なくてよ」

「ご忠告どうも――だけど、獅子王機関の舞威媛をあまり舐めないでよね」

霧葉の毒舌に苛ついた表情を浮かべて、紗矢華が皮肉っぽく言い放った。

次の瞬間、霧葉の足元の地面に深い亀裂が走る。〝煌華麟〟の空間切断による反撃だ。

紗矢華が連続して放つ斬撃を、霧葉は後退して避け続けるしかない。

空間ごと斬り裂く〝煌華麟〟をまともに受け止めようものなら、霧葉の双叉槍は確実に切断されてしまう。しょせん乙型呪装双叉槍の能力は物真似――本物には敵わないのだ。

そして霧葉を攻める紗矢華に、手加減はない。

最初に出会ったとき、紗矢華には、丸腰の霧葉を斬ることにためらいがあった。

強すぎる〝煌華麟〟の威力が裏目に出て、紗矢華は本来の力を発揮できなかった。だが今は、あのときとは事情が違う。ブルーエリジアムを訪れている多くの人々の命がかかっているのだ。

霧葉が〝LYL〟を護るというのなら、紗矢華は彼女を倒さなければならない。

そんな紗矢華の決意に苛立つように、霧葉が表情を険しくする。

「江口結瞳が自らの死を選択した時点で、あなたの任務は終わりよ、煌坂紗矢華。これ以上、私たちが戦う理由はないのではなくて？」

「それはどうかしら。あなたはまだ自分の目的を果たしてないはずなんだけど？」

紗矢華はそう言って、挑発的に笑ってみせた。

表情を消した霧葉が、動きを止める。どうやら図星だったらしい。

「レヴィアタンを――本来排除するべき魔獣を使ってブルーエリジアムを沈めようというのは、太史局にしか思いつかないやり方だけど、そんなことをすれば当然、ここにいるあなたも無事では済まない。貴重な六刃を犠牲にしてまで、太史局がこの島を沈めようとしている理由はなに？」

紗矢華が静かな声で質問した。

いまだに信じられない話だが、ここまで来たら認めるしかないだろう。太史局は本気でブルーエリジアムを沈めるつもりなのだ。だがその理由が、紗矢華にはどうしてもわからない。

そして、もはや隠す理由もないと考えたのか、霧葉はあっさりと答えを口にする。

「太史局の目的は、藍羽浅葱の抹殺よ――」

は、と紗矢華が間の抜けた声を洩らした。

「藍羽浅葱って……え、藍羽さん!?　暁古城のクラスメイトの美人の……？」

浮き足だった紗矢華が、言わなくてもいい個人的な印象までポロリと口にする。

霧葉はなにも答えない。彼女の言葉が嘘ではないと、その沈黙が語っていた。

「どうして藍羽さんを……？」

紗矢華の声が困惑で震える。

命を狙われていたのが、暁古城なら、紗矢華も驚かなかっただろう。あの少年は世界の軍事バランスを崩壊させかねない第四の真祖。世界最強の吸血鬼なのだから。

しかし藍羽浅葱はただの一般人だ。彼女一人を抹殺するために、完成したばかりの人工島を潰すのは、どう考えても割に合わない。そんなことをしなくても、霧葉の戦闘能力なら、彼女をいつでも殺せたはずだ。

そんなふうに紗矢華が抱く疑問のすべてに、霧葉はたったひと言で答えてくる。

「藍羽浅葱が、カインの巫女だからよ」

「カインの……巫女……？」

「恋敵の正体も知らなかったの、舞威媛？」

クス、と霧葉が小さく笑った。いい加減、聞き慣れた彼女の毒舌。だが今は、ほんの少しだけ紗矢華を本気で哀れむような響きが混じっている。

おそらくは友人を不本意な形で失ってしまう紗矢華への哀れみが――

「ほっときなさいよ……って、だ、誰が誰の恋敵!?」

「――カインの巫女の存在は、いずれ〝聖殲〟の引き金になる。獅子王機関と人工島管理公社は、藍羽浅葱を利用するつもりでいるみたいだけど、太史局は、それを危険だと考えた」

紗矢華の抗議を無視して、霧葉が続けた。

政府の内部は一枚岩ではない――それはたしかに、彼女が紗矢華に告げた言葉だ。

カインの巫女を利用するか、それとも抹殺するべきか。政府内の上級攻魔官の中でも意見が割れていた。そのことが獅子王機関と太史局の対立の原因だったのだ。

「だからって、どうしてそれがブルーエリジアムを沈めることになるの……!?」

「紘神島にいる限り、藍羽浅葱は誰にも殺せないからよ」

「……殺せない？」

突拍子もない霧葉の発言に、紗矢華は疑問を感じる。

たとえカインの巫女と呼ばれていても、藍羽浅葱の肉体は普通の人間のものだ。太史局の六刃の力をもって殺せないはずがない。

しかし霧葉は、槍の穂先を、そっと足元の地面に突き立てて、

「ブルーエリジアムを含めた、この紘神島は、自然の摂理に逆らって造り出された人工の都よ。大地に呪われた存在であるカインにとって、この島は、それ自体がひとつの巨大な祭壇なの。この島のすべてが彼女の味方。ありとあらゆる偶然と必然が彼女を護るわ」

「そんな馬鹿な……！」

咄嗟に反論しようとした紗矢華は、以前に目にした報告書の記述をふと思い出す。

あれはひと月ほど前の〝賢者の霊血〟事件の最中――暁古城たちの目の前で、藍羽浅葱

は一度、絶命したのだという。だが、それからすぐに彼女は生き返った。古の大錬金術師ニーナ・アデラードの手によって復活したのだ。

それはただの偶然として処理され、誰もその結末に疑問を抱くことはなかった。

だがそれは、その偶然が彼女を護ったのだ、と考えることもできる。

「紘神島は、カインの巫女のために用意された舞台よ。紘神島の上にいる限り、誰も藍羽浅葱を殺すことはできない。たとえ第四真祖でも。七式降魔突撃機槍を使っても――」

無感情な霧葉の説明に、紗矢華はぞっと寒気を覚えた。

吸血鬼の真祖すら弑し得る〝雪霞狼〟でも殺せない――それは藍羽浅葱が、第四真祖以上の怪物だということではないのか？

「藍羽浅葱を殺すためには、まずは紘神島を破壊しなければならない。だから太史局は、レヴィアタンを利用する計画を立てた。幸いなことに、レヴィアタンの制御に必要な道具は、すべてクスキエリゼの会長が準備してくれたしね」

霧葉が、半壊したクスキエリゼの研究所を一瞥する。

世界最強の夢魔たる江口結瞳も、彼女の力を引き出すための〝ＬＹＬ〟も、すべてクスキエリゼが用意したものだった。

太史局はなにもしていない。ただ、世界最強の魔獣を制御するという夢を吹きこんで、久須木和臣という男をそそのかしただけ。彼が死ねば、もはやなんの証拠も残らないのだ。

「そうやってクスキエリゼを利用して、罪を彼らに全部押しつけたわけね」
「彼に同情はしているわ。レヴィアタンを使って久須木がやろうとしていたことを考えれば、当然の報いだとも思うけど」
非難の眼差しを向けてくる紗矢華に、霧葉は肩をすくめてみせる。
「もっとも、獅子王機関は太史局の計画に気づいていたみたいね。彼らが藍羽浅葱をブルーエリジアムに連れてきてくれたおかげで、私たちも絃神島本島を破壊目標から外すことができた。このまま上手くいけば、被害は最小限に抑えることができるでしょう」
「……残念だけど、その計画は失敗よ」
ふう、と紗矢華が面倒臭そうに溜息をついた。
霧葉が、ムッと眉根を寄せる。
「どうして？」
「暁、古城と雪菜がレヴィアタンを止めて、江口結瞳を連れ戻すから。ついでに、私があなたをぶっ飛ばして、くだらないことを考えた太史局の幹部を全員更迭してあげる」
「できもしないことを偉そうに言うものね。獅子王機関の舞威媛ごときが。殺すわよ――！」
物騒な台詞を言い終える前に、霧葉の槍が突き出された。
紗矢華は右に跳んでかわす。その動きを霧葉は読んでいる。六刃の霊視。獅子王機関の剣巫と同様に、霧葉は一瞬先の未来を視ている。霧葉の攻撃はよけられない。

だが、そのよけられないはずの攻撃を紗矢華はよけた。霧葉が視たはずの未来よりも、更に早く動くことで――
「辰星／歳刑！」
紗矢華の蹴りが霧葉を襲う。
霧葉はそれを槍の柄で受けた。しかし爆発的な蹴りの威力が、ガードごと霧葉を吹き飛ばす。
「な……!?」
手首の痺れに、霧葉がうめいた。身長に恵まれた紗矢華だが、筋肉質な体型とはほど遠い。ほっそりとした彼女の蹴りに、霧葉を圧倒するほどの威力があるはずがないのだ。
「この速度……！　呪的身体強化!?　まさか、こんな強力な――」
「獅子王機関の舞威媛は、呪詛と暗殺の専門家よ。もちろん自分自身に呪詛をかける方法だって熟知してるんだけど」
特に勝ち誇るでもなく、紗矢華が告げる。
呪力によって、自らの反応速度や筋力を一時的に増幅する呪的身体強化は、多くの攻魔師が使うごく基本的な技術だ。
しかし紗矢華が使う身体強化の増幅率は、霧葉の知る限界値を遥かに超えていた。
わずかでも制御をしくじれば自滅に直結するほどの危険な呪詛で、紗矢華は自らを縛っている。呪詛の専門家である舞威媛ならではの、非常識な戦術だ。

「六刃の霊視よりも疾く動けるというの――!?　煌坂紗矢華！」

霧葉の反撃が当たらない。たとえ未来が視えていても、紗矢華の速さに追いつけない。だが、それだけじゃないけど、と紗矢華は冷ややかに首を振り、

「雪菜にやられたダメージが残ってるんでしょ、妃崎霧葉。今のあなたが相手なら、百回戦ったって百回勝てるわよ。それに、そろそろ効いてきたんじゃないかしら？」

「――っ!?」

霧葉の手から槍が落ちた。突然、握力をなくした自分の右手を見つめて、霧葉は愕然とした表情を浮かべる。紗矢華の蹴りを受けたことだけが痺れの原因ではない。

あらかじめ霧葉の右手に仕掛けられていた呪詛が、紗矢華の合図を受けて発動したのだ。

「拘束術式……いつの間に!?　私はあなたに触れてない……のに！」

獅子王機関の舞威媛は、呪詛と暗殺の専門家だ。それを知る霧葉は、決して紗矢華に触れようとはしなかった。紗矢華が霧葉に呪詛を仕掛ける機会はなかったはずなのだ。

「そうね。私に直接は、ね」

そう言って紗矢華は、銀色の長剣を地面に突き立てる。それを見た霧葉が小さく息を呑んだ。

「感染呪術！　六式重装降魔弓の柄に、最初から呪詛を仕込んでいたというの？」

霧葉は、紗矢華に触れていない。だが、彼女の剣は握った。その段階で紗矢華の呪詛は成立していたのだ。もしも紗矢華が本気なら、彼女はそのとき霧葉を呪殺することもできたはずだっ

た。あのとき手加減されていたのは、霧葉のほうだ。

その事実が、霧葉の誇りをひどく傷つける――

「黒雷――！」

全身に残るすべての呪力を漲らせて、霧葉が跳んだ。呪的身体強化が使えるのは紗矢華だけではない。限界以上に筋力と反応速度を増幅し、霧葉は必殺の攻撃を放つ。すでに霧葉の身体能力は紗矢華と同等。たとえ右腕が使えなくても、格闘戦に持ちこんでしまえば、六刃である霧葉の勝利は動かない――

「塡星／歳破！」

だが紗矢華は、手放した長剣を拾い上げようともせずに、逆に霧葉の懐へと潜りこんできた。そして人体の急所に向けての零距離からの一撃を放つ。すでに限界を超えた速度で動いていた霧葉は、その攻撃を防げない。

「八将神法……獅子王機関の無音暗殺術……！」

横隔膜に打撃を受けた霧葉が、苦しげな声を絞り出す。

「格闘戦なら舞威媛に勝てると思った？　私は暗殺の専門家よ？」

紗矢華がやれやれと息を吐いた。

実際のところ、彼女と霧葉の戦闘能力に差はなかった。霧葉はたしかに雪菜にやられたダメージを引きずっていたが、紗矢華はそれ以上に消耗していたし、舞威媛の呪的身体強化は長時

間使えるような便利な代物ではない。紗矢華が霧葉に見せつけた優位性は、すべてハッタリ。駆け引きの材料だったのだ。

だがその紗矢華のハッタリが、霧葉を焦らせ、彼女の本来のペースを乱した。

霧葉は対魔獣戦闘の専門家。そして紗矢華は暗殺者

魔獣にハッタリは通用しないが、人間相手には駆け引きが成立する。紗矢華が霧葉に勝っていたのはその一点。駆け引きの通用する相手と戦ってきた経験の有無だけだった。

「たしかに、あなたを侮ったのは失敗だったみたいね、煌坂紗矢華。でも、手遅れよ。今さら〝LYL〟を壊しても、もうレヴィアタンの攻撃は止められなくてよ――」

自らの敗北を悟った霧葉が、そう言って無理やり微笑んだ。

かもね、と紗矢華は肩をすぼめる。

水平線の彼方には、すでにレヴィアタンの巨影がうっすらと浮かび始めていた。たとえ今すぐ〝LYL〟を破壊しても、あの怪物がブルーエリジアムを見逃してくれるとは限らない。

「あなたと勝負出来て愉しかったわ、煌坂紗矢華。私を止めてくれて、ありがとう――」

最後にそう言い残して、霧葉が気を失う。

任務のためとはいえ、無関係な大勢の人々の命を奪うことに、彼女なりに苦悩を覚えていたのかもしれない。虐殺の実行犯として、ブルーエリジアムの最後を見届ける――その重責から解き放たれた霧葉の表情はどこか安らかだ。

そんな彼女の満足げな態度に、紗矢華は軽い羨望を覚えながら、

「なにがありがとうよ……勝手に諦めないで欲しいんだけど！」

疲れた身体を引きずって、紗矢華は研究所へと歩き出す。

紗矢華は〝LYL〟の破壊を諦めない。

たとえ間に合わないと言われても、諦められない理由がある。

紗矢華は一人で戦っているわけではない。古城と雪菜がレヴィアタンに向かったのだ。

レヴィアタンの強大さに疑う余地がないのと同様に、彼らがなんとかしてくれるということを疑うことなく信じられる。

「……この私が信じてあげてるんだからね、暁古城……なんとかしなさいよ！」

紗矢華は、無意識に自分の首筋に触れながら呟いた。紗矢華の剣に腹を貫かれて、それでも彼女を救ってくれた少年のことを、紗矢華が信じないわけにはいかないのだ。

だから紗矢華は諦めない。諦める理由がないのだった。

4

その異変に古城たちが気づくまで、それほど時間はかからなかった。

減速するような感覚とともに、規則的に続いていた生体兵器体内の振動が止まる。残されたの

は波間を漂うような緩やかな揺らぎだけ——レヴィアタンが泳ぐのをやめたのだ。

「レヴィアタンが……止まった？」

古城が意味も無く頭上を見上げて呟いた。雪菜も困惑したように周囲を見回している。

彼らがいるのは、レヴィアタン内部の空洞の中だ。

航空母艦の格納庫に似た広大な空間——

神々によってそのように設計されたのか、自ら進化したのかは不明だが、生体兵器であるレヴィアタンが、護衛の小型生体兵器を搭載するために用意した空間なのだろう。

しかし、その空洞の中にいるのは今は古城と雪菜だけだ。

ここまで二人が乗ってきた高速船は、レヴィアタンの体内に入りこんだときに壊れている。双胴の船体が真っ二つに割れて、完全に航行不能の状態だ。

常人離れした反射神経を持つ雪菜はほとんど無傷で済んだものの、古城は全身あちこちにダメージを負って危うく死にかけた。できることなら、ゆっくり休んで傷の回復を待ちたいところだが、あいにくそんな余裕はない。

レヴィアタンの巨体から見れば、数十キロ離れたブルーエリジアムなど、手を伸ばせば届く程度の距離である。世界最強の魔獣が増設人工島を沈める前に、結瞳を連れ戻さなければならないのだ。

そんな余裕のない状況だけに、レヴィアタンの突然の停止はありがたく、そして不気味でも

あった。その原因がわからず戸惑う古城のポケットで、携帯電話の着信音が鳴り始める。

『古城、聞こえる？』

「あ……浅葱？」

通話アプリから流れ出した浅葱の声に、古城は少し驚いた。電波を遮るもののない海上とはいえ、さすがに陸地から距離が離れすぎている。携帯電話が使える距離ではないはずだ。

『〝ヨタカ〟って潜水艇の通信機器を使って中継してるのよ。そっちもどうにか無事みたいね』

「なんとかな――」

若干のタイムラグを感じさせる通話回線に向かって、古城が答える。切れた唇がまだ痛むが、電話に出られる程度には無事だ。潜水艇の設備を使っているということは、どうやら浅葱は、首尾よくクスキエリゼ研究所のハッキングに成功したらしい。

「〝LYL〟を乗っ取ってくれたんだな、浅葱？」

『なんとかね。煌坂さんも、クスキエリゼの研究所に着いたみたいよ』

「そうか」

紗矢華の無事を知った雪菜が、安堵する気配が伝わってくる。立て続けの呪矢の使用で消耗していたはずの彼女だが、霧葉をきっちり撃退したらしい。

これで、わずかだがブルーエリジアムが救われる可能性が見えてきた。あとは古城たちが、

結瞳を見つけて連れ戻すだけだ。

『とりあえず今はこちらでレヴィアタンを大人しくさせてるわ。ただ、〝LYL〟を無理やり騙してるだけだから、そう長くは保たないかも――せいぜい五分か、十分か』

かすかな焦りを滲ませた声で、浅葱が言う。古城の表情が険しさを増す。

「それまでに結瞳を見つけて脱出しないといけないわけか」

『あたしのほうで〝LYL〟を抑えておけなくなったら、煌坂さんにシステムを丸ごと破壊してもらうわ。それでレヴィアタンがブルーエリジアムを攻撃する理由はなくなるはずだから』

「わかった。それでいい――」

任せた、と答える前に電波が途切れて、回線が切断される。〝LYL〟の制御に忙殺されて、通話に意識を割くだけの余裕が、浅葱にも残されていないのだろう。

「行こう、姫柊。時間がない」

「はい」

痛む身体を引きずりながら古城は歩き出し、雪菜も反論せずについてくる。五分で片をつけるには、レヴィアタンの内部は広過ぎる。古城の傷を気遣う時間すら惜しいのだ。

「もっと生々しいものを想像していましたけど、本当に兵器なんですね――」

装甲板のような硬い材質の内壁を踏みしめながら、雪菜が言った。レヴィアタンの中は暗いが、吸血鬼である古城は夜目が利く。霊視の使い手である雪菜も問題ないらしい。

実際、レヴィアタンの内側は、単なる生物というよりも、スポーツカーのボンネットなどの、有機的にデザインされた工業製品に近い雰囲気を持っていた。

「生臭くないのはせめてもの救いだよな。しばらくウナギは喰いたくないけど」

巨大な蛇に似たレヴィアタンの全容を思い出して、古城は顔をしかめる。自分があの怪物の腹の中にいるかと思うと、さすがにゾッとしない。

緩やかに湾曲した空洞を進んでいくうちに、かすかな光が見えてくる。

明らかに人工的な白い輝きの正体は、潜水艇の投光器だった。レヴィアタン内部に鎮座するような形で、純白の潜水艇が停まっている。

「先輩――」

「ああ……あれだな。クスキエリゼの潜水艇ってやつは――」

モグワイの正確な案内に対して、やるじゃねーか、と古城は心の中で感謝した。

船体に刻まれた〝ヨタカ〟の文字を確認するまでもなく、潜水艇の正体は明らかだった。こんなところに紛れこむような潜水艇が、そう何隻もあるはずがない。

「先輩。中に人が――」

潜水艇のハッチは開いていた。体重を感じさせない動きで船体に跳び乗った雪菜が、その中を覗きこんで、古城を呼ぶ。

倒れていたのは、青い潜水服を着た中年男性だ。

きつく目を閉じたその表情は、なにかにひどく怯えているようにもみえた。

「久須木って男か。もしかして、死んでる……とか？」

古城の疑問に、雪菜が首を振る。

「いえ、眠っているみたいです。ですが、この先、目を覚ますかどうかは――」

「どのみちこんなところに置き去りにしたら、死ぬよな……このままじゃ……」

どうしたもんかな、と古城は目元を覆う。

見殺しにするわけにもいかないが、だからといって男を介抱している時間はない。潜水艇の中にいるのは男だけ。結瞳の姿はどこにもなかった。

結瞳はどこだ――と、古城が視線を巡らせた。

その背後で、突然、異様な魔力が膨れあがる。

「先輩――！」

一瞬早く反応した雪菜が、古城に警告しようとした。

だが遅い。闇を斬り裂いて伸びてきた漆黒の鞭が、その前に死角から古城を打ち据える。

苦痛を訴える間もなく吹き飛ぶ古城。

古城を打ち据えた鞭の正体は、鋭く尖った先端を持つ尻尾だ。魔力で紡がれた黒い尻尾を、これ見よがしに高く掲げて、小柄な少女が姿を見せる。

身体にピッタリと張りついた水着のような薄い服。その背中には黒い翼が生えていた。

「痛ェな、クソ……！」

額にかかる血を拭いながら、古城は潜水艇の上に座っている少女を見上げた。

起き上がれない古城を背中に庇って、雪菜が槍を構えながら降りてくる。

しかし少女を見つめる雪菜の瞳には、逡巡だけが浮かんでいた。潜水艇の上に座る少女に、雪菜は槍を向けることができない。

なぜなら雪菜たちは、彼女を連れ戻すためにここまで来たのだから――

「結瞳！」

ようやく立ち上がった古城が、黒い尻尾の少女を呼ぶ。しかし結瞳と同じ顔をした少女は、あは、と笑いながら、挑発的に両腕を広げてみせた。

「結瞳だと思った？　残念。莉琉ちゃんでした」

「……莉琉だと？」

古城は唖然としながら、莉琉と名乗った少女を見つめた。

予期せぬ事態に、思考がまとまらない。クスキエリゼの研究所内にある〝LYL〟は浅葱が抑えているはずだ。人工的に造られた人格である〝莉琉〟が、結瞳を支配できるはずがない。

しかし夢魔の少女は、動揺する古城たちを嘲るように見下ろして、

「こんなとこまで追いかけてくるなんて、しつこいですねえ。キリハに聞かなかった？　この怪物の中で死ぬのが結瞳の望みなんだよ。それなのに無理やり連れ戻すつもり？　そんなこと

をして古城さんになにか得があるの？　結瞳とエッチなことでもしたかった？」

「誰が――！」

少女へと近づこうとした古城の足元で、紫色の火花が散った。銃撃を受けたのだと気づいて、古城の表情が凍りつく。

「先輩、気をつけてください！　囲まれてます！」

「なんだと――」

雪菜に言われて、古城は左右に目を向ける。

視界に入ってきたのは、闇の中で蠢く無数の生物の群れだった。姿形は巨大なヤドカリに似ている。本来あるべきハサミの代わりに装着されているのは、どことなく機関砲に似た筒状の腕だ。古城の足元を襲ってきたのは、そこから撃ち出された魔力弾なのだろう。

多少の個体差はあるものの、生物たちの全長は二メートル前後。強固な殻に覆われた、小型生体兵器の集団だ。ざっと数えただけでも、その数は百体を超えている。

壁や床から湧き出してきた生体兵器の大群が、無人だったはずの空洞を満たして、古城たちを包囲しているのだ。

「レヴィアタンの中に入れば安全だと思った？　ここにだってちゃんと武装はあるんだよ」

夢魔の少女が、古城たちを追い返そうとするように冷ややかに告げる。死にたくなければ、自分を置いて今すぐにここから立ち去れ、と。

「莉琉ってば、人の精神が読めちゃうし、うんざりなんだよね。同情とか偽善とか。どうせあなたたちも可哀想な子どもを助けて自己満足に浸りたかっただけでしょ。それとも本気で結瞳に劣情を抱いてたりとか？　やだ、古城さんのロ・リ・コ・ン！」

古城は少女の暴言を、しばらく無表情なまま聞いていた。

彼女の言葉が途切れるのを待って、突き放すように大きく溜息をつく。そして少女のプライドを逆撫でするように、あえて冷笑しながら言い捨てた。

「誰がロリコンだ。勝手に他人に変な性癖つけんな。幼児体型に興味はねーよ！」

「な……!?　よ、幼児体型なんかじゃないです！　私だってもう、少しは――」

古城の挑発でさすがに傷ついたのか、夢魔の少女が、思わずムキになって言い返してくる。その言葉の端々には、隠しようもない彼女の素顔が覗いていた。

自らの失言に気づいて口元を押さえる彼女を見て、古城が気怠く苦笑を洩らす。

「やっぱりか。下手くそな演技しやがって。そういうのはもういいから、帰るぞ、結瞳」

「え、演技なんて――」

必死に取り繕おうとする結瞳の反論を、古城はあっさり却下する。

「莉琉は俺のことを、古城さんなんて呼ばねーんだよ」

これ以上の演技を無駄と悟って、ひくっ、と結瞳が喉を震わせた。

盛り上がった涙で、彼女の瞳が揺れる。泣き出すのを必死でこらえるように唇を噛んで、結

瞳がかすれた声を出す。

「どうして……なんですか……」

彼女の背中から翼が消えた。少し遅れて尻尾も消滅する。

残ったのは、肩を震わせる無力な少女だけだ。

「私とは知り合ったばかりじゃないですか。家族でも友達でもないのに、こんな危険なところまで私を迎えに来るなんて！　生きて帰れる保証なんてないんですよ！」

嗚咽の混じった頼りない声で、結瞳が叫ぶ。

莉琉を受け容れた今の彼女は、すべてを理解している。自分が、死ぬためにレヴィアタンの中に来た、ということもだ。ここで結瞳が死ねば、レヴィアタンの魔力障壁に阻まれてリリスの魂は転生できない。だからもう、リリスの力で不幸になる子どもは二度と生まれない。

だが結瞳は、無関係な古城たちを、そんなことに巻きこみたくなかった。

だから懸命に莉琉のふりをして、古城たちを追い返そうとしたのだ。

古城は彼女の気持ちを理解していた。安らかな死こそが彼女の望みであることも。

しかし古城は、その願いを認めない。認められない理由がある。

「昔、おまえによく似た知り合いがいたんだよ」

「え？」

唐突な古城の告白に、結瞳は当惑したように目を瞬く。

古城は、遠くを見るような眼差しを彼女に向けて、
「そいつも普通の女の子だったんだ。俺と同じ学校に通うのを楽しみにしてたんだ。だけど世界最強の吸血鬼の〝呪われた魂〟なんてものを押しつけられて、そいつを抱えたまま、勝手に死んだ。俺と凪沙を助けるために――」
そして古城は自嘲するように苦しげに笑う。
そう。だから古城は結瞳を救いたかったのだ。ようやくひと欠片だけ取り戻したばかりの、断片的で朧気な彼女の記憶。氷の棘のように心の奥に刺さった記憶の疼きが、結瞳を救ってあげて欲しいと古城に訴えている。
「おまえの言うとおりだ。俺がやってることは偽善だよ。助けられなかったそいつの代わりに、おまえを救って自己満足に浸りたいだけだよ！　それでも俺はおまえを助けるぞ！」
「どうして――!?」
結瞳が悲鳴のような声で絶叫した。
古城は、その悲鳴をかき消すように吼える。
「だっておまえは、死んでもいいと思えるほど幸せな思いをしてねーじゃねえかよ！」
「……っ!?」
古城の怒号に怯んだように、結瞳が言葉を詰まらせた。
立ち竦んでいる彼女に向けて、古城がそっと手を伸ばす。

「帰るぞ、結瞳。俺や姫柊だけじゃねえ。浅葱や煌坂や、たぶん矢瀬の野郎も待ってる。凪沙はおまえのためにカレーを作るって張り切ってた。昨日の花火だって残ってたし、プールや遊園地にも行かないとな。絃神島に戻ったら、那月ちゃんに頼んで、おまえの住むところと学校を探してもらうから心配するな」
「そんなこと……できるわけ、ない……だって、わたしは……」
古城の誘惑に逆らうように、結瞳が必死で首を振る。
うるせーよ、と古城は荒々しく牙を剝き、
「世界最強の夢魔だろうがリリスだろうが関係ねーよ。おまえはこれから死ぬまで幸せな一生を過ごすんだ。それを邪魔するやつがいるのなら、太史局だろうが、レヴィアタンだろうが、俺が全部ぶっ潰す！　もうおまえは一人じゃない。ここから先は、俺の戦争だ！」
「……古城……さん」
結瞳は一瞬だけ、本当に嬉しそうな表情を浮かべた。だがそれでも、彼女はすぐに首を横に振る。たとえ古城が自分を認めてくれても、それだけでは一緒に行けないのだと――
そんな結瞳に向けて、もう一本の腕が静かに差し出された。
「いいえ、先輩。わたしたちの戦争、です」
優しく目を細めた雪菜が、結瞳に手を伸ばしている。
結瞳を受け容れているのは、古城だけではないのだと強く主張するように。

「だから一緒に帰りましょう、結瞳ちゃん」
「雪菜お姉さん……」
結瞳の瞳からついに涙があふれ出す。潜水艇の屋根を蹴り、結瞳は古城たちに向かって駆け出した。古城と雪菜が、そんな彼女を抱き留めようと腕を広げた、その瞬間。
「ああ――っ！」
結瞳の小柄な身体が、突然、電気に打たれたように仰け反った。
意識をなくして倒れこむ結瞳を、古城たちがギリギリのところで抱き留める。
「結瞳!?　くそ、時間切れか――!?」
ぐったりと動かない結瞳を抱えて、古城がうめいた。
浅葱が〝LYL〟を抑えておけるのは、長くても十分程度という話だった。その制限時間を超えて、再び莉琉の人格が結瞳を乗っ取ったのではないかと疑ったのだ。
しかし、いつまで経っても莉琉が目覚める気配はない。
それに〝LYL〟が再起動したからといって、結瞳が気絶するのも変だ。
結瞳の失神の原因は、〝LYL〟の再起動ではないのかもしれない。あれはまるで、レヴィアタンを支配していたはずの夢魔の力が、結瞳に逆流してきたかのような現象だった。
「先輩、生体兵器たちが――！」
古城の思索を断ち切るように、雪菜が叫んだ。その声をかき消したのは、荒々しい銃声だっ

飛来する紫色の魔力弾を防ぐため、雪菜が銀色の槍を一閃する。
古城たちを取り囲む小型生体兵器の群れが、一斉に動き始めていた。
それらを操っていた結瞳は倒れている。莉琉が目覚める気配もない。
夢魔ではない誰かが、小型生体兵器の群れを操っているのだ。彼らの本来の支配者が――
「まさか……」
自分自身の足元を見下ろして、古城が唸る。
怒りに震えるレヴィアタンの咆吼が大気を満たしたのは、その直後のことだった。

5

レヴィアタンが撒き散らす怒りの咆吼は、絃神島にも届いていた。
「――なによ、この魔力波動!?　〝LYL〟が復活したの？」
魔力に対して鋭敏な紗矢華が、その強烈な波動に気づいて絶句する。
轟音のスピーカーキャビネットが、耳元で鳴っているかのような衝撃だ。
紗矢華がいるのは〝魔獣庭園〟のド真ん中。クスキエリゼの研究所の最奥部である。分厚いコンクリートの壁を呆気なく透過して、魔力波動が襲いかかってくる。
その逆流する魔力に耐えかねたように、〝LYL〟と名付けられた巨大な機械が、青白い火

花を噴き上げた。もはや紗矢華は絶句するしかない。

『煌坂さん、逃げて！　そこから離れて――早く！』

連絡用につなぎっぱなしだった携帯電話から、浅葱の声が聞こえてきた。かつてない彼女のうろたえように、紗矢華は最悪の予感を覚えながら、

「で、でも、〝ＬＹＬ〟の破壊は⁉」

『レヴィアタンが、リリスの精神支配から自力で逃れたの――』

「え⁉」

『さすが最強の生体兵器を名乗るだけあるわね……あたしたちが気づかないうちに、レヴィアタンは精神支配に対する耐性をつけてたのよ。もう〝ＬＹＬ〟の力では止められないわ』

浅葱の言葉が意味するところに気づいて、紗矢華の全身から血の気が引く。

レヴィアタンは夢魔の精神支配から逃れた。それもレヴィアタン自身の意思で、精神支配に逆らう力を身につけて――

「じゃあ、この無差別に撒き散らされてる魔力波動は……」

『怒りの咆吼って感じかしら。レヴィアタンは、自分を支配していた結瞳ちゃんや〝ＬＹＬ〟に対して、たぶん怒り狂ってるはずよ――』

「じょ……冗談じゃないんだけど――！」

研究所の建物を飛び出した紗矢華が見たのは、水平線上に屹立する巨大な〝竜〟の頭部だった。その巨大過ぎる魔獣に、もし表情というものがあるのなら、おそらくそれは憤怒の形相であるはずだ。

レヴィアタンは夢魔に逆らった。世界最強の魔獣にとって、一方的な精神支配は、さぞかし不快なものであったに違いない。それゆえにレヴィアタンは怒っている。そして精神支配から逃れた魔獣が次に取り得る行動は――報復だ。

水平線上に浮かぶ魔獣の背中から、群青色の鳥の群れのようなものが飛び立った。

だがそれが、無害な鳥の群れなどであるはずもない。相手は神々の時代の生体兵器なのだ。

「――まさか、ミサイル⁉」

それがどのような役目を持つ存在か、誰かに教わるまでもなく一目で理解できた。

放物線を描いてブルーエリジアムに降りそそいでくるのは、巨大な生体ミサイルだ。

その数は全部で百発余り。〝ＬＹＬ〟に復讐するどころか、ブルーエリジアムのすべてを焦土と化しても余り有るほどの容赦ない火力だ。

「くっ、こ、〝煌華麟〟――！」

迷う時間は残されていなかった。紗矢華は銀色の洋弓を構えて、残り少ない呪矢をつがえる。

しかしミサイルが相手では、普通の弓矢では圧倒的に射程距離が足りない。紗矢華に残された選択肢はひとつ――〝煌華麟〟のふたつの能力の同時使用だけだ。

空間切断能力によって生み出した空間の裂け目を使って、射放った呪矢を、一気に数キロ先の海上まで転移させる。〝空隙の魔女〟南宮那月が得意とする、空間制御魔術の応用だ。

本来は呪矢の発射台であるはずの〝煌華麟〟に、空間切断という異質の能力が与えられたのは、この超遠距離狙撃を実現するためのものだった。正真正銘の舞威媛の切り札。許可なく使えば始末書ものなのだが、もちろんそんなことを気にしている余裕はない。

紗矢華が放った矢は、空間の裂け目を使って瞬間転移。ブルーエリジアムの沖合数キロの地点に、巨大な魔法陣を生み出した。魔法陣が吐き出す雷と炎が、生体ミサイルを迎撃し、その爆発が後続のミサイルを次々に巻きこんでいく。

撃ち洩らしたミサイルを破壊するため、紗矢華は新たな矢を放つ。だが、紗矢華一人では、それが限界だった。ミサイルの数があまりにも多すぎる。

紗矢華の呪術をくぐり抜けた一発の生体ミサイルが、正確にクスキエリゼの研究所を狙って飛来する。

「防ぎきれないっ――!」

頭上に迫り来るミサイルを呆然と眺めて、紗矢華が絶望の声を洩らした。〝煌華麟〟の防御効果が続くのは一瞬だ。ミサイルの爆風と熱に耐えられるほど便利なものではない。

だが、クスキエリゼの研究所に辿り着く前に、突然、生体ミサイルが爆発四散した。

地上から射出された一発の戦車砲弾が、飛来する生体ミサイルを撃ち落としたのだ。

降りそそぐミサイルの破片や炎から紗矢華を庇うように、巨大な金属の影が走りこんでくる。それは軽自動車にも満たないサイズの超小型有脚戦車だった。

作業用のマニピュレーターが伸びてきて、有脚戦車が、驚く紗矢華を強引に抱き上げる。ふと見ればもう一本のマニピュレーターには、気絶したままの妃崎霧葉が抱かれていた。

「あ、あなたは⁉」

『拙者、〝戦車乗り〟と申す者。女帝殿――藍羽浅葱嬢の友人にござる』

震え声の紗矢華の質問にも、〝戦車乗り〟が時代がかった口調で答えてくる。

そうこうしている間にも、有脚戦車は再び主砲を発射。新たな生体ミサイルを撃ち落とす。

『クスキエリゼの職員は全員避難済み故、拙者たちも逃げたいところでござるが――あのデカブツが相手では、さすがに逃げ切れるかどうか』

呵々と大笑しながら、〝戦車乗り〟が有脚戦車を加速する。

瓦礫を蹴散らして逃げ出す紗矢華たちの背後で、ついに着弾した生体ミサイルが爆発し、クスキエリゼの研究所を炎に包んでいた。

6

気絶したままの結瞳を連れて、古城と雪菜は〝ヨタカ〟の中へと逃げこんでいた。周囲を無

数の小型生体兵器に囲まれて、ほかに逃げられる場所がなかったのだ。
ヤドカリ型の生体兵器たちは、時折、思い出したように紫色の魔力弾を浴びせてくるが、軍用として開発された潜水艇は、その攻撃にどうにか耐えている。
「さすがに頑丈に出来てるな。この調子なら、あと一、二時間くらいはもちそうだが――」
窮屈なコックピットの中で雪菜と密着しながら、古城はやる気のない口調で呟いた。
次から次へと休みなく押し寄せてくる面倒事のせいで、いい加減、体力の限界が近い。できることなら、このまましばらく、ここで休んでいたかった。
しかし、そんな古城のささやかな希望を踏みにじるように、雪菜が現実を突きつけてくる。
「その前にブルーエリジアムが破壊されてしまいますね。最悪、絃神島本島も――」
「だな……もたもたしてる暇はないか」
くそ、と弱々しく吐き捨てながら、古城はのろのろと顔を上げた。
だいたいの事情は、すでに浅葱からの連絡でわかっている。結瞳の精神支配から抜け出したレヴィアタンが、怒りのままにブルーエリジアムを襲っているのだという。
このままレヴィアタンを放置したら、結局、太史局の女の計画どおりだ。紗矢華たちの努力が文字どおり水の泡になってしまう。
「このデカブツが、あくまでも魔獣の一種だっていうのなら、ある程度のダメージを与えれば、海の底に逃げ帰るはずだよな？」

知る限りのレヴィアタンの情報を頭の中で整理しながら、古城は推論を組み立てる。
夢魔の精神支配が通用しないというのなら、残された手段は実力行使だけだ。この巨大な生体兵器を完全に破壊するのは、第四真祖の力をもってしても難しい。だが、ある程度の深傷を負わせるだけで済むのなら、いくらかハードルが低くなる。
「そうですね。今は怒り狂って暴れてますけど、人間とは違って、危険を冒してまで復讐しようとすることはないはずです」
雪菜も、古城の意見に同意する。生体兵器として創り出されながらも、レヴィアタンは好戦的な魔獣ではない。それは、この魔獣が何千年もの間、海の底でひっそりと暮らしてきたことからも裏付けられていた。
レヴィアタンと戦って追い払う――
言葉にしてしまうと、不安になるくらい単純だが、どうやらそれが現状、古城たちに残された、ほとんど唯一の解決策らしい。そしてそれを実現できるのは、古城の持つ第四真祖の力だけである。
しかし雪菜は、軽く絶望したように肩を落とし、
「ですけど、海の上で長時間の戦闘は無理です。先輩は泳げないですし――」
「俺じゃなくても、こんな化け物が暴れ回ってる海で泳げるやつはいねーよ！」
古城が傷ついたような顔で乱暴に言い返す。

実際、古城の眷獣の力を使えば、この潜水艇ごとレヴィアタンの外に出るのは容易い。問題なのは、そのあとだ。〝ヨタカ〟がいくら頑丈に造られているといっても、レヴィアタンの攻撃に耐えられるはずもない。魔力砲の一発でも喰らえば、そこでおしまいだ。

そうなる前に勝負を決めなければ、古城たちに勝ち目はないということになる。

「要するに、一撃でこいつに決定的なダメージを与えてやればいいんだろ」

「そんなことが出来ますか？　せめて魔力障壁がなければなんとかなると思いますけど、雪霞狼〟の効果が及ぶのは、せいぜい数メートルの範囲だけですし」

「……だいたいでかすぎるんだよな、こいつが……」

最初のレヴィアタンとの戦闘を思い出して、古城は嘆息する。

レヴィアタンの強力な魔力障壁は、古城の眷獣の攻撃すら、ある程度までは防いでしまう。一撃でそれを撃ち抜いて、この魔獣の戦意を喪失させるのは、まともなやり方では無理そうだ。

かといって、このままレヴィアタンの体内に、眷獣を召喚するわけにもいかない。

なにしろここには、膨大な数の生体魚雷やミサイルと、その材料となる生体爆薬がぎっしり詰めこまれているのだ。それに、この巨体を維持する魔力の量も半端ではない。

もしも古城の眷獣が、それらを誘爆させてしまったら、その爆発の衝撃は容易くブルーエリジアムを消滅させてしまうだろう。それではまったく意味がない。

一撃でレヴィアタンを戦闘不能に追いこんで、なおかつ誘爆の危険も回避できる攻撃。

それはあまりにも厳しい条件だ。そんな都合のいいものが、この地上に存在するとは思えなかった。そう、存在しないのだ――この地上には。

「そうか。試してみる価値があるかもな」

「……先輩？　なにか、方法が？」

独り言のように呟く古城に、雪菜が期待に満ちた瞳を向けてくる。

古城は少しだけ躊躇してうなずいた。

「ああ。協力してもらえるか、姫柊？」

「はい。わたしに出来ることなら、なんでも」

責任感に満ちた表情で、雪菜は迷いなく即答する。

彼女の心強い申し出に安堵しながら、古城は爽やかな笑顔になって、

「じゃあ、頼む。服を脱いでくれ」

「――は？」

雪菜が呆気にとられたように動きを止め、一瞬の気まずい沈黙が訪れた。

そして次の瞬間、古城の視界がぐらりと揺れた。雪菜が無造作に放った裏拳が、古城の側頭部を深々と抉ったのだ。

「おおおおっ……」

脳が揺さぶられるような衝撃に、古城は潜水艇の壁に突っ伏してうめいた。

雪菜は、おろおろと古城の背中に手を伸ばしながら、
「す、すみません、つい。でも、先輩がこんなときにふざけたことを言うから――」
「ふざけてねえよ、真剣に言ってるんだって！」
「だったら、なお悪いです――！」
雪菜がキッと目つきをきつくして古城を睨みつける。
古城は鈍痛の走るこめかみを押さえて、ふらふらと立ち上がり、
「そうじゃなくて、血を吸わせて欲しいんだよ。たぶん、あいつを目覚めさせるにはまだ血が足りないんだ。煌坂の血を吸ったときには、俺のほうも腹に穴が空いてたしな――」
「あいつ……？　ああ、そういうことですか……」
古城の意図をようやく悟って、雪菜が深々と溜息をついた。
第四真祖が血の中に従えているという眷獣の数は、十二体。だが、そのうち古城を宿主だと認めて召喚に応じるのは、いまだその半分にも満たなかった。古城はたまたま第四真祖の力を受け継いだだけの普通の人間であり、吸血鬼としては激しく不完全だからだ。
気難しい第四真祖の眷獣たちに宿主と認めさせるには、彼らを納得させるだけの贄を捧げてみせなければならない。
すなわち強力な霊媒の血を吸って、体内に取り入れること――それが眷獣を掌握するための、もっとも手っ取り早い方法なのだった。

獅子王機関の剣巫である雪菜の血ならば、贄としての資格は申し分ない。
あとは古城が吸血衝動に襲われるような刺激を、雪菜が与えてくれれば十分なのだが――
「でも、いやです」
雪菜が、パーカーの襟をぎゅっと寄せ合うようにして胸元を隠した。
「え!?」
彼女の予想外の反応に古城は狼狽する。
吸血衝動を発動する引き金になるのは、食欲ではなく性欲――いわゆる性的興奮である。つまり興奮状態でなければ、古城は吸いたくても血が吸えないのだ。
巨大な魔獣の体内に閉じこめられて、周囲には生体兵器の群れ。おまけにすぐ傍には小学生の少女が眠っており、足元には見知らぬオッサンまで転がっている。
いくら雪菜のような綺麗な少女と、狭い潜水艇の中で密着しているとはいえ、あまりにも条件が悪すぎた。この状況で性的に興奮しろといわれても正直つらいものがある。
「――ええと、姫柊さん。眷獣を目覚めさせるのには、協力していただけるんですよね？」
「そうですね、約束しましたから。吸いたければ、どうぞ勝手に吸ってください」
なぜか冷ややかにそう言って、雪菜が古城に背中を向けた。
倦怠期のカップルを思わせる無関心ぶりである。
「だったらせめてパーカーだけでも脱いでくれ。ちゃんと下に水着を着てるんだろ？」

「――そうですね。でも、いやです」
「なんで⁉」
「どうせ、わたしなんかの水着を見ても、先輩は喜びませんから」
拗ねているような口調でそう言って、ちらり、と雪菜が横目で古城を見る。
「中学生の水着を見ても喜ばないって言いました。そんなものどうでもいいって」
「えー……っと、俺が？　そんなこと言ったっけか？」
古城は困惑しながら記憶を辿った。具体的な経緯は思い出せないが、雪菜がいつになく非協力的な理由については、なんとなくわかってきた気がする。
とはいえ、実の妹や、その同級生の水着姿を見て大喜びしているようでは、吸血鬼としてもちょっとどうかと思うのだが――
「どうせわたしなんて水の抵抗も小さいですし、先輩の吸血衝動の足しにはなりませんから」
自分で言って傷ついたように、雪菜が再び顔を背けた。
古城はやれやれと頭をかく。客観的に見ても、雪菜は、反則的なまでに恵まれた容姿の持ち主だと思うのだが、意外と本人にはそのあたりの自覚がないらしい。
たしかに浅葱のようなわかりやすい美人や、紗矢華のようなモデル顔負けのスタイルの持ち主が近くに居たら、不安を覚える気持ちも多少はわからないでもないのだが。
「ま……そういうことなら、手持ちの眷獣だけでなんとかするしかないか……」

古城は雪菜の説得を諦めて、窓の外へと目を向けた。
正直、今の戦力でレヴィアタンを止めるのは厳しい。足場を気にせずに戦えるならまだしも、海上での戦闘は、古城にとっては完璧なアウェイだからだ。だが、これ以上、こんなところで時間を無駄にするわけにはいかない。
「先輩、この傷……！」
そのとき雪菜が古城の背後で、大きく息を呑む気配がした。
彼女が見ていたのは、古城の背中だ。いくつかの深い傷痕が穿たれて、Tシャツがべったりと血に濡れている。
「ああ、これか。潜水艇に乗りこむときにちょっとな――」
たいした傷じゃねーよ、と古城はぞんざいに首を振る。傷の原因は〝ヨタカ〟の周りにいる小型生体兵器たちだ。結瞳を連れて潜水艇に逃げこむときに、魔力弾を何発か受けたのだ。
「もしかして、結瞳ちゃんを庇って？　どうして言ってくれなかったんですか――⁉」
「心配するなって。こんなものすぐ塞がるし。それよりも早くレヴィアタンを止めねーと」
古城は強引に話を切り上げた。
実際にたいした負傷ではないのだ。古城の体調が完全ならば、とっくに塞がっていてもおかしくない程度の傷だ。しかし今日の古城は、あまりにも血を流し過ぎていた。
紗矢華の剣に腹を貫かれ、レヴィアタンに突入する際には内臓を手ひどくやられている。お

まけに眷獣の多用で魔力の消耗も激しい。じわじわと蓄積したダメージが、ここに来て古城の回復を妨げている。それでも今はそれを気にしている場合ではない。

「まったく先輩は……本当にしょうがない吸血鬼ですね……」

古城が負傷を隠していたことに呆れたのか、雪菜が苦笑混じりに息を吐いた。

ファスナーの開く音がして、ふわりと布の落ちる気配がある。

「いいですよ、先輩。こちらを見ても――」

「……え？」

雪菜に呼ばれて背後を振り返り、古城は凍りついたように動きを止めた。

視界に飛びこんできたのは、透きとおるように白い肌の色だった。

細い肩、鎖骨の窪み、慎ましやかな胸の膨らみと、しなやかに引き締まった腰回り。そして太腿の付け根まで、余すところなく雪菜の肌が全身あらわになっている。

「あ、あの……あらたまって見つめられると、さすがに少し恥ずかしいんですけど」

凝視するような古城の視線に、雪菜が照れたように身をよじる。

その言葉でようやく古城は我に返った。

雪菜が身に着けていたのは、パステルブルーのビキニだった。よく見ればスカートつきで、最初の印象ほど露出度が高いわけではない。それでも普段は絶対に見られない彼女の姿に、古城は視線を奪われる。

「この水着、買ったばかりですから。まだ先輩にしか見せてないんですよ」

雪菜が緊張した口調で言った。しかし、彼女に見とれている古城はなにも答えられない。

長い沈黙を続ける古城を、雪菜はさすがに不安そうな表情で見上げて、

「やっぱり、変、ですか？」

「い、いや……似合ってるし、可愛い、と思う」

古城がかすれた声を出す。喉が渇いて上手くしゃべれない。

それでも雪菜は嬉しそうにはにかんで、

「ふふっ……先輩が誰かの水着を褒めたのは初めて、ですね」

「あ、ああ。そう言えば、姫柊だけかもな」

凪沙はもちろん、浅葱や紗矢華、それに結瞳にも、特になにかコメントした覚えはない。怒られた記憶だけはあるのだが。

「私だけ、ですか……そうですか」

なぜか満足そうに呟いて、雪菜が古城との距離を縮めてくる。

いつの間にか彼女のご機嫌は、すっかり治っていたらしい。

雪菜の甘い匂いが古城の鼻腔を満たす。背中に回した古城の手が、彼女の無防備な素肌に触れる。ひんやりとした人肌の感覚が心地好い。

古城の目の前にあるのは、雪菜の剝き出しの首筋だ。

「姫柊……」

古城の牙が、雪菜の柔らかな皮膚を破って喰いこんでいく。

艶やかな鮮血が彼女の肌を流れた。雪菜の唇から声が洩れる。痛みに耐えるように強張っていた全身から力が抜けて、雪菜が古城の身体に柔らかくもたれてくる。

コックピットの非常灯だけが照らす薄闇の中で、二人の影は重なったまま動かない。

絡み合う吐息と体温だけが、静かにひとつに溶けていく――

7

彼女は、純白のコテージの屋根に一人きりで座っていた。

少し未発達な印象を残した十代前半の少女――暁凪沙だ。

下ろした長い黒髪が、爆煙の匂いを含んだ風に揺れている。

そのせいか普段の快活な彼女とは、印象がまるで違っていた。

今の凪沙は、氷の結晶を全身にまとったように冷ややかに見える。

虹彩の開ききった大きな瞳が見つめていたのは、水平線に浮かぶ巨大な影だった。

コテージの中では、藍羽浅葱がパソコンに向かっている。ブルーエリジアム来場者の避難誘導。沿岸警備隊への救難要請。付近を航行中の船舶への警告。それらのすべてを浅葱は一人ですべてこなしている。レヴィアタンの出現に対して、ブルーエリジアム内でパニックが起きていないのは、彼女の働きに因るところが大きい。

たいしたものだ――と、暁凪沙は独りごちる。

その英雄的行為の代償として、浅葱自身はすでに避難するタイミングを失っている。だが彼女は、それを自己犠牲とすら感じていないだろう。彼女はそれを必要だと感じたから行動した。ただそれだけのことなのだ。そう。かつて異国の〝魔族特区〟で、妹を救うために、自らを平然と銃弾の前に晒した、あの少年と同じように――

できることなら、その誇り高い少女を救ってやりたいものだと思う。

だが、今の凪沙に、あの巨大な生体兵器を退けるだけの力はない。

それでも心配は無用だろう。

懐かしい眷獣が、新たに目を覚ます気配がするからだ。

「そうか……次は、おまえか……」

凪沙はそう言って空を見上げる。

神々の時代の生体兵器がかき乱す海の上には、透きとおるような青空が広がっている。

『舞威媛殿、大丈夫でござるか――！』

外部スピーカーを全開にして〝戦車乗り〟が暑苦しく喚き散らす。

紗矢華は、リクガメの甲羅を思わせる半球型の装甲に、ぺたん座りでしがみつきながら、

「もう駄目。呪矢も尽きたし、さすがに体力の限界なんだけど！」

『ハッハッハ！　さもあらん。拙者の主砲も打ち止めでござる！』

脚の先端に埋めこまれた球形のタイヤを回転させて、有脚戦車が加速した。

〝戦車乗り〟の助けも借りて、紗矢華はレヴィアタンの生体ミサイルを、すでに三百発近く撃ち落としていた。その意味では彼女たちこそが、ブルーエリジアムの被害を抑えこんでいる真の功労者だといえる。

太史局に雇われていたはずの〝戦車乗り〟が、なぜ紗矢華に手を貸したのかはわからない。おそらく浅葱とのハッキング勝負を通じて、彼女にもなにか思うところがあったのだろう。

だがしかし、紗矢華たちの武器はすでに尽きていた。そもそも神々の時代の生体兵器相手に、個人レベルの装備で立ち向かおうというのが無茶なのだ。

『――次弾、来るでござる！』

メインカメラを旋回させながら、戦車乗りが叫ぶ。

空を埋め尽くすほどの生体ミサイルの群れを見上げて、紗矢華は歯軋りした。

それはブルーエリジアムを焼き尽くすのに、十分過ぎるほどの数だった。まさしく世界の終焉を思わせる光景だ。

だが、突如、その生体ミサイルの群れが閃光とともに消滅する。

眩く輝く巨大な稲妻が、無数のミサイルを呑みこんで爆発させたのだ。

「なんと!?　絶景かな！」

緊張感とは無縁の歓声を上げたのは〝戦車乗り〟だった。

大輪の花火を思わせる炎が空を満たし、遅れて轟音が押し寄せてくる。

爆煙をまといながら現れたのは、稲妻を撒き散らす雷光の獅子だ。

「第四真祖の……眷獣……！　ってことは――」

紗矢華の呟きに応えるように、レヴィアタンの表面で小さな爆発が起きた。

衝撃波の弾丸が分厚い鱗を粉砕する。そこに穿たれた空隙から、緋色の双角獣に吹き飛ばされるような形で現れたのは、ボロボロに傷ついた純白の潜水艇だった。

きりもみ状態で落下する潜水艇が、白い水柱を噴き上げながら海面に着水する。

緋色の眷獣がレヴィアタンの体内で爆風を撒き散らし、潜水艇〝ヨタカ〟は、その反動を利用して外へと飛び出したのだ。

衝撃で船体が悲鳴を上げ、砕け散った投光器や安定翼が脱落した。

それでも潜水艇の本体は無事だった。窮屈なコックピットの中でもみくちゃになりながら、雪菜たちの下敷きになっていた古城が跳ね起きる。

「――無事か、姫柊!?」

「はい。結瞳ちゃんも大丈夫です！」

意識のない結瞳を庇っていた雪菜も、銀色の槍をつかんで立ち上がった。

深海の水圧に耐えるように設計された〝ヨタカ〟の船体は、レヴィアタンの巨体が巻き起こす海水の渦にも耐えている。高波に翻弄されてコントロール不能な潜水艇を、古城は、双角獣が撒き散らす爆風を使って、どうにか安全な距離まで運んでいく。

「あと少しだけ保ってくれよ！」

頼りなく軋む潜水艇に呼びかけながら、古城はハッチを開けて船の上に出た。

レヴィアタンは、生体魚雷やミサイルを撒き散らしているが、破壊力だけなら古城の眷獣が上だ。防御に徹している限り、簡単にやられる心配はない。

問題は、堅牢な魔力障壁に護られたレヴィアタンの巨体そのものである。あれだけの質量を止める手段は古城にもない。完全にのしかかられたら、ブルーエリジアムも耐え切れまい。

レヴィアタンが増設人工島に到達する前に、決着をつけねばならないのだ。

「……神々の時代の生体兵器……世界最強の魔獣……か……」

群青色の怪物を見上げて古城が呟いた。

どうやっても潰せない羽虫に苛立つように、レヴィアタンの頭部が、古城を睨んだ。

その荘厳なまでの迫力は、魔獣というより、火山の噴火や竜巻のような、手に負えない自然の猛威と対峙しているような錯覚に陥らせる。

だが世界に対する脅威度でいうなら、それは古城も大差ない。

十二体の眷獣を従える第四真祖もまた、災厄の化身なのだから――

「考えようによっちゃ、おまえが今回のいちばんの被害者だったのかもな。気持ちよく海底で眠ってるところを叩き起こされて、好き勝手に操られて――暴れたくなる気持ちもわかるぜ」

自分の声が届かないのを知りながら、古城はレヴィアタンを哀れむように呼びかける。

そして古城は、真紅の瞳を輝かせて荒々しく吼えた。

「ここまでやって許してくれってのは、さすがに都合がよすぎるよな。だから、恨むなら俺を恨めよ――レヴィアタン！」

古城の全身から、どす黒い瘴気に似た魔力が吐き出される。

両手を高々と振り上げて古城が睨んでいたのは、遥か頭上の青空だ。その古城の姿はまるで、目に見えない巨大な剣を大地から引き抜いているようにも感じられる。

「焔光の夜伯の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ――」

古城が撒き散らした瘴気は空間を歪め、やがて剣の姿を虚空に生み出した。

高度数千メートルの高さにありながら、肉眼でくっきりとその姿が見える。優に刃渡り百メ

ートルを超える馬鹿げた大剣だ。
その正確な形は三銃剣と呼ばれる古代の武具。神々が使ったといわれる降魔の利剣である。
「……意思を持つ武器!? 裁きの……剣……！」
古城の新たな眷獣の正体に気づいて、雪菜が驚愕の声を洩らす。
雪菜はまだ知らないのだ。それがかつて〝原初のアヴローラ〟と呼ばれる少女によって喚び出され、絃神島の一部を沈めた最凶の眷獣であることを——
「——疾く在れ、七番目の眷獣、〝夜摩の黒剣〟！」
古城の呼びかけに応えて、巨大な剣が落下を始めた。
重力に引かれて加速する刃が、灼熱の炎に包まれる。その姿は天から墜ちてくる隕石そのものだ。大気が轟然と震動し、新たな太陽が出現したかのように空が明るくなる。
さすがにその異様な気配を察したのか、レヴィアタンが回頭を始める。
黒い剣の落下地点から、逃れようとしているのだ。
だが、その前に剣の落下速度が増した。〝夜摩の黒剣〟はただの巨大な剣ではない。それ自体が意思を持つ眷獣なのだ。
その眷獣としての能力は重力制御。通常の何倍もの重力に引かれて加速した剣が、超音速の弾丸と化して、レヴィアタンの巨体へと飛翔する。
「その巨体じゃよけきれないぜ、悪いな。レヴィアタン——」

最強の魔獣を哀れむように、古城が頼りなく微笑んだ。
次の瞬間、一条の閃光と化した剣の眷獣が、レヴィアタンの胴体を刺し貫く。
神々の時代の生体兵器が誇る堅牢な魔力障壁も、圧倒的な大加速が生み出す運動エネルギーの前には無力だった。刃渡り百メートルを超える巨剣が、レヴィアタンを完全に貫通し、そのまま一気に海中にまで到達する。
だが〝夜摩の黒剣〟による破壊はそれだけでは終わらない。黒い剣が生み出す破壊力の本質は、剣撃の直後に到達する爆発的な衝撃波だ。
隕石にも匹敵する眷獣の落下の衝撃が、レヴィアタンの巨体を打ちのめして海を割った。
圧縮効果による高熱で大量の海水が蒸発し、蒸発しきれなかったぶんは衝撃によって、凄まじい高さの水柱を噴き上げる。まるで津波のように海面が盛り上がり、さらにその反動で直径数キロメートルにも達する巨大な渦が巻き起こった。
古城たちも、当然、無事では済まなかった。
レヴィアタンに近い位置で、その衝撃をまともに喰らった〝ヨタカ〟は、今度こそひとたまりもなく吹き飛んだ。雪菜が咄嗟に古城を船内に引きずりこんでハッチを閉めていなければ、そのまま沈没していたに違いない。
「やりすぎです、先輩！ ブルーエリジアムを沈める気ですか——!?」
剣の眷獣が残した破壊の痕跡に、顔を蒼白にした雪菜が古城を睨んだ。

「し、仕方ないだろ、手加減する余裕なんてなかったんだから……！」

古城自身、引き攣った表情でダラダラと汗をかく。剣の眷獣を実際に召喚したのは初めてだが、想像を遥かに上回る扱いづらさだった。無差別に破壊を撒き散らす以外の使い途がなにひとつないという凶悪すぎる眷獣だ。もう二度と召喚するまいと古城は固く心に誓う。

波が落ち着いたのを見計らって、古城たちは再び〝ヨタカ〟の外に出た。

「――やったのか？」

白く渦を巻く海面を見渡して、古城はレヴィアタンの姿を捜した。

古城たちの潜水艇も、さすがに強度の限界に達している。分厚い窓がひび割れて、コックピットの浸水も少しずつ始まっていた。今すぐ沈没することはないはずだが、これ以上の戦闘には耐えられそうにない。レヴィアタンには、このまま立ち去ってもらいたいところだ。

だが、そんな古城の願いを無視して、魔獣の巨体が海面に浮上する。

「――あいつ、まだやる気なのか!?」

手負いのレヴィアタンを睨んで、古城は奥歯を噛み鳴らした。

魔獣の傷は浅くない。古城たちが期待したように、このまま逃走してもおかしくないはずだ。しかしレヴィアタンはまだ戦意を失っていなかった。これ以上、戦いを続けるというのなら、それはどちらかが死ぬしかないということだ。

「駄目です、先輩！　今の攻撃をもう一回喰らわせたら、ブルーエリジアムが保ちません！」

再び眷獣を喚び出そうとした古城を、雪菜が先に止めてくる。

事実、最初の攻撃の余波によって、ブルーエリジアムの海岸部はかなりの被害を受けていた。同じ規模の衝撃を浴びたら、今度こそ致命的な損傷が発生する可能性が高い。

「だけど、このままじゃ――」

荒ぶるレヴィアタンを見上げて、古城がうめく。

もしも傷ついた生体兵器が死に物狂いで戦いを挑んでくるのなら、古城に手加減する余裕はない。互いに次の攻撃が生死を分かつことになるからだ。

そのことはレヴィアタンも本能的に理解しているのだろう。

古城と魔獣は力を溜めながら、最後の攻撃のタイミングを待つ――

そんな古城たちの目の前に、突然、小柄な影がそっと無造作に歩み出た。

「なっ!?」

「――結瞳ちゃん!?」

古城と雪菜が同時に叫ぶ。潜水艇の先端に立ってレヴィアタンを見つめていたのは、気絶していたはずの結瞳だった。

彼女はぎこちなく両手を伸ばし、無言で巨大な魔獣へと呼びかけている。

「やめろ、結瞳！　レヴィアタンにおまえの精神支配はもう効かないんだ。だから――」

結瞳がやろうとしていることに気づいて、古城は彼女を止めようとする。

夢魔の力でレヴィアタンを再び支配し、海底へと帰す。
たしかにそれができるなら、この無意味な戦いは避けられるだろう。
だがそれはもう無理なのだ。生体兵器であるレヴィアタンは、夢魔の力に耐性をつけている。
結瞳の支配には従わない
黒い翼を広げた結瞳は、一度だけ振り返って微笑むと、伸ばした古城の手をすり抜けるように空へと舞い上がった。そしてレヴィアタンの眼前に向かっていく。翼を持たない古城は、それを呆然と見送るしかない。
「いえ……先輩、これは――」
結瞳の背中を見つめて、雪菜が呟く。
彼女が伝えようとしたことに、古城も気づいた。
頭の奥にかすかな声が響いてくる。
仲間を呼ぶクジラたちの鳴き声に似た響きだ。
言葉になる前のシンプルな音色。切なく、そして優しい旋律――
「歌……？」
結瞳が歌を歌っていた。否、正確に言えばそれは歌ではない。彼女が放つ精神支配の波動が、古城たちには歌声のように聞こえているだけだ。
その歌声はレヴィアタンにも届いているのだろう。

猛り狂っていた世界最強の魔獣から、怒気が消えていく。
荒々しく撒き散らされていた魔力の波が収まっていく。
「説得……しているのか、神々の時代の生体兵器を……」
海面が波打ち始めていく。群青色のレヴィアタンの巨体が、海面下に潜ろうとしているのだ。その動きにはもう、古城たちに対する敵意はない。魔獣は結瞳の説得を受け容れたのだ。
「……リリスが〝夜の魔女〟だって……？」
眩しさに目を細めながら、古城は結瞳の姿を見上げた。
レヴィアタンの説得で力を使い果たしたのか、彼女の背中の翼は薄れて消えていくところだった。ふらふらと高度を下げ続け、潜水艇に辿り着く直前に、結瞳は海に落下する。
救命胴衣を抱いた雪菜が、海に飛びこんで結瞳を迎えに行く。
懸命に泳いで戻ってくる二人に手を伸ばしながら、どこがだよ、と古城は呟いた。
まるで光の女神じゃないか――と。

海の見える小さな公園のベンチに、女が一人で座っている。

若い、というよりも幼い顔立ちの小柄な女性だ。見た目の年齢は十一、二歳にしか見えない。レースアップした豪華なドレスをまとって、小さな日傘をさしている。身じろぎもせずに海を見つめている彼女の姿は、置き忘れられた美しい西洋人形を見ているようだった。

強い風が吹いたのか、公園の花壇は荒れている。まるで台風が通り過ぎた直後のようだ。しかし海は凪いでいた。空もよく晴れている。

レヴィアタンが立ち去ったことで、ブルーエリジアムに出されていた避難警報は解除されていた。〝魔獣庭園〟の復旧には時間がかかるものの、プールと遊園地は、施設の点検が終わりしだい、営業を再開するという。

来場者の三割ほどは島外に逃げたが、残りの七割は居座って、そのまま余暇を過ごすらしい。〝魔族特区〟の住人の日常は、魔獣の襲撃程度では揺らがないのだ。

たとえそれが世界最強の魔獣の襲撃であっても、だ。

やがて新たな人影が公園を訪れ、日傘の女性と同じベンチに腰掛けた。

リゾートにはあまり似合わない、地味なロングスカートの少女だった。野暮ったい眼鏡と目立たない髪型。膝の上には分厚い本を抱いている。

「――クスキエリゼの会長は、テロ容疑で拘束されたそうだな」

先に口を開いたのは、日傘の女性のほうだった。

人形のような可憐な容姿とは裏腹の、威厳に満ちた口調である。

「もともとエコテロリストの支援者として、物議を醸していた男だ。これだけ証拠が残っていれば、言い逃れも利くまいよ。操ろうとしたのが、ありふれた大海蛇という扱いになったのは、少し可哀想な気がするがな」

そう言って彼女は、久須木を哀れむように苦笑した。

レヴィアタンは神々の時代の生体兵器。神聖不可侵な化け物だ。それが一時とはいえ人間の支配下に陥ったことが判明すると、同じことを繰り返そうとする者が現れないとも限らない。だから真実は封印される。

久須木がテロの道具に使おうとしたのはレヴィアタンではなく、遥かに小物の大海蛇――そのありふれた魔獣は、特区警備隊によって駆除され、カマボコの材料として美味しくいただかれた。それが公式発表される事件の概要だ。

クスキエリゼは解体され、損傷の激しい〝魔獣庭園〟は、人工島管理公社の息がかかった企業が引き継ぐ。結果、〝魔族特区〟紘神市は、労せずして魔獣の飼育設備を手に入れることができたというわけだ。騒動の思わぬ副産物である。そして――

「今回は、第四真祖に救われましたね」

本を抱いた少女も口を開く。笑い含みの静かな声だ。

日傘の女は、少し呆れたように肩をすくめて、

「よく言えたものだな。おまえがやつらを無理やり巻きこんだんだろうが」
「そうしなければ、わたくしたちは貴重な手札の多くを失うところでした。結果的にブルーエリジアムも救われましたし」
「手札……か。勝負の相手は太史局の穏健派か？」
ふふん、と日傘の女が鼻先で笑う。
少女たち獅子王機関は、最初からすべてを理解していた。
太史局が久須木を利用したことも、彼らの狙いが藍羽浅葱の抹殺だということも。
だから獅子王機関は舞威媛をクスキエリゼに送りこみ、第四真祖がリリスと接触するように仕組んだ。被害を最小限に抑えるために、藍羽浅葱をブルーエリジアムに連れてきたというのは単なる方便だ。彼女たちは最初から、レヴィアタンと第四真祖を戦わせるつもりだったのだ。
過程はどうあれ、結果的に、事態は獅子王機関の思惑どおりに決着したことになる。
「今回の一件で、太史局には大きな貸しが出来ました。政府内の政敵の多くも失脚することになるでしょう。しばらくは、このような形でカインの巫女が狙われることはないでしょうね」
「そう願いたいものだな。可愛い教え子の命が狙われるのは、いい気分ではないからな――」
日傘の女が、冗談とも本音ともつかない口調で言う。
そして彼女は、ゆっくりと視線を巡らせて少女を見た。
「――ところで、やつはなにをしている？」

「やつ、ですか？」
本を抱いた少女が、怪訝そうに訊き返す。
日傘の女は、嫌いな食材を無理やり食べさせられた子どものように唇を曲げて、
「いるだろう？　レヴィアタンのような強敵を見かけると、嬉々として喧嘩を吹っかけそうな戦闘狂の馬鹿が」
「ああ、なるほど」
クス、と少女は失笑して首を振った。
「あの方は、今は絃神島にはいませんよ」
「いない……？」
「ええ。太史局が彼の不在を狙って事件を起こしたのか、ただの偶然かはわかりませんが……あの方にはあの方の思惑もあるのでしょう。なにしろ気まぐれな方ですから」
はぐらかすような口調で、少女が言う。
「思惑、か……このこと領地に戻ったとも思えんが」
思わせぶりな少女の言葉に、日傘の女が、細い眉を吊り上げた。くるくると苛立ったように日傘を回して、彼女は少女を睨みつける。
「聞かせてもらおう、獅子王機関。やつはどこだ」
殺気立つ魔女の視線を受け流しながら、少女は静かに顔を上げた。

膝の上に抱いた本の表紙を撫でながら、視線を遠か水平線の向こうへと向ける。
「中央アメリカは第三真祖の夜の帝国――〝混沌界域〟です」

†

「つ……疲れた……」
眠っている結瞳を背負ったまま、古城はブルーエリジアムの歩道を歩いている。
目的地であるコテージまでは、徒歩であと二、三分の道のりだ。吸血鬼化した古城にとって、結瞳の体重はたいした負担ではないが、正午近くの強烈な陽射しはけっこうきついものがある。
そうですね、と雪菜が同意する。
涼しげな彼女の見た目にそれほど変化はないが、そんなふうにあっさり認めてくるところを見ると、雪菜もそれなりに消耗しているのかもしれない。なにしろ、世界最強の魔獣と派手に戦った帰り道なのだ。これで疲れていないほうがおかしい。
ちなみに紗矢華は呪力の使いすぎで動けなくなったため、浅葱の友人の別荘でしばらく休む、という話だった。電話の向こう側でヘビーローテーションされていた時代劇のBGMと戦車の駆動音らしきものが気になったが、古城はなにも言わずに電話を切った。そのようなわけのわからない「友人」と、あえて関わり合いにはなりたくはない。

「でも、この程度の被害で済んでよかったです。〝魔獣庭園〟の魔獣たちも、みんな元気そうでしたし、プールや遊園地も普通に営業するみたいだし」
「だな……まあ、絃神島の住民は台風なんかで災害慣れしてるしな――……」
理由になっているのかどうかよくわからないことを呟いて、古城は勝手に納得する。
いろいろあったが、少なくとも島は無事だった。そして結瞳も一緒に帰ってこられた。今はそれだけで満足するべきなのだろう。
「でも、さすがに今日はもう遊ぶ気にはなれねーな……宿で一日中のんびりしてたいぜ」
ようやく近づいてきた白いコテージを見上げて、古城はホッと息をつく。
幸いなことに古城たちの宿泊予定は、まだあと一泊残っていた。今夜はもうなにもしないで、翌朝までダラダラと怠惰に過ごすのだ。
そんなふうに後ろ向きな決意を固める古城を、なぜか雪菜は不思議そうに見つめて、
「そうですね。でも、いいんですか、先輩？」
「え？」
「いえ、だって……もしかして忘れてるのかもしれませんけど――」
古城を気遣うように言い淀みながら、雪菜が言葉を続けようとする。と、
「ああ――――っ！」
近所迷惑な絶叫とともに、バタバタとコテージから駆け寄ってくる人影があった。凪沙だ。

「古城君たち、お帰り！　結瞳ちゃんも一緒だったの!?　びっくりしたよー、凪沙が起きたらみんないなくなっちゃってて　――あ、それより大変だよ、古城君！　時間時間！」

「おい、落ち着け。ていうか時間ってなんだ？」

慌てふためく凪沙を落ち着かせようと、古城が冷静に訊き返す。

そんな古城の背中で、ん、と結瞳が覚醒する気配があった。

騒々しい凪沙の声に驚いて目が覚めたらしい。さらには、

「こ、古城！　た、助けて！」

凪沙のあとを追いかけて――というよりは、なにか恐ろしいものから逃げ惑うような形相で、浅葱が古城たちのほうへと走ってくる。

いつも気丈な浅葱の狼狽ぶりに、古城もさすがに驚いた。レヴィアタンの接近を知っても、取り乱すことのなかった浅葱である。そんな彼女をここまで怯えさせる出来事とはなんなんだ、と思わず警戒せずにはいられない。

「浅葱、なにがあったんだ……？」

「来たの！　あ、あれ見て！　あれ――」

「……え？」

浅葱の指し示す方角に視線を向けて、古城はそのまま硬直した。

コテージの前の駐車スペースに、見覚えのある電動カートが停まっている。

飾り気の乏しい白一色の業務用カートだ。助手席のドアには、『ラダマン亭ズ』という店名のロゴが描かれている。カートの隣に立っていたのは、タイトスカートを穿いた若い女。プールサイドの売店を切り盛りする女店長である。

「チ、チーフ……!?」

「ああ、暁くん。お帰り。ちょうど迎えに来たところだったの。楽しいアルバイトのお時間よ」

矢瀬と世間話をしていたチーフが、古城の帰還に気づいて、おいでおいでと手招きする。

そう、あれほどの騒ぎがあった直後でも、ブルーエリジアムのプールは営業しているのだ。

そしてプールが営業しているということは、当然、売店も開いているということである。その事実に気づいて古城は目眩を覚え、

「や、矢瀬――!?」

「なんだ？　なんかよくわからんが、俺にはどうにもならねーぞ？　今回の旅費はおまえらのバイト代から出てるんだからな」

いきなり古城に怒鳴られた矢瀬が、困惑したように言い返してくる。

矢瀬の言い分は正しい。正しいのだ。悪いのはバイト前にレヴィアタンなんかと戦わされる羽目になった古城たちのほうだ。だがしかし、あれだけの死闘をくぐり抜け、島を救った代償として待っていたのがハードなアルバイトというのは酷すぎる。と、

「待ってください――！」
絶望の表情を浮かべる古城たちを庇うように、澄んだ声が矢瀬に反論した。
両腕を広げて割りこんできたのは結瞳だった。
唐突な小学生の少女の乱入に、矢瀬やチーフはもちろん、古城までもが驚いて、
「ゆ、結瞳？」
「古城さんは私と一緒に遊ぶんです。お仕事なんてダメです」
「……え？　え？」
「だって古城さんが約束してくれたんです。一緒に遊園地とプールに連れて行ってくれるって。私、泳ぐのは得意なんです。楽しみです！」
子どもらしいキラキラとした眼差しで、結瞳が古城を見上げてくる。
結瞳に敵対視される形になった矢瀬とチーフが、居心地悪そうに古城を見た。
実の妹のお株を奪うような結瞳のおねだりに、自分の立場を脅かされそうになった凪沙は、むむ、と身構える。どういうことなのかしら、と半眼で古城を睨んでくる浅葱。
古城は唖然とした表情で結瞳を見返して、
「や、約束……？」
「はい。古城さんが言ってくれたんじゃないですか。私のことを一生幸せにしてくれるって」
「一生幸せに……って……え!?」

古城は混乱しながら半歩ほど後ずさった。なんだそれは、と自問する。なんとなく似たような意味の言葉を口にしたような記憶があるが、意思疎通に明らかな齟齬があると思う。
それではまるでプロポーズだ。間違っても小学生の結瞳にかける言葉ではない。
「俺が……そんなことを言ったのか？」
古城は一縷の望みをかけて、その場に居合わせたはずの雪菜に証言を求めてみる。
雪菜なら――雪菜なら、きっと古城の無実を証明してくれる、はずだった。にもかかわらず、
「たしかに先輩は、そのように受け取れなくもない趣旨のことを言ってました」
残念ですが、と雪菜は無慈悲に言い放つ。馬鹿な、と古城は頭を抱える。
そして身に覚えのないロリコン疑惑でうろたえる古城に、結瞳は腕を絡ませて、
「えへへ、ずっと一緒です」
そう言って幸せそうに目を細めて笑った。その表情は本当に可愛らしく、せめて五年後だったらと思わずにはいられない。
「古城君……」
「古城、あんた……まさか本当に……」
そんな古城に、凪沙と浅葱が、不信感に満ちた視線を向けてくる。まあ、なんだ、幸せにな、などと無責任な励ましの言葉をかけてくる矢瀬。
つらい現実から目を背けるように、古城は視線を空へと向けた。

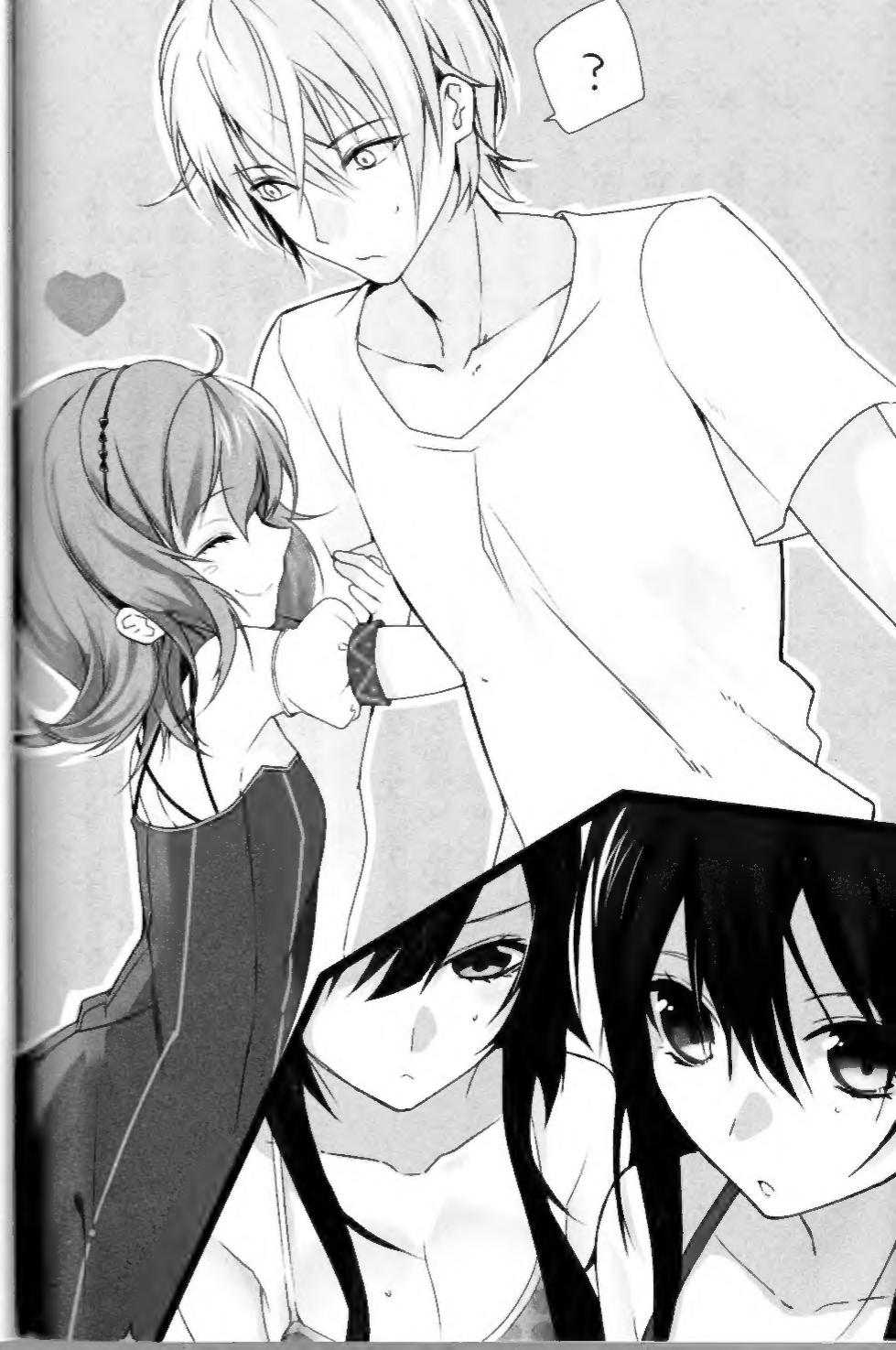
澄み切った青空を見上げていると、自分たちが深い水底にいるような錯覚に囚われる。

「勘弁してくれ――」

呟く古城の声も、その遠い空に吸いこまれていく。

〝魔族特区〟絃神島の増設人工島ブルーエリジアム――

楽園の名前を持つ島の騒がしい一日は、まだまだ続きそうだった。



あとがき

わざわざ遠くに出かけるよりは自宅でゴロゴロしていたいタイプの人間なのですが、実は旅行好きな友人たちに連れられて、有名どころのリゾートにはそれなりに行ったことがあったりします。沖縄とかグアムとかハワイとか。そしてそのたびに面白いくらいにひどい目に遭っております。飛行機に乗り損なって空港で半日くらい待たされたのはまだマシなほうで、台風が直撃して帰国日までホテルから出られなかったりとか、長い下り坂の途中で乗ってたレンタカーのブレーキが突然利かなくなって危うく死にかけたりとか。あと旅先の空港に着いた直後に担当編集者さんから国際電話がかかってきて、同行者がみんな遊びに行く中、一人ぽつんとホテルに居残って原稿を書かされたのも今ではいい思い出です。ははは……

そんな感じで今回のエピソードには、リゾートに対する私の偏ったイメージが反映されてる気がしなくもないです。旅行に行ったら苦労するもんだろ……！

というわけで『ストライク・ザ・ブラッド9』をお届けしております。

比較的重めなストーリーだった前巻に対して、今回は日常&リゾートな一冊になる予定だったのですが、蓋を開けてみれば、わりと重要な情報がちらほら出たりしてますね。

中でも特に大きなキーワードは「魔獣」でしょうか。作中でも語られているとおり、人型かどうかではなく、人類と（主に言語による）意思疎通ができるか否かで魔族とは差別化されております。吸血鬼や獣人が住んでる世界観なので、当然その他のモンスターが出てきても不思議ではない——のですが、これまで魔獣があまり登場しなかったのは、彼らが〝魔族特区〟の保護対象ではないという事情によるものです。人工島である絃神島には、そもそも在来種の魔獣というのは存在しませんし。ともあれ、今回彼らの存在を描けたことで、多少なりとも作品世界に広がりを感じてもらえたらいいなあと思っております。その結果として明らかになった、この世界が抱えてる歪みも含めて。

それから雪菜たちが水着を着たのは実は今回が初めてだったような気がします。南国の島が舞台の作品ということで、これまでは逆に普通すぎて海水浴やプールの場面を描きづらい、という感覚があったのですが、まあ、たまにはこういうのもいいかな、と。誰もまともに泳いでない（水着もまともに着てない）気もしますが、それについてはまた別の機会に。

さて、この巻が発売されるころには『ストライク・ザ・ブラッド』のTVアニメが放映されているのではないかと思います。幸運にも、素晴らしいスタッフの皆様に恵まれて良い作品になりそうな手応えを感じておりまして、原作者的にも今から楽しみだったりします。これまで本作を支えてくださった読者の皆様にも、満足してもらえる内容になっているのではないかと。

またコミック版『ストライク・ザ・ブラッド』も『月刊コミック電撃大王』誌上で連載させてもらっております。コミカライズを担当してくださっているＴＡＴＥ先生、いつもありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします！

そしてイラストを担当してくださったマニャ子さま、今回も本当にお世話になりました。デザインラフを見せてもらうのは毎回とても楽しみなのですが、この巻の子たちも新キャラ含めて全員気に入ってます。ありがとうございました！

最後になりましたが、この本の制作・流通に関わってくださった（そしてスケジュール面でご迷惑をおかけした）すべての皆様に、心からお礼を申し上げます。

もちろんこの本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗

◉三雲岳斗著作リスト

「コールド・ゲヘナ」（電撃文庫）
「コールド・ゲヘナ②」（同）